
冥獄抄散話（めいごくしょうさんわ） - 狂

銃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冥獄抄散話 - 狂

【Nコード】

N8017J

【作者名】

銃

【あらすじ】

何処までも何処までも続く果てのない無生の砂原。
暝く暝く洞のように深い無光の天空。

白と黒が織りなす絶対世界。

そこに突如広がる黒き山。

その前面を覆う巨大な背骨の針の群れ。

山に穿たれた楼閣の舞台より不吉な白き手が忍び出る。

あの手に…あたしはずっと会いたかった…。

少し物哀しげな準和風の幽玄小説書いています。
宜しかったらお立ち寄り下さいませ。

序（前書き）

はじめましてORどおもです。銃です。

銃と書いて「チャカ」と読ませます。

ネット友人に「とりあえず完結したし広めてみたら？」と言われ広めてみる事にしました。

文才ない上に処女作ですのでぼろぼろです。脈絡全くありません。

（読み返してはじめと登場人物性格違うと致命的な誤りに気づき慌てた程です。）

とりあえず3部作になる予定のものの第一部です。

ふうんと流していただければ幸いです。

（そして投稿方法が上手くいっているのかハラハラです。

システムがいまいちわかりません。）

では…。

銃・

追伸：ちなみに表紙付けるとしたら自分のイメージはこんなんです。

> i 6 4 4 3 — 1 0 4 1 <

序

序

何処までも何処までも続く果てのない無生の砂原。
暝く暝く洞のように深い無光の天空。

白と黒が織りなす絶対世界。

それはとても美しいようで、とても寂しく、とても残酷だった…。

時折砂地に顔をのぞかせる岩切れも、死の匂いすら感じられない程にその世界の無を吸い込んでしまっている…。

……ちり……。

「大丈夫か？……くるり。」

先程もよく眠れなかったのだろうか？」

前を往く「露歩き」がゆるりところらを振り返った。

「…ん…へいき。…ねむいのは、へいき…。

でも、ちょっとこあくて……。」

本当はちよつとどころじゃ全然なかった。足の先から指の先、瞳の中まで揺れていた。どうにかなってしまいそうだった。

「怖いイ？」

前を往く「縁」^{えにし}の二人が同時に声をあげ、笑いながらこちらを振り向いた。なんだかとても恥ずかしくなってその時あたしは俯いてしまった。

ゆめもさきもあたしとおなじなのに……。

あたしだけどうしてこんなにこあいんだろう？

あたしだけどうしてこんなによわむしなんだろう……？

俯いてしまったあたしを後ろから「とばねき」の腕が優しく包んでくれた。

がかじよのかおり……。

「なあに……。別に恥ずかしがる事なんて何にもないさ。

「ゆめ」も「さき」も自分の匂いがあるから平気な振りが出来るだけなのさ。

でもおまえは「在人」^{ありひと}だから自分の匂いが何も無いだろう……。だから何もないこんな世界の中じゃ、自分を見つける事が出来なく

なっちまってどうしたらいいのかわからなくなっちまうのさ。」
懐かしい「西の指」の屋敷の庭に咲く蛾禍蛛がかしよの香りと、振りじゃイ
もんっ平気だもんっと怒る「ゆめ」こと「儚ゆめノ中なか」と苦虫を噛み潰
したような「さき」こと「先逝さきゆき」の顔を見ていたら、少しだけ氣持
がほぐれてきた。

「私の背にのりなさい。

眠いのは平気なんて言ったが、おまえはさっきから蛇がのたくるよ
うな歩き方をしている見ちゃいられんよ。」

「とばねき」があたしの前にかがみこむ。あたしはその背にしがみ
ついた。

ゆめがずるいずるいと怒っている。

「露歩き」がはいはいと言って先を歩くように軽く促す。

温かい背、内側から響く強く生きる者の音

とく、とく、とく、とく……………

……………ちり。

……………ちり……………ちっ……………ちりっ。

……………ピリッ。

「――」

「……くるり？どうした？……まさかお前……」

「何か見えるのか？くるり。」

「露歩き」があたしを見据え、音のないその世界に氷のような声音を突き刺した。

ゆめもさきも「露歩き」の初めて聞く常にない声に身を固くしている。

「みえない……なんか、きこえるけど……
なんか……やぶけるようなおと……。」

「とばねき」の背が硬くなるのを感じた。

「露歩き」の顔も一瞬その瞳を大きくしたかと思うと、あたしを見据えたまま固まった。

「ゆめ」はあたりを見回し耳を澄ませ、「きこえないよね？」と「さき」の方に顔を向けた。

それに対して「さき」も肩をすくめたりしている。どうやら二人には何も聞こえないようだ。

「……そうか。聞こえるだけ……。お前には聞こえるのか……。」

「露歩き」の瞳にわずかな悲しみの色がかげった。

そんな「露歩き」の様子をみて、「ゆめ」も「さき」も不安そうな

顔をしている。

たぶんみんなの耳にはその時もなんの音も聞こえていなかったのだろう。

四人の間をかうよう無言の空気を肌を感じているだけだったのだろう。でも、あたしはその時も確かにその音を感じ続けていた。

.....ちり.....ちり.....ちりっ

「...往こう。早くここを抜けたほうがいい。

くるりのような「在人」だけでなく私達にもここは毒な所だからね。

」

「露歩き」が歩みだす。

「ゆめ」と「さき」もその後をあわてて付いていく。

「とばねき」も体の力を抜き、その後に従った。

あたしはというと、始めのうちは周囲に何か見えないか目をこらしていたが「とばねき」の内から響く温かい音に安心しいつの間にかぐっすりと眠ってしまい、目を覚ました時には「茶屋」の座敷に寝かされていた。

それがあたしの初めての旅路の記憶で、今から8000年程前のことだった。

第一章 第一節

第一節

—

「眠い。飽いた。お開きじゃ。」

ぬし様のこの台詞を合図に何百年と続いた宴は終わり、「西の指」の御殿は短い休息の時を迎える。

ぬし様は眠りに就かれ、御殿で働く舞手楽師や下男下女達は或る者は里へ、或る者は眠りに、或る者は旅に、或る者は祝言にといったように自分の時間を持ち自由気ままに過ごすのだ。

「…あたし達は、違うけど…」

隣で楽器の手入れをしていた「崩山^{ほろやま}」が、その手を止めてこちらを見た。

「そつかあ。くるりぬし様の命で「茶屋」まで働きに出なきゃならないんだっただけ…。かわいそうに…」

「…崩山。」

「何？」

「…顔、笑ってるよ…。」

「…そりゃあ目の前に休みがあるんだものオ。あんたの身の上なんてあたしにや関係ないし…。」
嬉しそうにするなつてのが無理なものよオ。」

楽器の手入れをしている「崩山」の手がせわしなく動く。

「崩山」にとつて今回の休みは初めての休みで、そのわずかな時間（といってもゆうに三百年はあるが…）をいかに過ごすか考えるだけでも天にも昇る気分だったのだ…。」

くるりは軽く溜息をつき、膝に乗せた腕にあごを乗せて御簾の隙間から見える庭に目を向けた。

蛾^{がかじよ}禍^が蛛^{じよ}の花の恐ろしく甘く悲しい香りに誘われた蟲けら共が、宴で散った酒粒に魅せられてあちらこちらで狂ったように舞っている…。
いや、きっと本当に狂ってしまっているに違いないのだが…。」

「よしつ。手入れも済んだしとりあえず少し寝るかね…。」
もうずっと弾いて踊ってばかりだったから疲れちゃって疲れちゃって…。」

「崩山」は手早く愛器のタルカ（琵琶に似た弦楽器）を壁に立て掛けるとおもむろに床の間に進んでいった。
結び上げていた髪を無造作に解き、上着を己の体にかけて横になる。

「じゃあ、頑張つてね。また次の宴に会いましょ。」

「崩山」は軽く手を振り、あくびを一つして目を瞑った。

「…そのまま寝るの？」

くるりは膝を抱えたままの姿勢で尋ねた。

「…そうだけど？ここの御殿はいつもあつたかいし…」

…あつ！もしかして宴が終わると急に冷え込むとか？

「崩山」はおもわずわずかに顔を起した。

「…ううん、寒くはないよ。」

でも今日は湯が使えるから使ってから寝ればいいのになつて…」

「崩山」は半身を起こした。

「何？それ…」

「あのね…。宴の後の一日だけぬし様の湯殿が使えるの。」

ぬし様からのご褒美。

…一日でここにいる皆が皆一斉に入ろうとするからすごく混むんだけど…」

「崩山」は床の間に立ち上がった。

「ぬし様の湯殿…皆一斉って事は、まさか……………混浴っ？」

「うん…混浴。」

「崩山」はもう部屋にはいなかった。

「何でもっと早く言ってくんないのよ。お背中お流しいたしますう。」「露歩き」様ア。」「

庭を舞う蟲けら共の羽音よりも小さくなっていく「崩山」の叫び声に耳を傾けながら、くるりはまた一つ溜息をついた。

二

「…くるりか、どうした？湯殿に行かないのか？」

「「露歩き」こそ…。」「

くるりは「崩山」の部屋を離れると、悲愴殿ひつてんの東屋にいる「露歩き」の元を訪れていた。

くるりが訪れた時「露歩き」は庭先で己の得物の手入れをしていた。その傍らには「ゆめ」がまさに夢の中にいるようだった。

「貪主様の末の湯は体の芯を抜く…。」

旅に出るといふこの時に私は入る事は出来ない。」「

「そっか…。」

くるりは「露歩き」の隣のゆめを見た。

「ゆめ」の眼尻に光るものがある。よく見ると少し目もとがはれて
いるようにも見える。

「ゆめ…泣いたの?」

「露歩き」は何も言わない。ただ黙々と己の得物と向き合っている。
くるりは横たわる「ゆめ」の後ろに自分も寝転がり後ろから「ゆめ」
を抱きしめた。

柔らかくて温かい「ゆめ」。背に耳を当てると内から生きる音が聞
こえてくる…。

今はもういない「とばねき」のように

「ゆめ…死ぬの?」

「…いずれ。」

「「露歩き」も?」

「…いつかは。」

くるりは顔を上に向け「露歩き」の顔を眺めた。

柳のように形の整ったりりしい眉の下にある深い海のように底の見
えない蒼眼。

その瞳を縁取る長い睫毛は、夕日を浴びて波間に映る照り返しのよ
うに金色に輝いている。

くるりにはとても信じられない事だった。

この綺麗な瞳がいつかは醜く腐り果て、眼窩の奥に朽ちて消えてし

まうという事が…。

「「露歩き」…。」

「何だ？」

「…あたしは…どうなるのかな？」

「露歩き」は得物から目を離し、くるりにその顔を向けた。

「…わからないな…だがお前達には「縁」がある…。」

生人である「いきびと 儚ノ中」、死人である「しびと 先逝」、そして在人である
お前…。

お前達は三人で一つの理を紡いでいる。

「儚ノ中」が死ねば、お前達を結び付けていた「縁」は途切れる…。
そうしたらお前達は離れていく…きっと己の意思にかかわらず…。
私にはそんな気がする…。」

瞳に何の色も映さず「露歩き」は淡々と語った。

…何か感じていた予感…。

胸の中に疼くほころび…。

もしかしたら…ゆめの感じているものと
あたしの感じているものは…。

「「露歩き」…。」

「何だ？」

「あたしの事…忘れないで…。」

…そう、あたし…この言葉を伝えたかったんだ…。

思わずほうつと息をついていた。

「露歩き」の瞳の色は変わらない。

けれど、「露歩き」のその長く綺麗な指が伸び、あたしの髪を撫でた。

あたしが寂しい時、あたしが泣いている時、いつもそうしてくれたように…。

何度も、何度も、やさしく、やさしく…。

嬉しいけれど、とても悲しかった…。

だって、きっと「露歩き」とこうした時を過ごせるもの…あと少しだけだから…。

【中置】湯殿へ走る「崩山」（前書き）

【中置】は本編と少し離れたような感じのおまけ話です。
途中から全くなくなります。

【中置】湯殿へ走る「崩山」

【中置】湯殿へ走る「崩山」

—

ああ、なんて事。遠くから眺めているだけで精一杯だと思つていた「露歩き」様とまさかいきなりこんな大胆な機会を持つ事が出来るなんて。

部屋を出た「崩山」は廊下を駆け巡っていた。

乱れた髪の下に必死の形相をのぞかせ、着物は内着しか着ていないというまるで火事場で焼け出された人のような出で立ちで…。

これを見た何人かの者は思わず「崩山」の来た道を振り返り、訳も分からずその後を追いかけた。

そしてその一団を見た者がまた後に続くという…何だか可笑しな芋づる競争が勃発していた。

くるりももつと早く教えてくれればいいのに…。

ほんとぼおつとした子なんだから、やんなっちゃう…。

あゝ、きつと朝から開いてたんだろうなア…。もう夕方でしょう？まだいるかなあ…。

もしかしたら、もうどこぞの女と心通わせどこかの部屋で懇ろに…なんて事…。

「いやア~~~~ツ。しぬウ~~~~。」

「崩山」の心の雄叫びを聞いた何人かがまた芋づるの芋に加わった。

貪主様の湯殿「浮魂癒」は貪主様の寢殿の南に位置するそれだけで大きな建物だった。

宴休みの間以外常に建物から桃や瑠璃色の芳しい湯気を漂わせ、その匂いを少し嗅ぐだけで体の疲れが和らぐという。

「崩山」はその中へ駆け込んでいった。

「崩山」に続いていた芋達は何だ風呂かとそこを離れる者やそうか風呂かとそのままそこに吸い込まれていく者がいた。

「崩山」は脱衣所を駆け過ぎながら内着をその辺の籠に放り投げて素っ裸になりその勢いのまま湯殿へ駆け込んだ。

湯殿は外から見たよりもさらに広い空間になっていた。

様々な色の岩山が何処までも立ち並びその間を様々な草花と水が彩っている。いや、水からは湯気が出ているからおそらくあれが全て温泉なのだろう。

男女入り乱れた人々がその中に浸かったり泳いだり、よく見ると水辺脇に点在する小さな東屋で素っ裸のまま酒を酌み交わしたり踊ったりしている。まさにその様は極楽だった。

「崩山」はそんな極楽に目もくれず素っ裸のままその中をひたすら突っ走る。

「おっ…「崩山」！いひひ、思った通り…顔だけじゃなく体つきも随分色っぽいねえ…」

なあ俺と…。」

「おどきッ！」

「崩山」の右裏拳が下男のかめかみに決まり、下男はそのまま東屋

まで吹っ飛んだ。

「ひよほうつ…良いっ良いねえっ！たわわに揺れるその胸っ…まさに極楽ッ。」

のう…老い先短い（？）儂にひとつ

「引導ならくれてやるよッ！」

「崩山」の（幻の）左裏拳が厩番の老人の顔面に決まり、老人はそのまま湯殿の岩山の茂みに吹っ飛んだ。

いない、いないわ。どこにいるの？「露歩き」様ア…。

「崩山」は桃と瑠璃色の湯気の中をひたすら突っ走る…。

けれどそんな視界の悪く足場の濡れた所を探し物（？）をしながら走っていると、ほらやつぱりお決まりの…。

「わッ…ぎゃあアッ…ブうぷ！」

「崩山」はとても色っぽい女のある悲鳴には似つかわしくない奇声を発し、湯から上がりかけていた人に躓いてそのまま湯の中に頭から落っこちた。

「いった…ちよっとお前こんなところで走るなんて…って大丈夫か？」
真っ赤な湯の中には「崩山」がトカゲの串焼きのような形をしてうつぶせにぶかぶかと浮いていた。

落っこちた時に運悪く湯の底に脳天を叩きつけたのだ…。

その後、「崩山」は百年程「露歩き」のお背中を流したりする幸せな夢を見ていたという…。

【中置き・終わり】

第一章 第二節

第二節

—

何処までも何処までも続く果てのない無生の砂原。
瞑く瞑く洞のように深い無光の天空。

あたし達はまたこの地を訪れていた…。
今回で、もう何度目になるのだろうか…。

両の指で数え切れない程ではなく、かといって片手に収まる程の数
でもなかったような気がする…。

とにかく、もう何度も訪れた事のある道筋となっていた。

初めてここを訪れた時のように体の芯まで震えて一睡も出来ないな
どというよな事は

なくなっただけで、この土地の無力感はやはりくるりを不安にしてい
た。

「ほんとにここは毎度毎度ツ…！」

イライラするなアツ…もうツ！

寒くないのに何だか寒い…！

何の音もしないのに何だか耳がざわつくうつ…！」

一番後ろを歩く「丸嬰^{まるえい}」が今回何度目かになる癰癤を引き起こし地
団太を踏んだ。

「うるさいなあ…またですかあ？君は…」

この旅をするのは今回が初めてじゃないんでしょう？

だったらこうなる事はわかってたでしょうに…？

全く…わかってるんなら始めから来なければよかったのに…。

なんで来ようなんて思っかなあ…。」

「さき」の隣を歩いていた「堯湖^{たかこ}」がうんざり後ろを振り返った。

「あんたこそうつさいうつさいうつさあゝい！

てか生意気なんだよなッ！あたしより後に御殿に来たくせに！

たかが貪主の護兵の分際でさっ…偉ぶるなつての！」

「たかが護兵？…はッ…じゃあ君は何なんですかね？

御殿の中じゃ僕の知る限り大した仕事もしてないただの穀潰しでしよう？

それにですねえ…護兵は貪主様をお守りする御殿の中でも一番重要な役割を任う者の事であつて…。

まあ何です？あまり僕を怒らせない事です…。

でないと貪主様に君を追い出すよう進言するかもしれませんよ？」

「その言葉…そっくりあんたに返すよ。」

「…っな！」

「あはははっはは…！」

たまらず「ゆめ」が腹を抱えて笑いだした。その隣で「露歩き」も肩を震わせている。

その後ろを歩く「さき」も着物の袖で口元を覆いながら薄く笑い出した。

そんな三人を見て「丸嬰」はそっぽを向いて澄ました顔をし、「堯湖」は狐につままれた

ような顔をしてどうして皆が笑っているのか分からず途方に暮れている。

そつ…たぶんぬし様は護兵の「堯湖」でなく穀潰しの「丸嬰」の進

言を聞くであろうから…。

今では御殿に住む殆どの人が知らない事だけれど、「丸嬰」はぬし様が今の「西の指」の

御殿に住む前からの付き合いだという。

大した仕事をしていないのもぬし様の重臣だからとか客人だからだとか監視役だからだとか色々いわれている。

つまり少なくとも「丸嬰」は、「堯湖」達より全然ぬし様に近い関係にあるらしい。

だが「丸嬰」の姿はとてもそんな風には見えないから「堯湖」のように侮って接する者が殆どだ。

薄紫の肌に長いぼさぼさの銀髪を頭のでっぺんで一つに結び、ひじ丈ひざ丈の短いぼろぼろの着物をまとった童女のような姿。しかも下の前歯が一本欠けている。

けれどちゃんと人を見る事の出来る人ならきつと気付くだろう…。時折見せるその容姿に不釣り合いな修羅の宿るあまりに深く鋭い眼差しに…。

そっついえば昔…「露歩き」も…。

「え…ちよっ…待って…何で皆笑っているんです？

…っ…ええッ…「露歩き」様がお笑いにつ？…初めて、見ました…。」

「堯湖」は思わず「露歩き」に…見とれた。

「おおっと…最近とみに感情を示さなくなったなとは思ってたけど

…なんだ「露歩き」、

あんたまだまだ可愛く笑えるじゃないかあ？

ん〜澄ました顔も良いけどそうした顔もそるねえ…。

またまたあんたに心と体を許してしまいそうだよオ…。」

「丸嬰」は両肘を抱きしめ片足を内側に少し折り曲げ体をくねくねとさせた。

みすばらしい童女の姿でしなを作るその様は、なんだかとても可笑しい。

「なつ…君つ…いい加減にしまえよ？…僕だけならまだしも「露歩き」様まで侮辱する

様な事を……そもそも君のような小汚い童女風情が「露歩き」様に相手にされる訳がな

いでしょう？全く…馬鹿も休み休みに…というかも馬鹿を言うのは止めたまえつ…。」

「丸嬰」はそんな「堯湖」の物言いを無視してまだ体をくねらせいる。

くねらせながら一瞬「堯湖」の後方にいる「露歩き」に意味ありげな視線を送った。

「露歩き」というとまたいつものような、いやいつも以上に凍りついた湖面のような瞳に戻りそんな「丸嬰」の視線を受け止めている。

けれどその右腕は何か言いたくて堪らない瞳を爛爛とさせた「ゆめ」の左腕をがっちりと確実に掴んでいた。

あ、やっぱり「ゆめ」も思い出してる…。

「…とにかく、こんな処で立ち止まっても仕方がない…先を急ごう。」

この状況をさつさと切り上げるように「露歩き」がさつそうと歩き出す。

もちろん「ゆめ」の手を引つ張って…。

「ゆめ」は物足りなそうな顔をしてしぶしぶ後に従った。

そんな様子をみて「丸嬰」はほくそ笑み歩き出す。「堯湖」も「露歩き」が歩き出したのを見て、

まだ煮え切らない様子だがその後に従った。

「堯湖」は「丸嬰」の事悪く言うけど、本当はいてくれて安心してゐるんじゃないかな…。

隣を通り過ぎまた「さき」の隣を歩きだした「堯湖」を見て、くるりはふとそう思った。

たぶん「堯湖」だけじゃない…。「ゆめ」も「露歩き」も何だかいつもの旅路よりも落ち

着いた感じがする。「丸嬰」は不思議と人を温かくするような人だから…。

でも…「丸嬰」が旅に付いてくる時には必ず嫌な事が起きた…。

くるりは一番後ろを歩く「丸嬰」を見た。「丸嬰」はそんなくるりの心を見透かすかのよ

うにその眼に修羅を宿らせ薄く笑い返した。

それは童女とは思えないぞつとするような微笑みだった。

そう…「とばねき」が死んだのも、「丸嬰」がいた時だった…。

.....・ちり.....

.....きた.....

「「露歩き」...」

「どうした？くるり。」

「もうすぐここを抜けるよ...」

「...そうか、聞こえ出したか...」

「...うん、聞こえる...」

くるりは瞳を閉じて耳を澄ます。そんな様子を「丸嬰」を除いた皆が不安そうに見つめた。

「丸嬰」はというと目を細めて獲物を狙うかのような面持ちでくろりを見つめた。

何か...紙を破いている音...。たぶん誰かが破いている音...。どうして貴方は「それ」を破いているの？

「それ」には何が書かれているの？

くるりは瞳を開けまた前へ進み出す。皆もその様子を見て前へ進み出した。

どうして貴方はこんな寂しい所に...

くるりの頭に一瞬強い光がよぎった...。違う...光じゃない。

それは朧げな光を受けた人の両の手。その指先から何か白い紐の様なものが...

……ちり……

それが、貴方の破いているもの？

「くるりっ……」

気づくとくるりは砂の上に膝を付いていた。顔を正面に向けると「露歩き」の顔が目の前にある。

不安そうな瞳……

くるりは「露歩き」の顔に手を伸ばしその頬を撫でた……

「もう大丈夫だから……「露歩き」。たぶんまたちよつと不安になっただけだと思うから……」

「そうか……」

「露歩き」がくるりの両腕から手を離れた。

というかこの瞬間までくるりは掴まれていた事にも気付かなかった。掴まれていた所がとても温かい……

「乗りなさい……」

「露歩き」が己の得物を前に背負いなおし、くるりの前にその背をかがめた。

「……でも、あたし昔より全然重いし……」

「そんな細い腕の娘の重さなんてたかが知れてる……。乗りなさい、くるり。」

「露歩き」は背を向けたまま答える。

「ゆめ」がずるいずるいと騒いでいる。……そういえば昔もこんな事があったよう……

「ずるい……」

「堯湖」もぼそりと呟いた。

「…それはどっちが？「露歩き」？それともくるり？」

「どっちがってそれは…そのオ……」

「って君イッ…僕に何を聞いてるんだッ？」

「さあ…何をしようねえ？」

「丸嬰」がうすら惚ける。

「ていうかお前さあ普通違うんじゃない？」

「違う？何がですか？」

「堯湖」は「丸嬰」に顔を寄せた。

「だってお前の尊敬する「露歩きサマ」がくるりを背負ってお前は
何もしないってさあ…」

本来なら下っ端のお前から真っ先にする事

「「露歩き」様アッ！待ってください！そんな事は僕がッ……」

「堯湖」が叫んだ時には「露歩き」はもうくるりを背負ってはじめて
の一步を踏み出している

所だった。

「堯湖」はがっくりとうなだれた。

とく、とく、とく、とく………

温かい音。生きる音。あたしには無い音…

「露歩き」の背に耳をあてその音に聴き入る。

鼻先では「露歩き」の白く柔らかな髪が揺れている。

「露歩き」が歩く度にその体の中の鍛えられた筋肉が動く。
あまりに強く眩しい生きる者の力…

くるりはまた安心して深い眠りの中に落ちようとしていた。

………びりッ………

「……っ。」

肌に触れる「露歩き」の生の力よりもはるかに強い死の力が近づいてくる…。

何か…ある。

くるりは「露歩き」の背から耳を離して前を見つめた。

これまで何もなかったはずの白い砂原の中に突然巨大な黒い塊が浮かんでいた。とても不

吉な感じのする巨大な塊…。思わずくるりは体を強張らせた。

「どうした？くるり…。」

「…ううん、何でもない。」

次第にせまるその塊から、くるりは一瞬たりとも目が逸らせなくな

った。

始めはただの黒い塊にしか見えなかったそれも、近づくにつれて大きな岩山である事がわかってきた。磨かれたように滑らかな黒光りする巨大な岩山。

まるで川の流れのようにぐねぐねとした模様のある岩肌が天に向かって幾本もの峰を伸ばしている。

それは自然のものにも、まして人の手によるものにも見えなかった。

……ちり……ちっ……ちりっ。

何？…これ。

くるりは目の前に広がるその岩山の全景に息をのんだ…。

骨、骨、骨、何万本はあるかという沢山の骨が目の前に広がっていた。

しかもそれは全て象のように巨大な動物の背骨で砂原の中に突き刺さっている。

まるで針山のように…。
そしてその針山を包み込むように先程から見えていた黒い岩山が後ろにそびえていた。

これが…死の匂いのもとだ…。

くるりは直感しそして周りを見渡した。「露歩き」はただ前を見据えて歩き続けている。

その隣の「ゆめ」も同じだ。後ろを歩く「さき」も「堯湖」も二人で何か話をしている。

「丸嬰」だけはくりりと目が合うとくるりの見ていた岩山の方角を眺め、胸の前で片手のみの合掌をし頭をわずかに下げた。

見えているのは、あたしと「丸嬰」だけ…。

くるりはまた岩山に視線を戻した。

よく見ると黒い岩山の中に同じような色をした木造の建物が埋め込まれるように造られている。

それは何本もの柱で支えられた大きな土台の上に作られたぼろぼろの巨大な楼閣だった。

所々瓦が剥がれ人のいる気配は感じられない…。

どうしてこんなものがここに…。

一体何の為に…。

もう見るのはやめよう…あたしも皆と同じように知らないふりをしてこの場を通り過ぎよう…。

くるりがそう思った時そこにその人の姿を初めて捉えた。

ぼろぼろの楼閣の中層に位置する他より少し前に出た舞台。
その舞台には屋根がありそこから何本もの簾のような紐が下がって
いた。

その簾のために中は見えない。

けれどその簾の間から白い二本の腕が伸びた。

白い二本の腕は同じように白い紐のようなものを持ち舞台の下へす
るすると落としていく。

.....ちり.....ちっ.....ちりっ。

さつき頭の中によぎったあの手だ…。

くるりがそう思った瞬間その二本の手が突然動きを止め簾の中へと
消えた。

向こうも、あたしに気づいた。

何だか胸の奥がざわついた…。何かに急き立てられるような不思議
な気持ち…。

どうしたんだろう、あたし…。思わず強く「露歩き」の背中に顔を
押し付けた。

「くるり？本当に大丈夫か？」

「露歩き」が背中に向けて尋ねる。

「……ん、大丈夫。大丈夫だからそのまま早く行って…。」

くるりは「露歩き」の背中に顔を押し付けたまま絞り出すように答
えた。

もちろん「露歩き」にもくるりがいつも以上に何かに動揺してい
る事には気づいていた。

しかしそれに対して自分は何も出来ず、またこの砂原を抜ければくるりが安心出来るという事も知っていた。

だから「露歩き」はそれ以上何も聞かず先程よりもほんの少しだけ足を速めて歩き始めた。

あそこは禍々しい処…。決して無闇に近づいてはいけな
い処…。

けれどあの手は恐ろしいものじゃなくて…。

おそらく岩山が見えなくなったからだろう…。

そこでくるりはまた深い眠りの中に落ち始めた。

あの手に…あたしはずっと会いたかった…。

くるりはそこで完全に意識を失った。そして次に目を覚ました時、そこはすでに「茶屋」の座敷の中だった。

こうしてくるりの最後の宴休みは始まった。

【中置き】「露歩き」、「丸嬰」に敗北する（傳ノ中談）（前書き）

【中置き】、おまけ的要素のお話です。

う……しかしこれはまた……。

やっぱり今と皆微妙にキャラが違う……。

出来ればご容赦ください。

銃・

【中置き】「露歩き」、「丸嬰」に敗北する（夢ノ中談）

【中置き】「露歩き」、「丸嬰」に敗北する（夢ノ中談）

—

「ああ……。あんたとももうすぐお別れ。寂しいねえ……離れたくないわアッ。」

「丸嬰」が今回何度目かになる対「露歩き」腕つかみを決行した。まるえい
そんな「丸嬰」の行動を予測してか「露歩き」はひらりとその腕をかわし何事もなかったように歩き続ける。

「……くっ……ちよこざいな。」

でもそんな連れない所も素敵なお人……。うふっ。」

「丸嬰」はくねくねしながら「露歩き」の周りを跳ねまわる。

今回でこの旅も三度目。

これまでは「露歩き」に「くるり」と「さき」、それと「とばねき」に私を加えた4人で旅をしてたけど今回は何故かこの小汚い齒抜け娘が参加。

なんか旅が楽になるような事してくれるのかなと始めはちよつと期待してたけど、役に立つ所か

邪魔になるばかり……。どうしてぬし様はこんな奴の同行を許したのかしら？

ゆめは後ろから「丸嬰」を睨みつけた。不平はまだまだ止まらない。すぐ疲れただの、あっち行こうだの、あれ買ってたの、私と同年位なのに我儘ばかり言っちゃってさ……。

「茶屋」でも何の仕事もしないでどっか行っちゃったり昼寝ばかりしてるし…。

そして何より許せないのは「露歩き」に色目使う所。よくもまあその歯抜け姿でいけしゃあしゃあと…。
許せないわ…もう我慢の限界よっ！

ゆめが「丸嬰」に文句を言おうとしたその時、それより少し早く「露歩き」が口を開けていた。

「「丸嬰」…。」

「なあに？「露歩き」。」

「丸嬰」が明らかに媚を含んだ声で「露歩き」の呼びかけに応える。

「私はお前の事が好きではない…。これからもお前の事を好きにならない。」

だからこれ以上私にそのような振る舞いをして無駄だ…。」

よオっしい！よく言っただっ！「露歩き」！

ゆめは左手で拳を作り脇腹の所にしゅつと引いた。

その動作の意味を知らない「くるり」がゆめを不思議そうに眺めている。

「…そんな…ひどい。そんな言い方しなくても…。」

「丸嬰」はとても傷ついたような顔をして両手で頬を押さえたが、そんな「丸嬰」を見ても「露歩き」はその表情を全く変えずまた前を見据えて歩き始める。

確かに…。ちよっときつい言い方と態度かも…。

いくら嫌いでもそんなはつきりと女の子に言うのはどうかなあ…。

ん、どうも「露歩き」ってその辺駄目なのよねえ…。

「丸嬰」はその場で顔を覆い下手糞な泣きまねまで始めてしまった。
「露歩き」はもちろんそれでも足を止めない。ん、非道い…。

仕方ないなア…ちよつと声掛けてあげるか…。

ゆめが「丸嬰」に近づきその肩に触れようとしたその時、「丸嬰」は何かつぶやいた。

「…まで。」

「え？何？」

儚ノ中が聞き返す。

「思い通りにならないなら、力づくで手に入れるまで…。」

「…え。」

次の瞬間、「丸嬰」は「露歩き」の正面に立っていた。

さすがに「露歩き」もこれには驚き足を止め「丸嬰」を見つめる。

「あたしと勝負しろっ！」

「勝負？」

「露歩き」が聞き返す。

「そうだ…。あたしと勝負だ。それであたしが勝ったら…そうだなあ…っよし！」

あたしの旅の垢を落として添い寝しろ！」

そこにいる「丸嬰」以外の全員が目を点にした。私からは見えなかったけどたぶん「露歩き」もあつけにとられた顔をしていただろう。
「露歩き」のあつけ顔、見たかったなあ…。

「…無益な事はしない…」

「露歩き」はそれだけ言ってまた先へ往こうとした。「丸嬰」がその腕を掴もうとする。

「露歩き」の動きが止まった。「丸嬰」に腕を掴まれたのだ。

「露歩き」はその手を見つめ、そして「丸嬰」を見つめた。それは信じられないものを見るような瞳で…。

まさか「露歩き」、予測してたのに避け切れなかったの…？

皆の間を緊張した空気が流れる。

「お前…。」

「馬鹿だねえ…あんたも。だけどそれ故にあんたはぞくぞくする程美しい…。

大丈夫、あんたに無益は無いよ…。あんたが勝ったらちゃんと見返りはあげるから。

そうだねえ…一番めんどくさい「器」をあんたにあげるよ。それでどう？」

その言葉を聞いた「露歩き」の瞳が一瞬にしてきつい色を帯びた。それは森の中で餓えた獣に狙われていた時に見せた色…。

そう…何かを殺す時の「露歩き」の目の色だった。

二人が何の話をしているのかよく分からなかった。

でもそれは「露歩き」にとつてとても重要な話だったみたい。

だって「露歩き」のあんな鬼気迫った顔を人に向けるところ見るの、初めてだったし…。

「その話が嘘だとしたら？」

「露歩き」が尋ねる。

「疑るねえ…そんな時はあたしの「御魂」^{みたま}を取ればいいじゃん。それでどうよ？」

「…いいだろう。」

御魂！

さすがにそれはわかった。どういう流れかはよくわからないけど、「丸嬰」が自分の命を賭けてる、その事だけはわかった。でも、「露歩き」を相手にそんな事…私はすごく怖くなった。

「おいおい、二人共。そんな物騒な事はお止め…。」

あとちよつとで御殿なんだ…。仲良く行こうよ。」

事の成り行きを見守っていた「とばねき」がさすがに二人の間に割って入った。

そつ…：そうよ、そうよ。「とばねき」の言う通りよ。

仲悪いとはいえ三百年も一緒に旅してきた仲じゃない。

その最後の最後に命の取り合いなんてそんなの…。

「「とばねき」、下がれ…。巻き込まれたいのか…？」

「露歩き」が「丸嬰」だけを見つめて「とばねき」に冷たく言い放つ。

駄目だ…。なんか知らないけど本気になっちゃった。

ゆめはため息をついた。

長閑に芦の茂る畦道の中で「露歩き」と「丸嬰」が適度に距離を保ちながら対峙している。

その二人の中間位の位置に「とばねき」は立ち、その後ろに私達三人が控えていた。

「…とにかくだ…。相手に参ったと言わせる、もしくは私達が見て勝負あつたと思えるような状況になつたらそこで終わり…。いいね、二人とも？」

「うん、いゝよオ。」

「……………」

「いいねっ？「露歩き」っ！」

「…ああ。」

「とばねき」が軽く溜息をつく。そうなのよねえ…、「露歩き」つて結構すぐ周りが見えなくなっちゃうのよねえ…。普段はあんなに冷静なのに…。

「では、はじめっ！」

「とばねき」が合図をする。二人はその後にも動かない…。たぶん相手の出方を窺っているんだ。

私はお互いの様子をよく観察してみた。

「丸嬰」はというと胸の前で腕組をし、片足をもう一方の足に引っかけただらしなく立っている…。ってあんた！それじゃあ手も足もすぐ使えないじゃないの？

しゃきつと立ちなさいよ！しゃきつとっ！

「露歩き」はというと、自然に足を開いた状態で両手を両脇にだらりと下げている。

けれどその右手には「露歩き」の得物の銃剣が握られていた。

「露歩き」の銃剣は普通の銃剣とは違って刃の部分が銃の先からでなく銃の長い筒の背にくつついたような形をしている。

よく分からないけどぬし様から頂いたものらしい…。って女の子相

手に武器使うの「露歩き」っ！しかも銃に剣の得物って…。
なんか「露歩き」…女の子に疎い以前の何かが足りないような…。
…非道い。

一瞬何が起きたのかわからなかった。というか事が起きた後もうしてそうだったのかよくわからなかった。
だってあまりにも一瞬で勝負がついてしまったから…。

私が理解出来ていたのは「露歩き」が右足を少し下げるまで…。
次の瞬間たぶんその右足をばねに「露歩き」が前へ踏み込んだんだと思う…。

「露歩き」の姿が一瞬揺らいだかと思うとその場から消えて…次の瞬間激しい金属音が二度鳴り響いたかと思うと私達の目の前に砂埃をあげて二人の姿が現れた。

「ああ…だから歯が無い…。」

「さき」が隣でぼりと呟く。ってこの子…今の攻防が見えてたのか？

私は砂埃の中から現れた二人の姿を見て自分の目を疑った。

だって「露歩き」が戦いの最中に片膝折ってる姿なんて初めて見たんだもの！

しかも「丸嬰」が「露歩き」の手に握られた銃剣を「露歩き」の手ごと踏んづけて地面に押しつけて立ってるし…。しかももしか腰に手を当てて不敵に笑って立ってるし…。

…嘘でしょ？でもこの状態は間違いなく…。

「勝負あり！」「丸嬰」の勝ち！」

「とばねき」がその空気を打ち破るように声を上げる。

「あたしの勝ちィ」。

「丸嬰」はそのままの体勢で少し顔を前に突き出し「露歩き」の額に軽く接吻した。

いやァー見たくないっ！

そしてその次の瞬間くるりが拍手をし出した。わあすごいすごいってくるり、あなたそれでいいのっ！

こうして「露歩き」は「丸嬰」に負けてその代償を身をもって払う事になったんだけど…まあそれはまた別のお話って事で…。

置き：終】

【中

第一章 第三節

第三節

—

「今回もぐつすりでしたねえ…くるりさん。」

座敷から炉端に顔を出すと「あかつく閑伽注」がこちらに向かってにっこりと微笑みかけた。

「みんなは？」

くるりが尋ねる。その間も「閑伽注」は囲炉裏に掛けた茶釜の中を掻き混ぜている。

「んゝ、ゆめさんはいつものとおり「だなんえん墮烏苑」までのお使いに出てますよ。」

それでさきゆきさんには茶屋の前にたってもらっている。

本当はまるえいさんにもお願いしたんだけどぎづいたらいなくなっちゃってて…。

あとはね、つゆあるきさんとたかこさんに「よつやん厭山」まで薪をかり出しにいらしてもらってる所…。で、あたしは茶釜をみてるってかんじ…。」

「閑伽注」は一息にみんなの今をくるりに告げた。

そして茶釜からその中身を柄杓で掬い

小さな湯呑に移し替える。

「さっ…飲んで、くるり。今回も飲めればらくになります。飲めればね…。」

「關伽注」が上目づかいに悪戯な笑みを浮かべながらくるりの方に向けて湯呑を差し出す。

くるりは「關伽注」の前まで進み出てその湯呑を受け取り一息に飲んだ。

「……………」

「あ、ひと息。そのようすだと今回も特にかわらないってかんじ…？」

「關伽注」がややつまらなそうにくるりから空になった湯呑を受け取りながら尋ねる。

「うん。熱くもないし冷たくもないし味もしない。変わらないよ…」

「くるりは淡々と答えた。」

「そう。珍しいといえば珍しいんですけどねえ…」

それもつづきますと飽きますからねえ…」

今回こそはなにか変わらなにかときたいしてたんですけどねえ…」

「關伽注」は湯のみの縁をなでながらぶつぶつと呟く。

「あたしは何をしたらいい？」

くるりが「關伽注」に尋ねる。

「そうですねえ…。さきゆきさんとおなじように表にたっていてください。」

それでだれか来たらあたしに声掛けてください。湯をいれますからね…」

今はそうしててください。今はね…」

「今は？」

「關伽注」のやけに念を押す「今」の言葉にくるりは尋き返す。

「はい、今ですよ、今。つまり後ではまたちがうという事です。」

それについてはまるえいさんから話があります…。だから後です。」

それだけいうと「關伽注」はくるりから茶釜へと視線を戻した。

くるりも訊く事は訊いたのでとりあえず言われたとおり表に出る事にした。

くるりは茶屋の表に出た。

やや高地に位置する茶屋からは長閑な田園風景がどこまでも見渡せる。

耳を澄ませば鳥や獣の囁きと草木の風に遊ぶ音が優しい。

辺りを照らす日差しと黄色の暖幕がさらにその風景を和やかなものになっている。

今起きたばかりのくるりでさへも思わず欠伸をしてしまいたくなるような空気だった。

「おはよう。」

茶屋の前に立つて、いやお客の座る茶屋の縁台に腰掛けていた「さき」が前を向いたままくるりに声をかけた。

「おはよう。」

くるりも「さき」の呼びかけに答えその隣に腰掛ける。

「今回はかなり早かった。」

「何が？」

「起きるの……。」

「うん……。」

「……。」

「……。」

「何で？」

「わからない……。」

「そう……。」

「……。」

「……。」

「さき」はいつもあまり話さない。それにむすつと怒ったような顔をしている。

「さき」をよく知らない人が「さき」と話をするときみんな難しい顔をして離れていってしまう。

見た目だけでなく物言いでも人を拒絶するような態度をとるからだ。あたしや「ゆめ」はこの世界で生まれた。だからこの世界の事しか知らない。

自分をこの世界の者だと考えている。たぶん「ゆめ」も同じだと思う。

そんな事当たり前すぎて考えた事もないかもしれない。

でも「さき」は違う。「さき」は「死人^{しにん}」だ。「さき」はこの世界とは別の世界に生まれ、そこで死にこの世界に堕ちてきた。

だから「さき」はこの世界を自分の世界と思えず拒絶しているのだという。

この冥獄まで堕ちてきた「死人」は普通皆暗く胡乱な生気の無い瞳をしている。

何の意味も示さず諦めと哀しみをたたえた虚のような瞳…。その為

「死人」は「虚人^{うつろひ}」とも言われている。

でも「さき」は少し違う…。

血の気の無いその顔の中に浮かぶ瞳の闇の中には暗い鬼火のような怪しい光が不気味に揺らいでいる。

眼光はその者の意思を表す。それ無き者は皆「死人」じゃ…。

以前ぬし様はそんな事を言っていた。そしてその時くるりは「さき」の瞳の光の事を尋ねた。

「死人」なのにどうしてと…。そしたらぬしさまはとても喜んで教えてくれた。

そうじゃ…。あれは生きておる…。ただし「生人」ではない。哀れな「死人」じゃ。何故なら。

「あの人…いつまでいるんだろう。」
「え？」

いきなりの「さき」の呟きに物思いに耽っていたくるりの意識は一気に現実に戻された。そして辺りを見渡す。すると縁台に一人だけ腰掛けている人がいたのに気づいた。

何故今まで気付かなかったのかという事にはその人をよく見てみて納得がいった。

その人が気配の薄い「死人」だったからだ。痩せこけた体をやや俯き加減に丸めて座る青年。

両手で湯呑を持ちその中を胡乱な瞳で見つめている。その姿は置物のように全く動かない。

「あの人…飲めないの？」
くるりが尋ねる。

「…一年近くあのまま。」
「さき」が答えた。

飲めないのは珍しい事じゃない。けれど冥獄の「死人」が留まるという事はかなり珍しい。

本来ここまで堕ちてきた「死人」に執着心等の意思はない。飲めなかった「死人」は大抵そのままもと来た道は胡乱な眼をして引き返すものだ。

ここは幾つかの土地の境に位置する「茶屋」。

境を越えると今までいた世界とは別の理で成り立つ世界が存在しているという。

水が合う、合わないとはよく言ったものでその「茶屋」で出される湯呑を空にする事が出来ない限り境を越える事は出来ないという。例え「茶屋」を無視して自分の行きたい道を進んでもそちらへ抜ける事は出来ずこの「茶屋」まで戻ってきてしまうのだそうだ。

「見えたんだろう?」

また「さき」が突然尋ねてきた。

くるりはその意味がわからず「さき」の顔を見つめて首を傾げる。すると説明するのがさも面倒だというように軽く溜息について「さき」がぼつりと呟いた。

「あの「無き原」の中の山...」

「知ってたの?」「さき」!あの山の事!」

くるりは思わず「さき」の方に身を乗り出して尋ねた。

それを「さき」が煩わしそうに少し距離を置く。

「ずっと...初めて旅した時から見えてた。くるりのように音なんて聞こえないけど...」

聞こえるかと聞かれて何も聞こえなかったから黙ってた...」

「さき」が淡々と言った。

そしてその時初めて「さき」はくるりの方に顔を向け一言言った。

「さようなら...」

「え?」

くるりも「さき」の顔を見つめ返す。その顔には何の表情も読み取れない。

「どうして？」

くるりが訊く。すると「さき」が顔をまた前に戻してその質問にぼそぼそと答える。

「さあ…何となく。あそこは墓場で死に切れなかった者達の墓場。そしてくるりはあそこに呼ばれている…。だからそう思う…。」

そうじゃ…あれは生きておる…。ただし「生人」ではない。哀れな「死人」じゃ。何故なら。

何故なら墓場で死に切れなかった者じゃからのう…。

「「さき」…。」

「私はあそこには行かない…。あそこには行きたくないし呼ばれていないから…。そもそも。」

まっすぐ前を見据えたまま「さき」が呟く。

「あそこで私は死に切る事が出来ない…。」

そこで「さき」が欠伸を軽く一つした。

二

「今回からお前もお使いだよ〜くるり。」

「お使い？どこへ…？」

「わかってるだろ？「無き原」の山だよ、山っ！」

囲炉裏を囲んだ夕餉の席で「丸嬰」^{まるえい}がくるりに向かって言った。

「山あゝ？全く君は何を言い出すのやら…。」

あそこに山なんて見当たらない。

「はい、うっさいうっさいメガネうっさい！」

「なっ…眼鏡とは何ですか？眼鏡とはっ…。」

大体僕は眼鏡なんて掛けていませんよっ…！」

「知ってるよそんな事！だからあんたの性格がメガネだって言うてんだよっ！」

「性格が眼鏡つて…はあ？…どういう意味から基づく論理ですかっ？」

「はいはい二人ともそこまでおしまい。はなしが何だかわからない方へいつてますから。」

めがね論理はあとにしてね。

それにあたしたかこさんの事なんてぜんっぜん興味ありませんからたかこさんがお題の話なんてこれっぽっちも聞きたくないの！だからはいそれはお仕舞いはいいおわり！」

いつものごとく始まった「丸嬰」と「堯湖」^{たかこ}の口喧嘩を「関伽注」^{あかつく}が問答無用でばっさりと二枚に下ろした。

「堯湖」もそれで口をつぐんだ。

いつもにこにこしながらづかづか自分の思う所を口にする「関伽注」の事が「堯湖」は何となく苦手だったからだ。

というかここまで忌み嫌われれば誰でも苦手にもなるだろう…。」

関伽注」の人嫌いは容赦ない。

「あそこに行つて何をすればいいの？」

くるりが「丸嬰」に向かって尋ねた。「丸嬰」がくるりの方に向き直る。

「さあ…それはお前が決めればいいさ…したい事をすればいい。」

とにかくあそこに行つて話をしてみる事だ。」

「話……。」

「そつ……話。」

「丸嬰」の瞳が囲炉裏の炎を照り返して不気味に光る。

そんな二人のやりとりを何もわからない他の皆はただ黙つて事の成り行きを見つめている。

いや、「露歩き」だけは囲炉裏の炎をじつと見つめ何やら物思いに沈んでいた。

「何時から？」

「今から！」

「えっ！」

さすがにこの「丸嬰」の発言には話の見えない皆をもくろりと一緒に驚かせた。

「あゝまるえいさん、それは止めた方がいい。ここはね夜は道がないの。」

だからどこへもいかれないの。境のすきまにはまつてそこで朽ちるのがおちですおち……。」

「そお？んじゃ明日昼間つて事で！」

「丸嬰」がすぐさま答える。すると「閑伽注」はおもむろに腰を上げ部屋の隅に向かつて歩き出した。

「やれやれ、いきなりいまがあしたですか……。」

まるえいさんはすぐ飛んだことをいうから心臓にわるい……。」

「おや？あんたにも心臓があつたのかい？」

「丸嬰」が意地悪く「閑伽注」のその背に問いかける。

「さあ？あつたようななかったような……。わすれましたよ、そんなつまらない事は。」

「閼伽注」がひいゝひゅひいゝひゅと喉がかすれるような笑い声をたてた。
それを聞いた「堯湖」の体がびくりと震える。どうやら少し怯えているらしい。

「閼伽注」が部屋の隅にある葛籠くわろうから何かを取り出しその手に握る。葛籠を元に戻してそのまま炉端に座るくるりの元へ引き返した。くるりが「閼伽注」を見上げるように顔を上に向ける。

「ああいいのいいの顔あげない。さげてくれた方がらくだから。」
「閼伽注」に言われてくるりはまた下に顔を向けた。

すると首筋にひやりと何か紐のようなものが触れる感触がし、目の前をきらりと光る何かが横切った。その光の跡を眼で追うと自分の胸元に小さな銀の鈴がぶら下っている事に気づいた。

「これ…。」

くるりが尋ねる。

「これになつたら戻るの。あちらとこちらの道がとじてしまいますから。そしたら境のすきまね。」

わすれないでください。」

「閼伽注」がくるりの目の前に自分の指を一筋立てて言った。くるりはそれに目で頷く。

「はい、くるりさんはいいこさんいいこさん。」

くるりの態度に満足した「閼伽注」が何度も頷きながら自分の位置へ戻っていった。

「て訳だからくるり。あんたはもう寝な。あそこ行くとあんたすごく疲れるんだしさ。」

「丸嬰」があぐらをかき直しながら手を振り振り言う。

「…そうっそれだ！…そうですよ！駄目っ、駄目ですくるり！あんな所に行つては！

だつて君はあそこをまともに歩けた事がないじゃないですか！
こんな糞餓鬼のいう事なんか聞く事ありません！

皆さんもどうしてこんな奴の言う事を放っておくんですか！あの砂漠に山？

そんなものなかったじゃないですか！」

「堯湖」が突然立ち上がり皆に向かって両手の平を上に向けた姿勢で大げさに呼びかける。

それを「丸嬰」が面倒臭そうに睨みつける。

「こんな法螺吹き糞餓鬼なんて無視ですよ！無視っ！ねえ？」露歩き「様っ。」

「堯湖」が隣に座っている「露歩き」に向かって呼びかける。

「露歩き」というと何の表情も示さず火鉢で囲炉裏の中の炭を掻き混ぜていた。

「あ…たか」

「あつ私ももう寝る寝る！一緒に寝よう、くるり。」

「ゆめ」がくるりの腕を引っ張る。

「さきゆきさんまだですか？」

「まだというか…寝ない。今日は全く眠れないと思うから。」

「さき」が煩わしそうに「闕伽注」の問いに答える。

「ちよっ…皆さんっ！」

「そう、では火をみててください。あたしはねむいですから。じゃあまるえいさん…。」

「ん？あゝあたしもここにいますよ。あたしも眠くないからさ。」「露歩き」は？」

「…いずれ寝かせてもらうがまだここにいます…。」

「そうかい？じゃあ三人で夜通し語り明かそうじゃないか。」

「…だから私はいずれ寝かせてもらうと言っているだろうっ…。」

「私、絶対語らないから。」

「うわぁヤダヤダ。ノリの悪い二人い。」

「ちよつとっ…ちよつとつてば…！」

「じゃあお先しつれいさせていただきますよ。」

「あ。」

「お休みい。」

「ゆめ」がくるりを奥へと引つ張り込み「関伽注」が奥座敷の襖を閉めた。

すると襖の向こうから「堯湖」の悲痛な叫び声が聞こえてきた。

「ちよつと！何で僕を無視するんですかっ！僕じゃないでしょ？僕じゃあつ。」

ちよつとは僕の話も聞いてくださいよオっ！

「うるさいねえ！こんな夜中に馬鹿声出してんじゃないよっ！近所迷惑だろう？」

「近所？金魚？近所？ツは！…どこに近所が」

「五月蠅い…。」

ごとつという鈍い音の後、「堯湖」の声は聞こえなくなった。

「あゝ「さき」、おとしたね。」

「みたいね。」

「面白いね。」

「そうね。」

「ゆめ」と「関伽注」のひそひそくすくすささやきあっている。

「でも…あたしの事心配してくれたのに…。」

くるりがそういうと「ゆめ」も「関伽注」もこちらを向いて「いいのいいの。あれはあの位で丁度いいの。」

と訳の分からない事をいつてくるりを布団においやった。

「教えてあげればいいのに…「丸嬰」の事…。」

布団の中にくるまりながらくるりが呟やく。

「だめだめくるりさん。もつともつとたかこさんであそぶんです。

もつともつと自分がどれだけぶれいな事をしたか思いだせないくらいまでしてからでないとおしえないんですから。」

「そうそう。」

「ゆめ」と「闕伽注」が意地悪そうににたりと笑う。

……怖い。それにいつの間にかそういう話になっていたんだらう…。

「堯湖」に明日ちゃんとお礼を言おう…。

くるりはまどろみの中でそう思い深く眠りに落ちた。

三

茶屋の外は昨日と変わらずどこまでも長閑な天気をしていた。

そういえばここでは雨が降ったりした事がない。

雲は遠くに小さくふわふわと幾つか浮かんでいるけれどそれはとても雨を降らせるようなものにはなりそうにない。

そう…ここはいつでも平和だ。

「じゃあくるり！お互いお勤め頑張ろうね！私こっちだから！」

「ゆめ」がくるりに向かってそういうと「ゆめ」はさっさと茶屋からどこまでもどこまでも伸びるかのように見える細い道をすたすた

と歩っていつてしまった。

「ゆめ」はどんな所に行っているんだろう…？

くるりはぼんやりと「ゆめ」の後ろ姿を眺めながら思った。

確か前に「ゆめ」に聞いたらとてもお洒落で綺麗な夫人のお屋敷で歌を歌ったりお話をしたりしているとか言っていた。

あとその夫人に仕えている人がちよつといやらしくて素敵だとかそういう事も…。

それにしてもいやらしいのに素敵だなんてどういう事なんだろう？御殿にいる豆蔵爺も素敵って事なのかな？かなりいやらしくて最低だって「崩山」言ってたし…。

「ゆめ」はああいうのが好きなのかな…あたしは嫌だな。くるりは茶屋の周りから幾筋も伸びる道を見渡した。

あたしは…どんな人に会うんだろう…。

「…往けそうか？くるり。」

振り返るとそこに「露歩き」が立っていた。

少し離れた茶屋の縁台には「さき」が座っていてこちらの様子を窺っている。

「うん、たぶん」

「はいはいいきますいきます絶対いきますよむしろ往くつ。」

だってあたしの茶釜のゆがあるんですから。

これさへのンでれば自分があるってちゃんとわかるものなんです。」

「閑伽注」が茶屋の中から顔を覗かせる。

「くれぐれも瓶をわらないでください、くるりさん。」

それがないと砂の中でわからなくなつてすやすやしますから…それ

でそのまま砂になってなにもなくなるの。それは嫌でしょ？」

「…うん。」

くるりは腰に提げた茶屋の湯が入った瓶にそつと触れた。

先程まで茶釜の中で湯気を上げていたにもかかわらずそれには一切温度というものが感じられなかった。

あたしと同じ…。

くるりは瓶から手を離し一通り皆の顔を眺めた。

「露歩き」、「閼伽注」、「さき」…。「丸嬰」は朝起きたらもう何処かに行ってしまったていた。

「堯湖」はまだ眠っている。結局今朝はお礼を言えなかったな…。

「じゃあ…行ってくるね…。」

くるりは「ゆめ」の選んだ道とはまた別の道を選んで歩き始めた。

夕暮れが夜に染まる その位あまりに自然であまりにゆっくりと長閑だった世界はいつの間にも何も感じられない絶望的な無の世界へと変わってしまったていた。

くるりは思わず後ろを振り返る。その先にあるものもやはり無だった。

あの長閑な世界が自分の歩いてきたこの先に存在しているとはとても信じられなかった。

歩を進める度に足先で砂を滑らせても砂は何の音も立てずに流れていく。

踏みしめているはずなのに足の裏には何の感触も伝わらない。

自分は本当に歩いているのか、本当に前へ進めているのか分からなくなってくる。

…気持ち…悪い…。

くるりの額に汗が浮く。息も荒くなる。

自分がかめず体が小刻みに震え始める。意識が朦朧としてくる…。くるりは自分の腰に手を伸ばした。茶屋でもらった瓶に指先が触れる。

やはり何の温度も感じられなかったが確かにそこに在るという感覚がその小さな容器の中から感じとれた。

腰から瓶を外して栓を抜き、中の湯だったものを口に含み喉へと流す。

それはやはり何の味も温度も感じられなかったが、お腹の中心に在るという感覚だけは生まれさせた。

自分の中に何かが確かに在る　　。

くるりは自分のお腹に触れ、ずっと細く息を吐いた。荒かった息が整い意識もはつきりとしてくる。

大丈夫…きつと往ける。

くるりは前を見据えた。

そこに目印となるものは何も存在していなかったけれど、くるりは自分の進むべき方向を確かに感じ取っていた。

くるりは歩みを進める。先にはやはりまだ何も見えない。けれど迷いはなかった。

大丈夫…逢いに行く…。

くるりは一人砂の中を進んでいった。

【中置】「堯湖」撲滅推進会結成（前書き）

入れ忘れてました。

（というか要らないかもですが…）

【中置】「堯湖」撲滅推進会結成

【中置】「堯湖」撲滅推進会結成

「夜遅くにごめんね、でも皆にお話があるの。」

「ゆめ」が「露歩き」^{つゆある}、「丸嬰」^{まるえい}、「閼伽注」^{あがつく}に向かって神妙な面持ちで語り出した。

「あゝ、うん何となくわかるけどね。あれの事でしょ？あれの…。」
「丸嬰」が片膝を立てその上に手と顎を乗せた体勢でだらしく応じる。

「「あれ」…？」

「露歩き」が怪訝な顔をして「丸嬰」に目を向ける。

「このメンツ見ればわかるだろ？「堯湖」^{たかこ}の素行の事だよ…「露歩き」。」

「素行って……。」

「もう！だから嫌がる「さき」にちよっかい出して「さき」が困ってるって事っ！」

「ゆめ」が大きな声で叫んだ。

「「ゆめ」…声が…。」

「ああ、それは大丈夫よ「露歩き」。ね！「閼伽注」。」

「はいしっかりぐっすりもしましたからあさまで絶対起きてきませんっ。」

「盛るって……。」

「露歩き」がやや呆れ顔をしてつぶやいた。

他の三人は舌舐めづりするようににたと笑っている。怖い…。

「露歩き」は出来るだけ「堯湖」を援護する方向でこの会合に参加しようと思心に心の内で誓った。

「私は周りがどうこうする問題ではないと思うが…。」

「露歩き」が早速会合自体を収束させようと援護発言を開始する。

「その辺は大丈夫よ！」「さき」から言われたんだもん。（注・実際

「さき」は頼んでません。不平を言っていただけす。）

困ってる方に言われてるんだから問題ないでしょ？」

「……そうか。」

「露歩き」は出来るだけ情状酌量の余地を見つけて「堯湖」に下されるであろう実刑判決（？）を軽減させる方向でこの会合に参加しようと思かに心の内で誓った。

「そもそも何が契機だったのかねえ……」

それについて何か「ゆめ」は知ってるの？」

「丸嬰」が昼間どこかで調達してきた干し肉をかじりながら「ゆめ」に尋ねる。

「うっん、そこまでは知らないの……」「さき」は何か知ってるっぽかったけど教えてくれなかったし……」

「ゆめ」が「丸嬰」から干し肉を受け取りながらしょんぼりと呟く。

「……」「露歩き」は知らないの？あいつあんたにもメロメロだからその辺の事情とか勝手にぺらぺら喋ってんじゃないの？」

「丸嬰」が「露歩き」に向かって干し肉で指さしながら尋ねる。

「いや……聞いていない。」

「露歩き」は出来るだけ平静を装いながら「丸嬰」の問いに答えた。

本当は……契機も好いている所もこれが初恋だという事も全て聞かされているのだが……

「露歩き」はこの会合に呼ばれた事を次第に後悔し始めた。

「そもそも「さき」っていうのが凄いやね？」

だってあの子すごい無愛想じゃない。まあ確かに美人だけどさ…。

「

「ちがうちがうゆめさん。そこがいんですかなめなんですきつと…。だつてあれは完全マゾなんですから…。」

きいてるでしょ？あのはなし。生まれるために死のうとするなんて完全にそっちの人のする事です。あたしなら絶対しません…というか物心つく前にそんな事まずしません！」

「あつ！そつかあ！確かにそうだね。」

「……「まぞ」？」

「あらやだ「露歩き」イ…。知らないの？」

「マゾ」、すなわち「マゾヒスト」。被虐的嗜好者の事だよ！」

「だからね、人から傷つけられるのが気持ちいい人の事を言うんだよ！露歩き。」

「ゆめ」…そんな笑顔満面で…。そしてどこでそんな俗な言い回しを…。

「露歩き」は何だか悲しくなってきた。思わず肩を落とし溜息をつく。

「おいおい「露歩き」。育ての娘に諭されたからって落ち込む事はないよ。」

誰でも知らない事はあるんだからさ…。」

「丸嬰」が「露歩き」の肩をぽんと叩く。

いや、そういう類のものではなく……。

「露歩き」は肩に手を置く「丸嬰」の顔を見る。その顔はさも優しく慰めるような顔をしていたがその眼は明らかに楽しんでいるものだった。その背後に控える「閼伽注」も以下同様…。

わかってて言っているのか…。

「露歩き」はまた肩を落として溜息をついた。

「んじゃ、今後の方針なんだけどさ…どうしよつか？」

「もちろん二人であそぶにきまつてます！もちもちろんですけどさきゆきさんに怒られない程度にね。」

「うん！私もそれに賛成！」

「……………何をするつもりだ？」

「だからあアイツが「さき」の事好きなの知ってるけど知らないよ
うなふり…まあするまでもなくアイツ鈍いからわからんだろうけど
さあ…そんな振りしながら「さき」の前で恥かかせてみたりするっ
て訳。」

「うんそれ！はじ、いいですねえ。あたし嫌いなんですよねたかこ
さんの事。えりいってっていうの？なんか鼻につくいいまわしするん
ですから。」

「ああまだまだ青い餓鬼のくせしてね。」

餓鬼そのものの姿の「丸嬰」がうんうんと頷く。

「いや…そうとばかりは言えないだろう。実際「堯湖」は博識だし
手合わせで私が負けた事も一度ではない。」

「露歩き」はするりと援護発言を挟む。

「ああまあねエ…。頭と腕はあるんだよねえ…一応。」

「べつのあたまは皆無ですけどね！」

「閼伽注」がどろりと毒を吐く。

「私は」

「おおつとオ…止めるんじゃないよ「露歩き」。

そんな事したらあんたの恥ずかしい過去をあいつにぶちまけてやるからね…。」

「ツ……。」

「はずかしい過去？あああれですか？まるえいさんの体のすみずみまで洗いこんでその後とを共にしちゃったあれですか？」

「……」「闕伽注」。誤解を招くような言い方をするな…。」

「ごかいだなんて嘘ですよ。あたし何もへんにいていませんから。それを相手がどうつけるかは相手しだい。」

「そうそう。」

特に頭の無い「堯湖」じゃ絶対何か考えるだろうけどねえ…。

そしてそんなあいつの悶々とした姿に異変を嗅ぎつけた、あのお喋りな「お姉さま」が問い詰める事はまず間違いなし！

「ッ……！」

「いやあ〜ん、「露歩き」様つてば実は幼女趣味イ？

どうもおかしいと思つてたのよねえ〜。良い美丈夫が浮いた噂一つもなしに縁もゆかりもない女の子をせっせと育ててるなんてえ〜。やっぱりあの子達つてぬし様からのご・ほ・お・び？

きいやあ大変！皆に広めなくっちゃあ！……とかね。」

「ツ……。」

あまりにそっくりな「丸嬰」の、「堯湖」の義母姉「莠ゆしま」の声真似に「露歩き」は完全に絶句した。…そう…まさに彼女ならこう言うだろう…。

「じゃあ皆、これから一つ協力よろしく。」

「はい。」

「うん！」

「……………」

こうして「堯湖」撲滅推進会は結成された。

ちなみに「さき」は何処にいるかというところ……そこにいた。
もう完全無視の態ですね。

【中置

終わり】

第一章 第四節

第四節

—

目の前に巨大な黒い塊が広がる…。強い死の香りを放つ巨大な忌まわしい塊が…。

くるりはその塊の前に佇んでいた。そしてその全景を見渡していた。肩がわずかに上下する。

砂原にこの黒い塊が見え出してから次第に歩を早め、しまいには半ば走ってここに駆けつけた為だった。

山の中腹に位置する舞台に目を凝らす。

舞台に下がる簾がわずかに揺らいている。けれどそこに人の気配は感じられない…。

くるりは山の中腹から視線を下げて山の麓を見渡した。

そこには沢山の骨で出来た針山が広がっていた。

白い砂と白い骨…。無なるものと死なるもの…。

両方とも白いものだけれどそれは確かに別のものだった。

骨の白さには寂しさと哀しみが漂い生なるものの名残を残していた。そう…わずかだけれど確かにあるものとして感じられた…。

くるりは骨の針山に近づいていった。

近づけば近づくほどにその骨がとても大きなものである事がわかつ

てきた。

この前来た時は象の骨位だと感じていたけれどそれよりさらにもっともつと巨大な生き物のものであった事がわかってきた。

くるりは一つの骨に向き合いそつと手を触れてみた。

ひんやりと冷たく荒い岩肌のようにざらざらとしている。

それはくるりが両手を広げて抱きしめようとしても決して抱きしめる事が出来ないだろう太くて巨大な背骨だった。

背骨にそつて空を見上げる。

暝い漆黒の空に規則正しく節目を付けて伸びる白骨はあまりに世界に際立ち過ぎて造り物にしか見えなかった。

少し強く押してみても、びくともしない。

どうやってこんなに大きな骨を砂の中に埋め込んだんだろう

…。

しかもこんなに沢山…。

くるりは辺りの突き立った骨を眺めた。時折粉雪のように骨の間を朽ちた骨が舞い落ちる。

とりあえず随分昔にここに埋め込まれた事は間違いないようだ…。

くるりは骨の中を進んでいった。骨は全てあばらを取り除いた背骨だけのものだった。

背骨のつくりはどれも同じだった。けれど一つとして同じものなどなかった。

大きさや存在感、朽ちた度合、色合いも黄色がかっていたり青みを帯びていたりそれぞれの骨にそれぞれの特徴があった。

さらさらとまた目の前を骨の粉が舞い落ちる。

舞い…落ちる…？

くるりはその場で足をとめた。そして自分のまわりに意識を集中さ

せる。

ほほをわずかなでられているような感覚にとらわれた。

風が吹いている…。

それはくるりの前方から感じとれた。しかし視線を前方に向けても骨の針山の先にはあの黒光りする恐ろしい山しか見当たらない。

くるりはさらに前へと歩を進めた。

しかし黒い山に近づけば近づく程に骨と骨の感覚が狭まり朽ち落ちた骨が岩山のように目の前に立ちはだかる。

結局黒い山の麓に行きつく前に人が歩けるような隙間はなくなってしまっていた。

くるりは前へ進むのを諦めて今度はその朽ち落ちた岩山に沿って横に進み始めた。

横へ進むと山の麓に向けて多少前後する事はあったがあくまで前後するだけで確実に黒い山の麓へ辿りつけそうな道は見当たらなかった。

結局黒い山と骨の林が交わるこの不吉な塊自体の端にまで辿りついてしまったがそこにも道らしき道は見当たらない。くるりはもと来た道を辿り反対方向の横道も歩いてみた。

しかし反対方向の端まで歩いてみても麓へ進めるような隙間は見当たらなかった。

少し休もう…。

くるりは足もとに転がる手頃な骨の残骸に腰を下ろした。腰を下ろした途端足がじんわりとする。

そつえば茶屋からここまで休んでなかった…。

くるりは自分のふくらはぎの辺りを軽くもみほぐした。

それが終わるとまた腰から瓶を外し中の湯を一口喉へ流し込む。体がすつと軽くなった。

くるりは一つ息をつく。

空を見上げる…。星ひとつない瞑い空。星の代わりに骨のかけらがさらさらと空を横切る。

骨の吹かれてきた方向にそのまま頭を後ろに傾けていく。針のように連なる骨の隙間に滑らかな黒い山肌が見えている。骨の間を歩いて結構近づいたと思っていたけれどまだまだ遠くにありそうだ。くるりは黒い山肌に向けていた視線を山裾の方へとそのまま滑らせていった。

？

くるりは頭を起き上がらせて後ろを振り返り近くの黒い山肌に目を凝らした。

そこにはわずかな窪みがあった。幾つも幾つも、それは山の中央に向かつて点々と伸びていた。

流れる川のような文様を浮かべる山肌にあるそれは明らかに自然に出来たものとは違っていた。

それは確かに上へ上がる為のものだった。一人がやっと足を掛けられる窪みがあるだけで捕まる所の全くないとても階段と呼べるようなものではなかったけれど確かに人が上に行く為に穿たれたものだった。

くるりは腰を上げて一番近くにある窪みを探した。

それは崩れた骨の山を一つ登った所に穿たれていた。くるりはその

骨の山の一番手近な骨に手をかけた。少し強く下に引つ張つてみた
がかけらが少しばらばらと落ちる位で足場自体には問題はない。そ
もそもかけらといつてもそれはくるりより皆大きな塊だった。くる
りは両手で骨につかまり何とか近くの別の骨に足を掛けたりして体
を上を持ち上げた。その上にもまだ沢山の骨のかけらが積み上がつ
ていたが、幸いにもそれらはくるりが何とか手を掛けられる程度の
ものだったのでくるりは一番近くの窪みにまで辿りつく事が出来た。
くるりは窪みに足を載せてみた。やはりそれは両足を載せる事が何
とができる程度のものだった。一歩手前の窪みはくるりが大腿で足
を開くと届く位の位置にある。

…ちよつと怖い…。

山肌に両手を付けて片足を前の窪みへと伸ばす。

山肌はつるつるとしていて掴まる所としては何とも頼りない。

両の手の平を思い切り突っ張り山肌にへばりつくようにして次の窪
みへと進む。

下は見ないようにしよう…。

上に登るにつれて背中に吹き付ける風が強くなる。

あたしは「在人」だから死ぬ事はないだろうけどここから
落ちたらきつともう動く事が出来なくなる…。

気をつけていかないと…。

くるりは少しずつ少しずつ山肌を登っていった。

ぎしり…。

くるりは楼閣の舞台の上に降り立った。舞台を造る木は皆完全に水気がなく生氣も無い。ささくれ立ち所々朽ち抜けている。今くるりが足にしている木も何処となく頼りなく足下では少し動くだけならばらと木くずがこぼれていつているようだ。ふわりとくるりの袴の裾がはためいた。同時にくるりの鼻先、そして前髪をわずかに風がくすぐっていく。

下から…？でも下には骨が…。

くるりは足もとの朽ちた舞台の隙間をみつめた。隙間から見える風景はただただ真っ暗だった。骨の白さなどどこにも見当たらない。本当の闇が広がっていた。くるりはゆっくりと舞台の外側へ移動していった。そして舞台の下をのぞき思わず息をのんだ。

真っ暗だった。舞台の端から端まで巨大な底の知れない大きな闇が広がっていた。その闇の中へ舞台を支える柱が何千本と伸びていつている…。とても底がある闇には思えなかった。そして風はその闇の中からわずかに吹いてきていた。

まるで細く…溜息をつくかのように…。

なんて寂しい風…。

くるりは風を受けながら舞台の真中に位置する楼閣に向かって歩いて行った。

楼閣の中も外の舞台同様酷く朽ちていた。楼閣は三層から成っている。くるりが舞台つながりで入った所は一番下の一層だった。

薄暗い部屋だった。そこに幾つもの細長い燭台が置かれていて一番上に油皿が載っていた。部屋の明かりはそこから取られているようだがそこに浸した紐からさめざめと燃える小さな白炎に温かさは全く感じられない。

それは小さく小さく嘆くように揺れていた。

その嘆きのようなぼんやりとした灯に照らされるように部屋の中心に小さく急な上へと昇る為の階段がしつらえられていた。これまで見てきたものと違って足のかかる部分が多少擦り減り鈍く光沢を放っている。

そう…よく使われている今だ生きている木で出来た階段だった。

くるりは階段を上って行った。二層まで登り切ると舞台の闇底から吹き込む風がゆるやかにくるりの体をすり抜けた…と同時に不思議な香の香りが鼻をくすぐる…。

二層には幾つもの香台が置かれていてそれぞれがそれぞれの色と香りを醸し出していた。けれどどの香もくすぐるように細く煙を流している。数割には香りはきつくない。

中央には天井から吊るされた白炎の燭台に照らされる形で書机と座椅子が置かれていた。

近づいて見てみると書机には幾つもの巻物がちらばり様々な筆や墨壺がその間から顔を覗かせている。くるりはおもむろに一つの巻物

を手に取ってみた。

「……たとえ…生まれ変わろうとも…」

くるりは一番始めに目にとまった一文をとりあえず読み上げてみた。

「必ず君に巡り逢い……君と必ず」

「っ！」

思わずくるりは巻物を手放した。巻物が書机の上にばさりと落ちる。その拍子に墨壺が倒れたようで書机の隙間からしたたと墨が垂れてきた。

くるりは書机の下に出来ていく墨溜まりを見つめながら今自分が見た文章を心の中でかみしめるように呟いていた。

たとえ生まれ変わろうとも、必ず君に巡り逢い君と必ず添い遂げる…。

それは決して戯れに書かれたものではなく、真に己の気持ちを書き記した恋文だった。

くるりは予期しなかったあまりに強い人の思いに触れて動揺していた。わずかに乱れた息を整えようと胸元にしっかりと握り込んだ拳を添える。

呼吸を整えながら墨溜まりの手前に置かれた座椅子に目を移す。そこには人の重みで緩やかに作られたくぼみがあった。

くるりの視界の隅に闇が広がる。

ふと気付くと墨はゆるゆると広がりを見せ座椅子に迫っていた。くるりは慌てて座椅子を少し後ろにずらした。

しゃらしゃら……。

はつとしてくるりは音のした方向を見つめた。それは二層より手前に突き出した舞台の上からの音だった。そこだけ外への視界が開けていない。

くるりは舞台へと歩いて行った。視界をふさいでいた物は沢山の黒い数珠簾だった。それが風に揺らされてしゃらしゃらと音を立てている。

あの人のいた所…。

くるりは両手で手前に広がる数珠簾をかき分けて外の世界を見渡した。

そこには先程まで自分がさ迷い歩いていた骨の針山が何処までも続くかのように広がっていた。こうして高い所から見ると白い砂と骨の山の境目が全くわからない。骨の山が本当にどこまでも続いているかのように見えた。ずっと視線をもっと手前の足下に広がる暗闇へと移すとそこには舞台の上で見たように巨大な空洞のような穴が広がっていた。やはりどこまでも続くかのように底が知れない。

くるりが思わず前へ身を乗り出したその時

「そこで何をしている…。」

あまりの突然の問いかけにくるりはびくりと体を震わせた。振り返ると二層と舞台の境目辺りに人が一人立っている。

そこにはくると同じ年位の背格好をした青年が立っていた。

ややつり上がった漆黒の瞳、首と両手首に沢山の数珠を巻きつけて

いる。着物や髪も瞳の色と同じ漆黒でその中で白骨のように白い顔と手が際立って見えている。

白い手……。

「誰だと聞いている……。」

その青年がくるりに向かって尋ねた。その声にはわずかに苛立ちが感じられる。

「あ……あたしは……。……っ！」

この人……何？

くるりはわずかに後ずさりした。

その青年からは死の匂いも生の匂いも、さらには無の匂いすら感じ取れた。普通ならそのどれか一つの匂いしかない。けれどその青年からは風にゆらめく炎のようにその立ち上る匂いが常に色を変えていた。

青年がすたすたとくるりの方へ向って歩き出した。

「……どうやって入った？」

わからない……この人が生きてるのか……死んでるのか……。

「……お前……生者でも死者でもないな……。」

もしかして……あたしと同じ？

「お前……まさか。」

青年がくるりから数歩手前でぴたりと止まりくるりを見つめた。

くるりはまた後ずさりしようとしたが舞台の縁に行き止まりそこでわずかに体をよじる事しか出来なかった。

ジャラジャラジャラッ！

突然の事にくるりは何が起こしたのか一瞬分からなかった。視界が反転し目の前に洞の様な闇が広がる。それは空だった。体をすり抜けるだけだった風がくるりの体をからめ捕り闇の底へと引きずり込もうとしているのだった。

落ちる…。

くるりがそう思った次の瞬間、くるりの両腕が思いきり引つ張られ何かの上に体を叩きつけられた。

「…つう。」

くるりの体の下で声がした。見るとくるりの体の下にいるのは先程まで数歩先でくるりを見つめていた青年だった。どうやら舞台の下へ引つ張られたくるりを助けてくれたらしい。

くるりの腕を掴む青年の指はとても冷たい。衣の中の胸元からも何の響きも感じられない。

けれど。

「早くどけ…重い。」

青年は苛立ちを隠さずにくるりをきつと見据えて言い放った。
わずかに息を乱している。

そしてその息はとても

くるりはそのままその青年の唇に自分の唇を重ねた。

やっぱり…この人生きてる……。

温かい…。

次の瞬間両肩の付け根辺りに鈍い衝撃が走った。そしてそのまま跳ね起きるようにしてくるりは後ろに尻もちを付いていた。肩に走った衝撃はこれまで感じた事のない強さの衝撃だった。

くるりが何が起きたのか分からず茫然としてしていると仰向けに倒れていた青年が体を起こしくるりと同じように、けれどくるりとは別の意味で茫然とした顔をしてくるりを見つめた。

そしてその漆黒の両の瞳からははらはらと涙が落ち始めた。

はらはら。はらはら。

くるりが思わずその青年の顔に向けて腕を伸ばそうとすると青年ははっと我に返りくるりの腕を逃れるように座ったまま後ずさりをした。と同時に青年の流した涙が顔からまたぱらぱらと落ちた。そこで青年は初めて自分が泣いている事に気づいたらしい。自分の頬に触れてその指先と目の前のくるりを交互に見つめている。

あ…そっか…あたし今。

くるりが自分のした事の意味について考えていると青年がすつくと立ち上がりくるりを思い切り見下しながら大声で叫んだ。

「出ていけっ！」

くるりはあまりの声の大きさに体をびくりと震わせた。そしてとても怖くなった。

こんなに人から拒絶されたのはくるりにとって初めての事だったからだ。

「……あ。」

「出てけっ…出てけよッ！」
青年が何度もくるりにむかって叫んでいる。その顔はわずかに赤みを帯び始めていた。

あたし…この人をすごく…怒らせたんだ。

くるりはとりあえず謝ろうと思った。でもその青年の怒りはとまらず出てけ出てけと大声で連呼するのでとてもくるりが口を挟めそうにもない。

ちりん…ちりん。

その時くるりの胸元で鈴が鳴った。怒りに燃えるその青年には聞こえていないらしい。
まだ目の前で叫んでいる。

「わかった…ごめんなさい。」

今日はもう帰らないと行けないから…あたし帰るから…。」

くるりがその青年に向かっておそろおそろ言いながらそおっと立ち上がり目を合わせたまま楼の中の階段の方へと向かって歩いていった。青年は今にも牙を剥き出しにして襲いかかってきそうな獣のごとき空気を放っている。くるりは青年に背を向け階段に足をかけた。そしてそおっと踏み外さないよう慎重に降り始めた。

「また…来るから。」

くるりは階段を降りながら顔だけ二層に出して青年に向かってそっと声をかけた。

「二度と来るなっ!」

くるりの頭上から強烈な拒絶の言葉が叩きつけられた。くるりは思わず体を震わせせかせかと追い立てられるようにその場を離れていった。

「ああくるりさん、早かったですねえ。そんなに急いでもどらなくても大丈夫なのに。」

よゆう持つてすず鳴らしてますから。」

茶屋に戻ると「あかつく關伽注」がいつもの笑顔で迎えてくれた。「さき」

が縁台でいつのも仏頂面でくるりを一瞥する。そしてすでに茶屋の一部のようになつてしまつた飲めない死人は変わらず自分の湯のみを見つめていつもの場所に座つていた。そう……いつもの平和な茶屋の風景が広がつていた。

くるりはさきの座る縁台の開いている所に両腕をつき地べたに膝をついてそのまま崩れるようにしゃがみこんだ。

「ほんとに急ぎすぎみたいですねえくるりさん。ちょっと待って、すぐ新しい湯をよういしますから。」

「閼伽注」はそれだけというと茶屋の奥へと消えた。

「どうしたの……？何か変……。」

茶屋の縁台に突つ伏しているくるりに向けて「さき」が前を向いたまま問いかける。

「……あの人を怒らせたから。もう来るなつて……。」

「……そう。」

「どうして怒らせたの……？」

「……それは。」

「はいはいお待たせお待たせね。できたてはやはやの湯ですよくるりさん。」

「閼伽注」がくるとさきの間の縁台の隙間にとんと湯呑を一つ置いた。

くるりは縁台に肘をついたまま両手でそれを持ち上げて口元に運び一息に飲みこんだ。

「……………」

「おちついた？くるりさん。……………くるりさん？」

「……………くるり？」

湯呑を見つめたまま動かないくるりを「閼伽注」と「さき」が不思議そうに見つめる。

「…………甘い。」

くるりがぼそりと呟いた。

「甘い？」

「さき」が怪訝そうな顔をしてくるりに問いかける。

「嗚呼…………はるが来ましたか、はるが…。」

「…………何？」

「ですからくるりさんにはるですよ…。」

「閑伽注」が一人訳知り顔でうんうんと頷いた。

くるりは湯のみをただただ見つめていた。

【中置】いけないくるり

【中置】いけないくるり

「…今日はどうだった？くるり。」

「露歩き」^{つゆある}がくるりにそう尋ねたのは皆が集まる夕餉の席での事だった。

夕餉といつてもきちんと一食食事をとるのは「堯湖」^{たかこ}と「ゆめ」、あとたまに「丸嬰」^{まるえい}位で他の者は週に数回から一回程度、普通の人なら空腹に苦しむか次第に餓死してしまう位しか食事をとらない。今日も食事をしているのは「堯湖」と「ゆめ」だけで他の者は皆湯をすする、そんな夕餉の席での「露歩き」の質問だった。

「……ん。」

すぐく怒られて嫌われた…。もう二度と来るなって…。」

くるりが少ししょんぼりしながら「露歩き」の質問に答える。

「うそ…何それ？」

「どうして…。」

「ゆめ」と「露歩き」が心配そうにくるりの方を見つめる。

「たぶん…いきなり接吻したから…。」

「ぶうッ！×2（「露歩き」、「さき」）
「がちゃべちゃんっ！」

「あつと…あつつぢいアッ…！（「堯湖」）

「ぶばッ！ごほ…げほッ」（「ゆめ」）

「ほほう…。」

「はるですね、はるはる。」

「なっ…何してんのよ！くるりっ！」

初対面の人に…：そんなっ…あ、あり得ないっ！信じらんないっ！」
何とか喉のつかえを飲み下した「ゆめ」がくるりに向かって食って
かかった。

「うん…しちゃった後にちよつとまづかったかなって思った…。」

「ちよつと？ちよつとってあんた…。」

あゝもうやだ！何か私が恥ずかしくなるじゃないっ！

「露歩き」イ…何か言っただけだよオ…。」

「ゆめ」が「露歩き」に向かって助け船を求める。

「え…わ…わたしが…？」

普段あまり慌てない「露歩き」がかなり動揺を隠せないでいる。

くるりはそれを見て本当に凄い事しちゃったんだなとしみじみ思っ
た。

「そうそうっゆあるきさん。あなた何かくるりさんに言わなくちゃ。」

「そうそう一応くるりのお父さんだからねえ。ほらほらほらあ
ゝ。」

「あかつく悶伽注」と「丸嬰」がにたにたと「露歩き」を急ぎ立てる。

「露歩き」は何をどう諭したらいいものかと相当考え込んでいる。

そんな「露歩き」を見てこんなに考え込んでいる「露歩き」を見る
のは初めてだなとくるりはふと思った。

「…とにかく…相手は相当怒ったのだらう？」

つまりそうしてほしくはなかった…それはわかるな？」

「…うん。」

「人は他者に触れられる事にひどく敏感だ。そして人は経験と自分
の感覚から他者との距離を測る…。しかしくるりはこれを行う事が

ひどく苦手だ…そうだろうか？」

「…うん。」

「だからくるりは相手が許すと言う時以外相手の体には触れるな…。」

「うわ…それもう極論ですね。」

「ひつどオーい、何この親父イ…。自由恋愛禁止だつてえ。最悪う。う。」

「丸嬰」がここぞとばかりに声を張り上げぶーぶー文句を言う。

「…私に…くるりを相手にこれ以上の助言は無理だ…。」

「露歩き」は膝の上に置いた拳をきつく握りしめ唸るように呟いた。

「そういえば「堯湖」。あんたは何か言いたい事とかないの？」

「丸嬰」が思い出したように「堯湖」に話を振る。

「せつ…せつ…せつ…。」

「堯湖」はゆるく胡坐をかき右膝をこぼした湯で濡らし、両手を後ろについた状態で化け物でも見るような目つきでくるりをみつめ息も絶え絶えにただそれだけを繰り返しつつやいている状態だった。

「駄目だこいつ…こいつには刺激が強すぎてへたれてるよ。だらしないなア…たかが接吻くらいで。」

おいっ！へたれ！へ・た・れっ！

「…あつ…は、はい。何ですか？」

「堯湖」は「丸嬰」のへたれ呼ばわりに素直に応じた。…まだ意識が朦朧としているようだ。

「あんたからくるりに何か言ってやれる事はないのかい？今回の事についてさあ…。」

「丸嬰」が「堯湖」を促す。すると「堯湖」ははっと思い出したよ

うにくるりに向き直り怒ったようにくるりに質問を投げつけた。

「くるりっ！ 君は燃えるようにその人の事を愛しいと感じたんですかっ！」

「……っひ！何その恥ずかしい台詞！」

やだ、やめてよ「堯湖」。」

「ゆめ」が「堯湖」の発言に思いっきり引いた。

燃えるように…愛しい？

くるりは首を横に振った。

「それではくるりっ！」

君は相手の君に対する狂おしいまでの熱情のようなものを確かに感じたんですかっ！」

「いやあっ！だからほんと何その気持ち悪い台詞！聞きたくないっ！」

「ゆめ」が両手で耳を押えて体を振って拒絶した。

「………出たあ…メガネ論理。」

「………いたすぎですね。」

「丸嬰」と「閼伽注」が蛆虫を見るかのごとき眼で「堯湖」を遠巻きにひそひそと囁き合っている。

あたしに対する狂おしいまでの熱情？

苛立った瞳、はらはらと落ちる涙、肩の衝撃、大きな声…。

出てけっ…出てけよっ！

狂おしいまでの熱情………？

くるりは首を縦に振った。

「え………？」

「堯湖」以外の皆が同時に呟きくるりの方を見た。

「そうっ！そうでしょう？」

感じられなかったでしょう？

だから怒ったんですよその人はっ…

つまりっ………セッ…接吻というものはですね…本当に好き合った
二人が心を込めて　　」

「ちょっとうるさいからめがね黙ってください。」

「そうそう！黙れメガネ！」

「なっ…何を…今僕が大事な話をしてるんですよ！」

それと何度も言いましけどねえ…ばオッ　　ぐふっ　　」

「堯湖」が前のめりになりそのまま頭を床に叩きつけておちた。

その後ろには手刀を構えた「さき」が座っていた。

「何何相手の気持ちはあつた訳？」

「ゆめ」がくるりに詰め寄る。

くるりはまた頭を縦に振った、

「きゃ〜〜〜。」

「ゆめ」が両手で顔を覆って叫んだ。

「じゃあ…何故……。」

珍しく「さき」が言葉を挟む。

「わかったっ！ 雰囲気も何も考えないでいきなりしたからだっ！

ねえくるり、あんたさつき言ってたよねえ…。いきなりしたから怒ったって…。」

それって具体的にはどういう風にしたのさ？」

「おい…「丸嬰」。いくらなんでもその質問は」

「えと……押し倒して…した…。」

「押し倒しっ！」

「うわ、もうなつですななっ！」

「くるり…お前…。」

「……淡泊そうな顔してまあ…。」

くるりをとりまく一同が一樣に色を変えて驚いた。あの「丸嬰」ですら予想外のくるりの大胆な行動に驚いている。

結局茶屋の皆には本当の所がうまく伝わらずくるりは「いけない子」とみなされ茶屋の皆よりこれからの「無き原」の人との清く正しい接し方について幾つか議論され、それを守る事をくるりは約束させられた。ちなみにそれは以下の様なものである。

くるりは相手が許すと言う時以外は相手の体に触れてはいけない。

結局「露歩き」の極論案が採用されたのだった。

【中置き 終】

第二章 第一節 一〇二（前書き）

変な所でぶちぎれてすみませんです。

えつとですねえ……この後に【中置き】置かないとちよつと訳わからんという……構成めちやくちやですいませんです。

銃・

第二章 第一節 一〇二

第二章

第一節

—

本当は…すごく怖かった…。

出てけっ…出てけよッ！

本当は…ちょっと行きたくなかった…。

二度と来るなッ！

でも…それ以上に逢いたかったから…。

はらはらと落ちる涙…そして暖かい息…。

あの人に……………。

「……………来るなと言った。」

その人は舞台の中央に立っていた。背後で数珠簾じゆすだれがしゅらしゅらと揺れている。

手には文書きのような半紙が握られていた。

「…この前はごめんなさい。」

くるりはぺこりと頭を下げた。そんなくるりをその青年はやや鋭い瞳で見つめている。くるりはそんな青年の視線を体全体で針を刺されるように感じていた。

くるりはそつと顔を上げた。青年は変わらずくるりを見つめて舞台の中央に立っている。

くるりは青年に向かって歩き出そうとした

「来るなッ！それ以上こっちに……俺のそばに寄るなッ！」

青年は怒りを露わにしてくるりに向かって怒鳴りつけた。くるりは一歩進めた足をびくりと止めてその場で固まった。

長い沈黙…通り抜けていく風…数珠簾の音……。

二人は微動だにせず見つめあっていた。

まるで…命のやりとりをする真剣勝負の最中のように…。

「この前は…ごめんなさい。」

くるりはもう一度青年に向かって謝った。

「…もう、しないから…。あなたに…あなたが良いつて言わない限り絶対あなたに触らないから…。」

だから…この前は…ごめんなさい。」

「……………」

「…傷つけるつもりはなかったの…。ただ…あなたが何なのかわからなくて…知りたくて…それで……………」

「……………」

「あなたは「生人」？」

「……どちらかというとそちら側だ。」

「どちらかというと…?」

「それよりお前だ…。」

「……え?」

「お前:「生人」でも「死人」でもないな?」

「うん……でもどうして?」

「「生人」も「死人」もここで存在する事は無理だから…。」

「……?」

「ここは「死人」の墓場。呼ばれた「死人」は必ず死ぬ…。」

そして迷い込んだ「生人」は墓場の亡者の嘆きと嫉妬に捕らわれて奈落の底に引きずり込まれる……ちょうどこの前のお前のようにな

…。

「…でもあたしは…。」

「その腰の瓶だ。」

「……え?」

青年がくるりの腰を指さしながら少しずつくるりの方へと近づいてきた。

「その中のものには「力」がある。」

そして舞台には奴等の目が集まる…。そんな舞台の上でそんなもの出したからこの前は亡者の嫉妬を買って引きずり込まれかけたんだ。」

「…何で力があると嫉妬を買うの?」

「変わる力があるからだ…。」

「………」

……よく、わからない…。

気付くと青年はくるりが思いきり前へ手を伸ばしたよりも少し先の所にまで迫っていた。

そしてその位置で青年はくるりを見つめたまま静止した。

「……触るなよ。」

「……うん。」

くるりもそのまま青年を見つめ返した。

「……何をしにここに来たんだ。」

「……あなたに会いに。」

「俺に会って何をしたいんだ？」

「……わからない。でも行って好きなようにしなさいって言われて……。」

「

……誰に？」

「「丸嬰」に……。」

「そんな奴知らない……。」

「…………。」

「…………。」

しばしの真剣勝負……。

「……とりあえずこつちに来て座れ……。」

一つ溜息を付いた青年が巻物の散らばる書机の方へと向きを変えて歩き始めた。背中の一つに束ねた長い黒髪がひらりと揺れる。よく見ると頭の下半分は毛髪の無い奇妙な髪形だった。

「……いいの？」

「……触らなければ。触るなよ？」

青年はくるりをじろりと睨む。くるりはまたこくりと頷いた。

「少し興味がある……。」

「……何に？」

「人と話す事に……。」

「………？」

「ここに来て初めて人と話した…。」

「そうなの？」

「……そうだ。」

そう言つて青年は中央の書机の近くの床に腰を下ろした。
くるりにも床に座るよう促す。

「それで？お前は誰だ…？」

「誰？」

「お前の名だ…何と言つ？」

「あたし？……あたしはくるり。」

「くるり？変な名だな…。」

「そう…？」

「どう書く？」

「ん…えと…一応「けもの」の「王」と書いてくるりって言つんだけど…。」

「「獣」に「王」？随分と勇ましい名だな…。」

そう言いながらその青年は書机にちらばる半紙を一枚取り同じく散らばる筆を一本取つてくるりの名を書いた。

「あ…違う。簡単な方の「けもの」。一文字でくるり。」

「一文字で簡単な獣って…。」

狂

青年はくるりの言つたとおりに半紙にその一文字を書いた。

「そう…それ。」

「それって…。」

「……？」

「これがお前の名なのか？」

「そうだけど…変かな？」

「変だろっ、これは…。何か意味があつての事か？」

「えっと……確かあたしの性格がおかしいからこれにしたって言うてたよ…。」

「それが意味……。何なんだお前の親は…こんな名前付けるなんて…。」

「…？付けてくれたのはぬし様。本当の親じゃないよ。」

「ぬし様？」

「そう…「西の指」の「極楽貪主」ごくらくどんすって呼ばれてる人。」

「ごくらくどんす？」

「うん……筆、借りていい？」

「ああ……。」

その青年は書机にちらばる別の半紙と筆をくるりの前に置いた。くるりはそれを取るとぬし様の名前を書いていった。

極楽貪主

「それも……酷い名だな…。」

「そうなの…？でも、この世界にはすごく悪い名前を付ける地方とすごく良い名前を付ける地方があるんだって。どっちも悪い事に負けないようにって意味でつけるらしいんだけど…。」

「……つまりお前の住んでいる所は悪い地方という事か？」

「……ううん、両方いるよ。今のは一緒の部屋に住んでる「崩山」ひがしやまに聞いた話。」

崩れる山って書いて「崩山」っていうの。「崩山」の名前はそう言う意味なんだって。

でもあたしやぬし様は本当にそうだからそういう名前なんだと思うけど……。」

くるりはもらった半紙に「崩山」の名前を書きながら言った。

「……つまりお前は…性格がおかしいのか？」

「……よく…わからない。」

くるりは半紙から顔を上げて青年の顔を見ながら答えた。

「よく、わからないのか…？自分がおかしいのかおかしくないのかか？」

青年は呆れたような顔をしてくるりを見つめた。その顔にはもう苛立ちの色はなかった。

くるりは少しほっとした。

「うん…だってあたしが皆と違うのは本当の事だから…。」

でもそれはあたしだけじゃなくて皆も違う。同じ人なんてどこにもいない…。

…だけどあたしだけ違うとかおかしいとか言われるのは……どうしてなのかあたしにはよくわからないから…やっぱりあたしにはよくわからない。」

青年は一瞬目を見開いて驚いた顔をした。そして俯き己のお腹の辺りを両の手で抱え黙り込んでしまった。

「……………」

くるりはそんな青年を見つめた。青年は随分長く腹を抱えて黙り込んだ。

「……お前…おかしいよ。」

「……そう……。」

「ああ…でも悪い意味じゃない…そうだな…おかしいっていうか…」

そこで青年はくるりに顔を向けた。

その表情は何ともいいがたい不思議なものだった。喜怒哀楽のどれにも当てはめる事の出来ない、しいて言うなら不可解な出来事に直面した時の戸惑いの表情。

「面白いよ…お前。」

その表情にはとても似つかわしくないその言葉を呟くと青年はくるりをじっと見つめ返した。

くるりは訳がわからずただただ見つめる青年を見つめ返した。

何が…？

やっぱりよくわからない…でも

くるりはその青年の不可解な表情を見つめる。その中に在る黒い双眸……。

優しい…瞳。

体の内で何かがつづく……それが何なのかはやはりくるりにはよくわからない…でも気持ちの悪いものではない…。
自然とくるりは微笑んでいた。

二

「ふうん……今日は機嫌が良かったんだ…。良かったじゃあん、くるりい。」

「丸嬰^{まるえい}」がまたまた何処かで調達してきた酒を、童女の成りして飲みながらくるりに言った。相当いい感じにほろ酔いらしい…。
くるりの肩を掴んでゆらゆらと揺れながら酒壺をあおっている。
それはいつもの皆が集まる夕餉の席での事だった。

「それで…？」

その人は何て名前だったの？」

「丸嬰」とは反対側のくるりの脇を固める「ゆめ」が身を乗り出してくるりに尋ねる。

「ゆめ」……お椀に気をつけさない。汁をこぼさないように…。

あと口の中に食べ物を入れて話をするのはよくない。」

すかさず「露歩き」が注意する。

「ゆめ」はちよつとばつの悪そうな顔をして、きちんと座りなおしてお椀の中身をすすった。

「……「かばね」…。」

「え……？」

くるりの呟きにそこにいた皆が反応した。

「無き原」にいる人の名前……「かばね」っていうんだって…。」

「かばね」？」

「かばね…ですか？」

「かばね…。」

「かばね…って…。」

「かばね…ねえ…。」

「かばね…。」

皆一様にその名前を呟いた。

「くるり……まさかその「かばね」っていう字。

「しかばね」の一字で「屍」って事はないですよ…？」

一息置いておずおずと「堯湖」がくるりに尋ねる。

「うん……その一字で「屍」^{かはね}」。
存在が屍みたいに空しいものだから「屍」なんだって……。」

「ッ！」

そこにいる全員が息を呑み、くるりを見つめた。

「ひどい……ひどすぎる……。何なのその人、くるりの事言えないじゃない。」

散々言つといて自分の名前はそれ？」

「え〜でもお似合いなんじゃない？」

心と体でさ？いい感じに名前揃ってるじゃん。」

「あー確かにまるえいさんの言うとおりですね！

うまい具合^{あがつく}に^{あがつく}ついで出来てる。」

「丸嬰」と「閼伽注^{あがつく}」の二人だけが何故かご機嫌に納得して頷き合っている。

「「屍」……か。確かにくるりと対になる……。」

「露歩き」がぼそりと呟く。

そんな「露歩き」を「さき」がひやりとした目つきで見つめた。

「それで？」

その「屍」って人何者なの？あんな所で何してるのよ？。」

「ゆめ」がくるりに質問した。

「ん……それはまだ聞いてないけど、なんだかね巻物に」

たとえ生まれ変わろうとも……。

「っ……………」

それは……………あまりに強い人の思い……………。

「……………」

「くるり？何どうしたの？いきなり固まっちゃって…。巻物がどうしたの？」

「言えない。」

「えっ…？」

「皆にあの人の事……………言えない。」

そう……………だってあれは本当の言葉……………本当の心。

あたしが見ちゃいけなかったもの…。

だから…話すのなんてもっと駄目…。

皆はいきなりはつきりと拒絶の態度を示したくるりに何事かとしはし呆然としたが、その空気は高らかに笑ってくるりに絡み出した「丸嬰」によってすぐに壊された。

「なあになに何よオ…？ん…？」

ついにくるりも家族に言えない秘め事を持つお年頃になっちゃったって訳エ…？

寂しいわア…こうやって親の気持ちも知らずに勝手に巣立ってちやうんだからさあ…。」

その発言とはあまりに不釣り合いな、まるで母親に駄々をこねる幼児の様な仕草で「丸嬰」はくるりにまわりついた。

「ごめん…「丸嬰」。でも…言えない。」

酔いがまわり熱っぽくなった「丸嬰」とは対照的にくるりは冷めた

声できつぱりと言った。

「……ついにくるりに羞恥心が芽生えた……。」

「……そのようだな……。」

そんなくるりを見て「さき」がかなり失礼な暴言を本人目の前にしてさらにと吐き、「露歩き」がその暴言にさらにと賛同を示す。

「ちえ……つまないのオ……。」

今日はくるりのあられもない艶話を肴に酒を楽しもうと思って折角かつぱらってきたのにさア……。」

「丸嬰」はそう言いながら酒壺をあおった。

「……なツ君……まさかそれを窃盗してきたんじゃないですよね？」

「窃盗なんて人聞きの悪いイ……。とある建物の蔵の中に置いてあったのを持ってきただけじゃないかあ。」

「それを窃盗っていうんですよ！何してるんですかつ！

そんなさも当たり前のようにツ……。」

「あゝもうつつさいねえ……そんなかつかするんじゃないよオ。ほんとメガネなんだから……。」

「丸嬰」は抗議する「堯湖」たかこを尻目にしてまたもや壺を傾けてくびりとやった。

そんな「丸嬰」に「堯湖」が詰め寄りその壺に手をかける。

「何すんのさつ！」

「もうこれは没収ですつ！没収つ！

全く……僕の育った所では君位の子供はまだ飲酒が禁止」

「じゃあ、お前が飲め！」

「えつ……。」

「丸嬰」はそう言つや否や酒壺の飲み口を「堯湖」の小言を言つその口につっこみそのまま押し倒した。

「っ　　！ッ！ッ！」

「そおれイツキ、イツキ！」

「はいはいはい、いきいきいき！」

「丸嬰」がけらけら笑いながら掛け声を掛け、それに「閼伽注」も乗って手を叩いて囃し立てた。

「堯湖」は突然の事に驚きながらも必死で抗おうとしたが、いつの間にもやらの左手は「丸嬰」の膝で己の胸の間にがちりと挟まれ、酒壺に伸ばしていたその右手も「丸嬰」の空いている方の手でがちりと床に叩きつけられていた。

どう見ても体格的には「堯湖」の方が勝っているにも関わらず「堯湖」はただ酒を飲み下す為に喉を鳴らす事しか己の自由に出来る動作を持てないでいた。

「堯湖」の顔色がみるみる赤くなり、かと思いきやなぜか急激に水色に染まっていく…。

「えっ… ちょっとまずくない？」

「「丸嬰」！ もういいだろう。」

それを見た「露歩き」が席を立ち「堯湖」に馬乗りになっていた「丸嬰」を「堯湖」の体から引き離した。

「ふふん、こいつも飲んだからこいつも同罪だね。」

「そのとおりそのとおりです。」

「丸嬰」と「閼伽注」が満足そうににんまりとほほ笑む。

「露歩き」はそんな「丸嬰」を掴んでいた手を離すと「堯湖」に近寄りその様子をうかがい始めた。

「大丈夫なの「露歩き」。「堯湖」ってお酒飲めたっけ…？」

「わからない…。共に飲んだ事もないし、飲んでいる所も見ただ事がない…。」

「それって…。」

「まるえいさんそれって何処のおさけ？」

「ん〜銘柄なかったからねえ…。」

でもこの独特の舌触りはたぶん「逝き地獄」かな。」

「逝き…地獄なのか…？」

「露歩き」はとっさに「丸嬰」の方を見た。

「どうしたの？「露歩き」。すごい？そのお酒…。」

「ゆめ」も立ち上がりそつと「露歩き」の傍に近づいていく。

くるりも立ち上がり「堯湖」の傍に行きその顔を覗き込んだ。その顔はすでに水色から限りなく白色に変わっている。わずかに口を開け弛緩したその顔は息をしているのかどうかさえ、少し怪しい…。

「さき」は一人顔色を変えず、何事も起きていないかのように囲炉裏の火を眺めながら湯呑の湯をすすっていた。

「「逝き地獄」は冥獄三大禍酒に数えられる銘柄の一つで……確か一滴で鬼すら昏倒させるといわれていたはず……。」

「そうそう普通のひとはぜったい飲めません。おさけ好きなひとでも飲みません。」

これをつぼでぐびぐびいけるのなんてまるえいさん位ですよほんと。

「

「まあねえ〜。それ程でもあるからねえ〜。」

「丸嬰」が無駄に照れた。

「ちよつと…照れてる場合じゃないでしょ？「丸嬰」。

そんなの「堯湖」飲んじやったんじゃあ……。」

そこまで言つと「ゆめ」は「堯湖」の方に目を向けた。

しかし見るとそこには普通の顔色をした「堯湖」が起き上がってぼんやりと座っていた。

その顔色は先程までの七変化が嘘のように普段通りの人並みの色を

灯している。

とても死ぬ程強い酒を飲んだ顔色には見えない。

「え……………あれ……………」

「大丈夫？「堯湖」…。」

その顔色の急激な回復をずっと見守っていたくるりが「堯湖」にそつと尋ねた。

その声に反応して「堯湖」がゆっくりとくるりの方へ顔を向ける。

くるりと目が合うと「堯湖」はにっこりと微笑んだ。

「屍」のそれと違い、「堯湖」のその双眸はくるりの心にひやりとしたものを予感させた。

【中置】蹴り上げて潰す（前書き）

どもです、銃です。

この時期は相当テンションいかれてたんでしょうねえ…。

今思えばやり過ぎたと反省しております。

ちなみにこれで【中置き】は終わりです。

あとは堕ちていくのみです…。

銃
・

【中置】蹴り上げて潰す

【中置】蹴り上げて潰す

茶屋が長閑な暖色に染まり世界が広がる。
また新しい一日が始まる…。

くるりは「ゆめ」と共に茶屋を出た。
すると「ゆめ」がふっと息をつき一言

「たぶん…完全に終わったわね……」「堯湖^{たかこ}」。

くるりは皆より早く寝てしまったのでその後の大惨事について詳しくは知らない。
くるりが知っているのはあの後いきなり「堯湖」が号泣しながら女言葉で笑いだし、しまいには着物を脱ぎ出した所まで……。

「お前達はもう寝なさいっ。」
そこまでいくと「露歩^{つゆあゆ}き」がさっさとくるりと「ゆめ」を奥の間に押し入れてしまった為その後どうなったのかをくるりは知らなかったのだ。

「あの後がすごいのよ…。ほら、お酒って普段の鬱憤^{ふさみ}が出ちゃうっていうじゃない？」

まさにそれなのよおっ！

「ゆめ」がやっと思わせるとばかりに茶屋の前でくるりにひそひそと

耳打ちをする。

どうやら「ゆめ」はくるりが寝てしまった後も襖の隙間からその様子をつぶさに観察していたらしい。くるりはうんうんと相槌を打ちながらその話に耳を傾ける。

「で、いきなり「堯湖」が

「くるりだけずるいッ！僕も「さき」と接吻がしたいイッ！」とか叫び出してさあ。」

「さき」もいきなりだったからね…思いつきり「堯湖」に押し倒されて

そこまで話した所で茶屋の引き戸がぎしりと音を立てて開いた。出てきた主は「さき」だった。

「ッ……さっ「さき」！」

「……………」。

「ゆめ」はあからさまにあたふたと動揺し、「さき」はといういつものように冷え冷えとした眼差しでそんな「ゆめ」の様子をじっと見つめた。

「……………ねえ。」

「っ！……あついや…その…さ…。」

「ゆめ」が訳のわからない言葉を並べて不自然に「さき」に笑いかけた。

「さき」はというとそんな「ゆめ」を見つめながら普段通り不機嫌を顔に貼り付けて立っている。

「……………ちよっと。」

「っ……っ……ごめんなさいっ!」「さき」「い」。

「ゆめ」「は」「さき」に向かって拝むような仕草をして「さき」の許しを請うた。

「さき」はというと不機嫌な眉根をさらによせてそんな「ゆめ」の仕草を睨むように見つめる。

「何してるの？」

そごいいて。出られないでしょ…。」

「さき」はそういつと「ゆめ」の肩を掴んで軽く脇に押しやり表に出た。

「ゆめ」は不思議そうな顔をして「さき」の姿を目で追う。くるりも「ゆめ」に倣って「さき」のその後ろ姿を追った。

「「さき」……。」

「……もちろん、聞いてた。今話していた事…。」

「っ……!」

「ゆめ」がびくりと肩を震わす。

それとほぼ同時に「さき」がその恐ろしく不機嫌な顔だけを「ゆめ」の方へと傾けた。

強い意志を感じさせる形良く整った眉、艶やかな長い睫毛に縁取られた鈍く光る鋭い黒瞳、血の気の失せて久しい固く閉じられた細い唇。

美しいが故に凄みを増す、初対面の人には怒っているようにしか見えない「さき」の普段通りの表情。

もちろん「ゆめ」も「さき」が普段通りだという事は頭ではわかってはいたが、後ろめたさの為かその表情に怯えを感じずにはいらなかった。

「怯えてるの？「ゆめ」。

別に私は何も怒っていない。

昨日の話をくるりにした事も気になどしていない。」

「え……。」

「だけど……。」

「っ……なっ何？」

「ゆめ」は一瞬ほっとしたかと思うと、また鋭く響いた「さき」の言葉に背筋を伸ばして緊張した。

「そこで話を区切るのだけはやめて。」

「え……？」

そこまで言つと「さき」はくるりの方に顔を向けた。くるりが不思議そうな顔をしてその顔を見つめる。

「とつさに蹴り上げて潰した……。だから接吻なんてされていない。」

「……？」

くるりがいきなりの「さき」の発言の意味を読み取れず首を傾げた。見ると「さき」の後ろに佇む「ゆめ」がひゃっというような奇声を上げて両手を頬に当てている。

「何を？」

いけないくるり発言投下。

「ひッ……ちよっ……くる」

「ゆめ」が顔を赤くし慌わててくるりに近づこうとした時、また「

さき」がその形の良い唇を軽く開きかけそのあられもない言葉を発しようとしたその時、茶屋の引き戸がぎしりと音を立ててまた開いた。

そこに立っていたのは誰あろう

「あれ……皆さんおはようございます。

二人共、もう出かけたと聞いたけれどまだいたんですか？

……？どうしたんですか？こんな所で……？」

「堯湖」だった。

「たあッ………！」

「おはよう「堯湖」。」

「……………」

三人が思い思いに「堯湖」を見つめた。

三人の視線を一身に受けた「堯湖」は一瞬怯んだが、すぐに三人に向かつて朗らかに笑いかけた。

「な………どうしたんです？三人して……。

ははは、嫌だなあ………なんです？何か僕の噂話でもしていたんですか？」

その表情は何の裏もなくけろりとしている。そこに立っているのはまぎれもなく普段通りの「堯湖」だった。

「ちょ、ちよつと「堯湖」。

まさか昨日の事一切覚えていない、とか言っんじゃないでしょうね……。」

「ゆめ」が信じられないといった風に「堯湖」に恐る恐る尋ねる。

「もちろん覚えてますよっ！」

全く本当に糞餓鬼ですよねっ！「丸嬰^{まるえい}」はッ…………。」

「はい…………？」

「いきなりお酒を飲ませるなんて…僕はもう息が止まるかと…………。」

「ああ、そうそうそれでその後…………」

「そうそうその後…。まあおかげで一晩ぐっすり眠れたみたいだから良かったですけどね。」

やはりあれですね…「寝酒」という言葉があるようにお酒は睡眠に良いというか…。

僕、まともにお酒を飲んだ事なかったんですけどね、すごく相性がいいたいなんですよ。

ほら、昨晚確かすごく飲まされたでしょう？けれど全然二日酔いとかにならなくて。

いやなんていうかむしろ体も心もすっきりはっきりしているというか…。

もう今夜から毎晩飲んだ方がいいんじゃないかって位で…………。」

「堯湖」が憎らしくてぶちのめしたくなる位、とびきりの笑顔で本当に嬉しそうに語り切った。

三人は思惑は様々ながら「堯湖」のその様子を呆然と見つめていた。

「…………え、と…………。」

一息置き「ゆめ」が何か言おうとしたその時、その脇を「さき」が音も無く通り過ぎ「堯湖」の目の前でゆらりと止まった。

すると「さき」は「堯湖」の両腕を軽くつかみ、やや見上げるような感じで「堯湖」の顔を睨みつけた。

「さっ……」「さき」？

「え……あ、「さき」……何……です？」

「ゆめ」と「堯湖」が「さき」のその行動に慌てる。

「さき」はひとしきり「堯湖」の顔を見つめると、ぼそりと呟いた。
「私と接吻したいか？」

「っ……！」

「ゆめ」絶句……。

「……………」

くるり無言……。

「あ………え………えエツ??」

もう耳まで真っ赤になって何がどうしてそういう言葉が今この状況で出てくるのか全く訳がわからず、「堯湖」は「さき」に腕を掴まれたまま体を固くして瞳をさ迷わせた。

そんな「堯湖」の顔を「さき」は瞬き一つせず責める様な眼つきでじつと見つめ続ける。

「や………あの……」「さき」……僕は……ですね……。」

「死んでも御免だ。」

「え………?」

「堯湖」がしどろもどろに何か答えようとしたその時、「さき」は「堯湖」の腕をきつく掴むと右足を思い切り蹴り上げた。

「ッ………！はッ………」

「堯湖」はゆっくりと前かがみに……そしてよろよろとその場でうずくまり悶絶した。

その様を「さき」は道端で漬れている虫けらでも見るかのように、

上からつまらなそうに一瞥する。

「う、わぁ……。」

「ゆめ」が半ば青ざめ気味に「堯湖」の地面にうずくまる様を見つめた。

両手を「堯湖」に向けてさ迷わせるが、何をどうしていいものかわからずただただその手は空気を掻き混ぜる事しか出来ないでいる。

「さき」はというと何事もなかったように踵を返すとさっさと茶屋の縁台の方へ向って歩いていった。

くるりはそんな「さき」と地面の「堯湖」を見つめた。

「堯湖」は無言で必死に何かを堪えるように地面に丸くなっている。とにかくとても苦しそうだ…。

「くるり…。」

「さき」がくるりを呼ぶ。くるりは「さき」に視線を向けた。みると「さき」がくるりの方に顔だけ傾けて立っている。

その唇がわずかにうっすらと微笑んだ。

「これが……蹴り上げて潰す。…わかった？」

「さき」の問いかけにくるりはゆっくりと、けれど大きく頷いた。

第二章 第一節 三丁四（前書き）

何やらぼろぼろですみません。

銃・

第二章 第一節 三丁四

三

「それはさぞ……苦しかっただろうな……。」

「屍^{かばね}」が溜息をつくようにそれだけ言った。

そこは、心すら凍てつかせる哀しい風の吹く楼の中。

くるりはそこでくゆる香に身を染めながら「屍」に「堯湖^{たかこ}」の大惨事のあらましから恐ろしい事の顛末までを話して聞かせていた。

二人の間には書き散らした半紙が散らばっていた。

そこにはくるりが書き散らした「堯湖」や「さき」等の茶屋の皆の名前が散らばり、これぞ本人と言い難い「堯湖」の拙い似顔絵が今まさに描かれていた。

「……「屍」も……蹴り上げられた事があるの？」

「そんな事ある訳ないだろッ！」

「……無いのに、どれだけ苦しいのかわかるの？」

「……それはッ……当り前……」

そこまで言つて「屍」は肩を落として溜息をついた。そんな「屍」をくるりが不思議そうに見つめる。

「「屍」？」

「……そうだな……それがわかつてる女子がまだ知りあって日の浅い男子にこんな話題をまず振る訳がない……。」

「屍」がまた一つ溜息をつく。

「……あたしの話……嫌だった？」

「いや……あ、いや……そういう意味じゃなくて…………それなりに面白かった。」

くるりがどういう人達に囲まれてどういう暮らしをしているのか、今の話で少しだけわかったような気がしたから…。」

「本当に…？よかった…。」

くるりは前のめりになっていた体を元に戻してほっと溜息をついた。

「そんなにびくびくするな…。別にいきなり怒ったりなんかしない…。」

「本当に…？」

「本当についてお前…。本当にそれでびくびくしてたのか…？」

その「屍」の問いにくるりはこっくりと頭を前に一度倒した。

それを見た「屍」もくるり同様、けれどがっくりと頭を前に一度倒して固まった。

「……お前……。…」

「「屍」？」

くるりがまた心配そうに「屍」の方に体を傾ける。とほぼ同時に「屍」が顔をあげるりの顔を見つめて言った。

「初め随分怒鳴ったからな…。」

俺がこんな事言うのはまだ信じられないかもしれないが…もう一度きちんと言うておく…。

俺はもういきなり怒らない。だからそんなにびくびくするな、くるり。

もちろんくるりがいきなり変な事をしなければだけどな…。」

くるりは目の前で己を貫く漆黒の瞳に見入った。

ややつり上がり鋭い印象を与える瞳の奥には、それとは対照的に温かく優しい光がほんのりと宿っている…。

「……………うん。」

くるりは「屍」の言葉を信じて優しく頷いた。

「あたしも……「屍」の事、知りたい…。」

「ん……。」

「訊いても……いい？」

「……俺にわかる事なら、なるべく答える……。何だ？」

「……えつと…。」

くるりはそこで酒壺をもつて暴れる「丸嬰^{まるえい}」の姿絵を描いていた筆の動きを止めて、まず何から「屍」に訊こうか考えた。紙の上で動きを止めた筆先からは闇が広がり描き途中だった「丸嬰」の酒壺は完全にその闇の中へと飲み込まれていく。

くるりはぴくりと体を震わすと紙の上から筆を上げて「屍」に質問を投げかけた。

「「屍」の家族はどこにいるの？」

「いないな。」

「屍」はくるりの最初の質問に短い一言を即答で答えていた。くるりは考え、少ししてからまた「屍」に質問を投げかけた。

「死んじやつたの？」

「いや。初めからいない。」

「屍」はくるりの二度目の質問に先程よりは少し長めの二言をやはり即答で答えていた。

「……………」

「……………」

くるりと「屍」のしばしの沈黙…。

始めにその沈黙を破ったのは「屍」だった。

「「昔」の俺にはいたのかもしれないが……「今」の俺にはまだ誰も家族はいない。」

「「今」の俺はまだ生まれていない存在だから…。」

「「屍」……死んでるの？」

「その全く逆だ……。俺は今生身の体を持つ前の魂だけの存在なんだ。だから俺には生身の体を通じた家族というつながりを今はまだ持つていない……。」

「うん……。」

くるりがゆっくりとその話に頷く。

「だがそうするときつとくるりは……疑問に思う（かどうか微妙）だろう……。」

生まれる前の魂の俺が何故言葉を話しものを知るのかと……。

……それは俺が初めての魂ではないからなんだ……。」

そこで「屍」は手にしていた細い筆を慣れた手つきで滑らかに紙の上へと滑らせた。

「普通一度終わった魂はその因縁を全て解かれ個としての形を失い、ある一つの大きな流れの中に取り込まれそこからまた全く別の新たな魂となって生まれ変わる。」

けれどその因縁が他から受けた怨恨や己の私怨で解かれない魂がままある……。」

「屍」は己の話した事の様を紙の上に記した。

「それが……「屍」なの？」

その文様を見ながらくるりが尋ねる。

「ああ……だがこうした事はさして珍しい事じゃないそうだが……。けれど俺のような魂は稀だという……。」

「どうして……？」

「普通、そうした魂の因縁は次の転生でほとんど解かれてしまうからだ。」

けれど俺はこれまで三回生死を迎え、三度の転生を経てもなお魂の

因縁が解けた事がない。」

「解けないと……駄目なの？」

「……後々よくないと聞いた。」

次の転生で因縁が解けないと「肆廻鬼^{しかいき}」という闘神すら恐れる鬼の一種になってしまいうらしい。しかもそれはこの冥獄だけでなく人の世にすら仇なす獰猛な悪鬼だそうだ。

だから俺は魂が転生しないようここに閉じ込められている。」

「誰に……？」

「……俺も、よくわからない。」

その人の言っていた事は思い出せるんだがその声の響きとか面ざしとかそういったものは一切記憶にないんだ。」

舞台からそよぐ細い風が「屍」の顔にかかるほつれた細い黒髪を躍らせた。

「屍」はそつと白く長い指先で己の瞳の前でゆらぐその髪を顔の脇へと流す。

「どうして……解けないの？」

くるりの問いと同時にくるりの胸元で鈴が幽かに震えその時を告げた。

くるりがその報せにわずかに視線を下げた時「屍」がその問いに静かに答えていた。

「……誰も、愛した事がないから。」

そう答えた「屍」の顔には何の表情も浮かんではいなかった。

「屍」は少し……「さき」と似ている気がする……。

「屍」の元を訪れて数日後の昼下がり、くるりは茶屋の縁台で湯を啜りながら隣に座る「さき」に瞳を移した。

「さき」は相変わらずつまらなそうな、そして怒ったような険しい顔をして遠く続く田園風景に目を投じていた。

その手にはくるり同様湯呑が握られ膝の上に置かれている。

くるりはその様をぼんやりと見つめた。

そんなくるりの視線に気づいた「さき」がくるりに顔を向ける。

怒ったような険しい面ざし。

くるりはあわててその顔から視線を外し己の湯のみに顔を映した。

少しすると「さき」は何も言わずまた睨むように己の前方に視線を移した。

くるりはそのまま「さき」とは反対側の方向に瞳を移す。

そこには湯の飲めない「死人」が相変わらず置物のように腰掛けていた。

その虚ろな表情に変化はない。けれど湯呑を握る隙間から覗くその手の平は生々しく爛れていた。

茶屋の湯の感じ方は人それぞれ違う。

くるりにとって無温に感じられるそれも、「ゆめ」にとってはひんやりと冷たく、逆に「さき」にとっては少し火傷する程に熱く感じられるものだそうだ。

おそらくそれは己の存在の在り方に深く関係して変わるものらしい。「死人」の「さき」にとって非常に熱く感じるそれは、飲む事の出来ない同じ「死人」のその青年にとって熱湯以外の何物でもないのかもしれない。

それはその手の平の様子からおそらくその予想が間違っていないだろう事がわかる。

冥獄に堕ちてくる「死人」はここまで堕ちてくる間にほとんど業が解かれてこの人のようになってしまうって昔ぬし様が言っていた……でも……。

そこでくるりはまた「さき」に視線を戻した。

その耳に「極楽貪主^{ごくらくどんす}」の声が蘇る。

罪が赦される罰を受けてもなお、強く悪しき想いに絡めとられた魂は決して解かれる事はない、それが「さき」じゃ…。

「さき」は多くの怨みを買って死んだ。そして「さき」も多くを憎んでしまっている。内と外からかかるその呪縛が「さき」を解放しないのじゃ。

くるりの視線に気づき「さき」がまたくるりの顔に視線を向ける。

一度死んでまだ魂が解けない「さき」…。

普通はその次の転生で解けると言った「屍」はそれを三回も繰り返してる…。

「さき」が眉根を寄せてその顔をきつく睨む。それでもくるりは心ここにあらずでその顔をぼうつと見つめたまま物思いにふけていた。

「屍」は誰も愛した事が無いからって言ってたけど……。
「さき」は …。

「さつきから何？くるり。」

「え……………」

くるりが我に返るとあからさまに不快な顔をした「さき」の顔が目の前にあった。

その瞳にはぞくりとするような鈍い鬼火がくすぶっている。

「私に何か聞きたいのか？」

そうならはつきり言え。」

「さき」が問い詰めるようにくるりに、いや実際問い詰めて話しかけた。

「……………似てたの……………」

くるりはぼそりと呟いた。

「何が何に？」

「さき」が尋く。

「「さき」が「屍」に……………」

「屍」は三回生きて死んでるんだって。だけどまだ魂が解けないんだって……………」

「……………そう……………うらやましい……………」

「え？」

くるりが「さき」の呟いた予想外の言葉に思わずその顔をまじまじと見つめた。

「さき」は瞳を逸らさない。くるりを見据えて静かに答えた。

「……………私は、この怨みを忘れて次を生きるなんて嫌だ。何度生まれ変わろうともこの怨みを忘れたくはない……………」

「……………どうして……………」

「そうでなければ救われない者がいる……………」

そう呟く「さき」の顔はひどく寂しげなものだった。深く傷つき悔いるような眼差し。

それを見て「さき」は確信した。そして思わず自分の確信を口にしていた。

「「さき」は……忘れるよ。」

「さき」が何も言わずくるりを見つめた。そこに先程までの責めるような色はなかった。

ただ呟くるりを無心で見つめていた。

「生まれ変わっても魂が恨みに縛られるのは誰も愛した事が無い魂なんだって。

でも、「さき」はきつと違うから……生まれ変わったらきつと忘れる。」

「さき」の瞳がただただくるりを映し、一つ瞬きをするときくるりから顔をそむけ遠くを見つめながらぼそりと呟いた。

「……………知っている。」

そう呟く「さき」の声音にはいつもの冷たさが一切無く、常ならぬ「さき」の落ち着いた声の響きにくるりは少しどきりとした。

「だから私は……忘れない為にここまで堕ちてきた。」

何だろう……………何か……苦しい。

くるりが思わずそつと「さき」の手を握ろうとしたその時、遠く続く畦道を茶屋に向かって駆けてくる人影に気づいた。

「あ……………」

「「ゆめ」……。」

それは「ゆめ」の姿だった。

でも、何かおかしい。

「墮烏苑^{だなんえん}」に向けて朝方出かけた「ゆめ」がまだ昼下がりのこの時刻に戻るのも勿論の事だが、駆けてくるその姿があまりに必死過ぎる。

まるで何かから逃れようとしているかのように……。

「どうしたんだろう……。」

「さあ……。」

思わず眠くなる程長閑な茶屋の光景には似つかわしくない「ゆめ」の動きに二人が目を奪われているとみるみる「ゆめ」の姿は大きくなった。

あっという間に二人の前に辿りつくとそのまま倒れ込むように膝をつく。

「「ゆめ」？」

「どうした？」「ゆめ」。

何があった？

「……っ……は。」

「ゆめ」は息も絶え絶えに肩を大きく上下させながら二人の前にしやがみこんでいる。

その表情は俯いている為よくわからない。

でも……こっちに向かってくる時「ゆめ」が浮かべていた

顔は……。

くるりの目の裏に先程の「ゆめ」の顔がよみがえる。
蒼白で何かに脅え、何かの救いを求める顔。

そう…あれは。

命乞いをする顔た……。

「……水……。」

「ゆめ」の顔の先にある地面に大粒の汗の玉がぱたりと落ちた。

「水……ちようだい……。」

「ゆめ」が消え入りそうな声で呟いた。

それを聞いたくると「さき」がすぐさま後ろを振り向くと、そこ
にはすでに音も無く「あかつく閑伽注」が湯呑を盆に載せて立っていた。

くると「さき」がその突然の出現に驚いている間に、「閑伽注」
はすりと「ゆめ」の前に腰を下ろし「ゆめ」に盆の湯呑を無言で
勧めていた。

それに気づいた「ゆめ」はすぐさま湯呑をつかむと、勢いよく湯を
すすった。

「ヴっ　　！」

そう言うやいなや「ゆめ」が思いきりむせた。
それでも苦しそうにとりあえず湯呑をすする。
そんな「ゆめ」の必死な姿はくるりの心を何だか落ち着かない気持
ちにさせた。

そう……これはとてもよくない気持ち。
とても……不吉な気持ちだ…。

湯呑をすすする「ゆめ」の背を「閼伽注」がさする。

しばらくすると「ゆめ」がそのまま眠るように崩れ落ち、空になった湯呑がころころと地面を転がり孤を描いた。

そして、その日「ゆめ」は一度も目覚めるなく昏々と眠りについた。

その一夜、くるりは中々眠りに就く事が出来なかった。

「ゆめ」を見て感じた不吉な予感がじわじわと胸にくすぶり、それが消える事がなかったからだ。

それは「さき」も同じようであった。

「死人」の「さき」が眠らない事は普段通りであったが、人嫌いの「さき」が眠るゆめの傍を決して離れようとしなのは稀な事だった。

そう……こんなに近くにいるのに、強いつながりが感じられない……。

これは……。

「ゆめ」に添い寝しながらくるりは闇の中で、自分を見つめるその瞳を捉えた。

それは反対側で添い寝をしている「さき」だった。

その瞳の語るものはくるりの心の内にあるものと同じだった。

その事がくるりを確信させた。

「縁」が薄れてる……。

ひやりとした夜気がくるりの心を深々と満たしていった。

第二章 第二節

第二節

—

次の日の朝、「ゆめ」はいつも通り起き皆と食事を共にした。

「ゆめ」は一晩ですっかりやつれたような顔色をしてしまっていたが、皆の前では何事もなかったかのように努めて明るく振る舞おうとしていた。

当然その事にはそこにいる皆が気づいていた。気付いていて触れなかった。

「露歩き^{つゆある}」一人を除いては……。。

「昨日、何があつた？」

「ゆめ」の顔から張り付いた笑みが潮が引くようにすうっと消えていく。

そのうすら寒い空気に「堯湖^{たかこ}」が一人ぴくりと肩を動かした。

「何でもない。」

ただ意味を紡ぐ為だけに呟かれたその言葉はあまりに冷たく空気に響いた。

この響き…前に……。

くるりの頭の中を数千年前の記憶が蘇る。

確かあれは「ゆめ」が夫人の元に通うようになった時…。

初めて「ゆめ」がその人の元から帰った時、「ゆめ」は嬉しそうに

夫人や夫人の館、そして夫人に仕えている男の人についてあれこれとあつた事を一つ一つ話していた。

けれど、次の日。

夫人の元から帰ってきた「ゆめ」は夫人の話を何もしなくなった。あんなにはしゃいで話していたのに……

「言えない。」

とばねきの振った話にそう短く答えていた。心を閉ざして完全に拒絶して…。

ちようど、今のこの響きで……。

「そつか……。」

しばらく無言で見つめていた「露歩き」はそれだけ呟くと、湯のみを置き己の得物を手に取った。

「「厭山^{ようざん}」に薪を取りに行ってくる。」

それだけ言つと「露歩き」は己の得物を背にかけて茶屋の表へと出て行った。

「あッ……僕も行きます！待ってください、「露歩き」様！」

朝餉の半ばだった「堯湖」が急いで椀に残る豆の煮汁をすすると、脇に置いていた二本の刀を手にとってその後を追うように茶屋の外へと駆けて行った。

「さつて……私も急いで食べて出かけなくちゃ。」

「ゆめ」が普段の花のある笑顔を顔に咲かせて、お椀の中身を口の中に掻き込んだ。
中に掻き込んだ。

「さき」も「丸嬰」も「閼伽注」も何も言わない。

湯呑をすする音と「ゆめ」の食事の音だけが、囲炉裏ではぜる薪の音に溶けていった。

二

「そんなに……「縁」というものは大事なものののか？」

「無き原」の楼閣で座しながら「屍」は不思議そうにくるりに尋ねた。
た。

床に無造作に散りばめた半紙を間に向かい合う、それがくると「屍」の常の距離感となっていた。

「……たぶん。」

「縁」の薄れた「ゆめ」を見てすごく嫌な感じがしたから……。」

くるりが俯いてその胸元に小さな拳を作った。

「そういうものなのか？」

「屍」がおもむろに風の吹き込む舞台の方へと顔を向けた。

くるりはその白く月光のように輝く涼しげな横顔を見つめた。

「俺には、よくわからない…。」
その瞳は外からわずかに忍び入る骨の針山の哀しげな光をたたえていた。

まるで……。

胸元に握られた拳をゆつくりとその横顔に差し伸べる。
その動きを目の端で捕えた「屍」がわずかに身じろぎあごを後ろへと退かせた。

緩やかな接触と緩やかな拒絶……。

その動きでくるりは我に返り、伸ばしかけたその手を自分の胸元へと戻していた。

「ごめんなさい…。あたし、また……。」
「……………」

「屍」は何も言わない。けれど初めの時のように怒りを溢れさせて激昂する様な事はなかった。ただくるりから瞳をそらし静かに心を閉ざしていた。

「外の光が夜の雪明かりみたいに见えて…。」
「雪……………」

「うん……。それで光ってる「屍」が雪の中に一人いるみたいに見える……。」
悲しげに見えて……。

思わず

「

思わず……触れなくなった。

一人じゃないとその横顔に伝えたかったから……。

ザンッ

……………

ザンッ

……………

ザンッ

静寂な楼の中に突如響き出したその音にくるりは身をすくめた。
それは舞台の数珠簾の音のようだった。

数珠が簾の紐の中を一定の間隔で上下している。

「何……？」

明らかに空気が変わっていた。

楼に流れ込む風は楼の中に留まってぐるぐると廻り、たゆたう香はその流れに乗り孤をゆるゆると描いている。

「……………来たか。」

「屍」は小さな溜息と共に呟くと目の前に広げていた半紙を手早く片付け始めた。

せわしなく立ちあがるとその束を楼の中心にある書机の傍の紙の山の上へと放る。

その間にも数珠簾の音は鳴り響き、徐々にその間隔を狭めていく。

「……………」

くるりは楼の中を動き回る「屍」とその背中を馬の尾のように揺れ動く髪の毛を黙ってじっと見つめていた。

「さて……と。」

「屍」は座椅子を書机の前に、舞台を背にして座れる位置に置くと、その中にすくと腰を下ろした。

書机に半紙を広げ、両の着物の袖が邪魔にならないよう書机の内側に落とすと筆を手に取り前を見据えた。

「どうしたの？「屍」…。何か来るの？」

くるりがぼんやりと「屍」に尋ねる。

「あっ！」

そこで「屍」は今初めてくるりの存在に気づいたかのような顔をすると、書机を飛び越えてくるりの所まで飛ぶように駆けてきた。

「屍」がくるりのその腕を何の躊躇もなく掴み、その勢いのままくるりを立たせる。

「あ……。」

くるりが戸惑うのもそのままに「屍」はくるりの手を引いて楼の中をぐるぐると歩き始めた。その間にも数珠簾の音は小刻みになっていく。

「……そうだった。くるりの事忘れてた…。」

今の今まで目の前にいたのに。

っ……くそ……ずっと一人が当たり前だったから……。」

「屍」が何事かぼそぼそと呟きながら楼の中を早歩きで動き回る。くるりはそれに引つ張られる形でただなすがままにその後を辿る。

「くるりは……まだいいとして。
とにかくその壇だ……貸せ！」

突然「屍」はくるりに向き直るとくるりの腰に下がる茶屋の湯の入った壇を指さして手を差し出した。

「これは……帰るのに使うから……。」

「知ってるよ、預かるだけだ！」

そうでないとの道の道ここから出られなくなって二度と使えなくなるぞ！」

「屍」は一気にまくしたてると半ば強引にくるりから壇を受け取り、己の懐へと胸元から着物の中へ滑り込ませた。

その「屍」の行動にくるりが小さく声を上げている間に、「屍」は書机の周りに積まれた半紙や巻物の山を両手一杯に抱え込み楼の隅へと小走りで向かっていった。

「ここに座れっ！早く！」

「屍」に示された楼の隅にくるりは膝を抱えるように座り込んだ。と同時に「屍」が広げた巻物をばらばらとくるりの頭の上にかけていく。

「……「屍」。」

「しゃべるな、あと動くな……帰れなくなるぞ。」

「屍」がまた両手に抱えて持ってきた巻物を広げながらくるりに低く諭した。

くるりは口を閉ざして固く両膝を抱えて頭の上に垂れていく巻物を

見つめていた。

それは楼の中で焚かれている香の香りをしつとりと染み込ませていた。

この香り……何だかぼんやりする……。

その香の香りは「無き原」を歩く時のように自分と世界の境を曖昧にさせた。けれど不安はなかった。むしろ世界に溶け込んでしまったような一体感を与えるその香りはくるりの心を安心させた。

たんっ ！

ぼんやりしていたくるりの目の前に、「屍」が仕上げとばかりに香台を一つ置く。

「「屍」……。」

しいつと「屍」が人差し指を己の口元に当てる。

目で頷くくるりを認めるとまた中央の書机の座椅子に腰を納めた。

数珠簾の音はすでに間隔はなく一つの連なる音のように楼の中を響き渡っている。

耳障りな羽虫のような響き。次第に大きくなるその音。

その響きが最高潮に達したその時

ぎし……。

数珠簾の音は一瞬にして鳴り止め、一拍遅れて階段のきしむ音が楼の中を響き渡った。

また……先程までと空気が変わった。

三

そこに現れたのは小柄な女性だった。

結い上げていたであろう髪の毛は着物同様酷く乱れ、まるで頭から水をかぶったかのようにしとどに濡れそぼっていた。

けれどその右腕に固く結ばれた腰紐の先には、濡れているにも関わらず細く長い紫炎をなびかせていた。

素朴ながらも華のある顔だった。

けれど蒼白でひどく疲れたような顔をし、その瞳は何の光も色も無くただ硝子玉のように世界を映していた。

「死人」……。

くるりはその「死人」を楼の片隅の巻物の山の中から盗み見た。

ずるずると腰紐を引きずりながら水跡を残してゆつくりと歩みを進めていた女の足がぴたりと止まる。

ゆつくりと、視点の定まらぬ目をしたまま顔を何度も左右へと動かしている。

と、くるりの座る楼の片隅に顔を向けたまま動きを止めた。

じっと、何も感じていないかのような顔をしながらそこに何かを感じ、それが何かをつき当てようとするかのような……。

その足先がわずかにくるりの方へ向こうとしたその時

こんこん…。

「死人」がそちらへ顔を向けるより少し早くくるりは音のした方へと視線を移していた。

それは書机を前に座る「屍」からした音だった。

こんこん！

書机を筆の尻で軽く叩いている。

「死人」はその音につられるようにまた「屍」の方へ向けて歩き出した。

「死人」が「屍」の正面へと座る。わずかに俯く儂げな姿。

その唇から細く青白い溜息が洩れる。

それは長い長い溜息が……。

？

それはあまりに長かった。「死人」が座り、初めの溜息について随分時間が経つがまだ一度も息継ぎをしていない。

「死人」だから息継ぎをする必要はないのかもしれないがその光景はくるりにとって不思議なものとして映った。

「死人」の吐き出す青白い溜息は「死人」の周りを細い糸のように流れていく。

それは次第に「死人」を包んで巨大な繭のようになり、いつの間にやらその姿を完全に包み消してしまっていた。

対する「屍」はというと筆を構えたまま微動だにしない。

その精悍な顔つきはまるで人形のようにであった。

巨大な繭から一筋の糸が伸びる。

それはするすると「屍」の筆を握る右手へと向い、その手にゆっく

りと絡まり出した。

と同時に「屍」の筆がするすると描くように紙の上を走りだす。

「屍」の顔がわずかな陰しさを見せる。

その間にも繭から伸びる糸は「屍」の右手に絡みつき筆を紙の上へと滑らしている。

そう……たぶんあれはあの繭の糸が、あの「死人」が「屍」に書かせているんだ。

くるりは瞬きするのも忘れてその光景を息をひそめてじっと見詰めていた。

繭から糸がどんどん伸びているのに、「屍」の右手に絡む糸の量は変わらない。

次第に繭は薄くなり最後の一筋が「屍」の右手に吸い込まれるように消えたその時、そこに先程の「死人」は見当たらなかった。

後に残されたのは、階段から続く水の跡とその水溜りの中でも今だ揺らめく紫炎を灯した腰紐一つだけだった。

「屍」の筆がゆっくりと止まった。

同時に「屍」が深く溜息をつくとそのまま机に突っ伏した。

「屍」はそのまま動かない。くるりもそのまま巻物に埋もれたまま動かない。

くるりはただただ机に突っ伏している「屍」を紙の隙間から見つめていた。

りりん…。

その鈴の音に「屍」が顔を上げたのは、机に突っ伏してからどの位

経った後の事だろうか。

飛び起きるように顔を上げると急いでくるりの座る楼の隅まで駆けてきた。

香台を脇に避け、手当たり次第に巻物の山を崩していく。

そこには先程までと変わらない「屍」を見上げるくるりの顔があった。

「……………っ。言ってくれよ。」

「しゃべるなっで…「屍」が言った。」

くるりは膝を抱えたままの姿勢で「屍」に答える。

くるりにしては珍しくやや不満そうな顔をしていた……。

「……………っ。その……すまない。」

「……………うん。」

くるりは小さく頷いた。

りりん……。

二人の視線がくるりの胸元の鈴で絡まる。

くるりがゆっくりと「屍」を見つめた。

「あたし……帰らないと。」

「ああ……。体、大丈夫か？痛くないか？」

「屍」がまた無造作にくるりの腕をつかみくるりを立たせた。

「あ……。」

驚くくるりにも気付かず「屍」は己の胸元に潜ませていた壘を取るとくるりの手に持たせた。

くるりはその手をまじまじと見つめる。

「何だ？」

「て」

「は？」

「「屍」…手。あたしに触ってる。」

「あ……わッ！」

今気づいたとばかりに「屍」が驚いてその手を放した。

その途端、くるりの手に軽く握られた壇がぐらりと傾く。

無意識に「屍」はまたくるりのその手ごと包み込むように支えていた。

その手がびくりと震える。けれどすぐに離れる事はなかった。

冷たい手……………。

二人の視線が重なる手元に留まる。

「……さっきも、あたしに触ってた。」

「……。無我夢中だったから……。」

「……………」

「……しっかり持ってる。これがないと帰れなくなるんだろ！」

突き放すようにそれだけ言うと「屍」はくるりから手を離して長い黒髪を翻し楼の中央へと向かった。

少し手に握られた壇を見つめ腰にくくると、くるりもまたその後へと続いた。

中央に出来た水溜まり、その中に落ちる腰紐、その腰紐から立ち上る紫炎……。

これ……生きてる。

「屍」がくるりに別れの挨拶を言おうと振り返ったその時、くるりが今まさにそつとその腰紐に触れようとしている所だった。

「やめろッ！」

初めて会った時、くるりに「出てけ」と怒鳴った時と同じ位の強い言葉で「屍」は叫んでいた。

くるりがびくりとその手を引く。

と、同時に腰紐から蛇の様な細くうねる紫炎が何本も立ち上り、今まさにくるりが手を引いたその空間まで喰らいくように焼きついた。

そのわずかな火の粉がくるりの指先をかじる。

「ッ…あ！」

くるりがその指先を押えてかがみ込んだ。

「馬鹿！触ろうとするな！」

嫉炎だぞっ！
しえん

「屍」はくるりに近づくと一瞬だけ躊躇を見せたが、その手を乱暴につかみ、自分の口の中にその指を突っこんだ。

鈴の音だけが涼やかに楼を流れる。

何度か口から出してその指先を確認してはまた口に含む、くるりは目の前の真剣な顔をして自分の指を咥える「屍」を見つめていた。

「早く行け……。」

最後に指先を確認するとすぐに手を離し、「屍」はくるりから目を

そらすようにして低く呟いた。

「ありがとう……。」

くるりはぺこりとお辞儀をして立ち上がると下層へと続く階段に向かった。

「……本当に……人に触れるのは嫌なんだ……。」

それはくるりの体半分が下層へと隠れてしまっている時に呟かれた言葉だった。

おそらくくるりに聞かせる為のものではなく、心がわずかこぼれた為に出た言葉だったのだろう……。

今にも泣き出しそうな……悲しげな呟き。

くるりの耳にそれは届いていた。

ぴたりと足を止め、床の上で苦しげな気配を漂わせる影法師に目を向ける。

「あたしは、「屍」が心配してくれて嬉しかった。」

「屍」に聞かせる為に、くるりは心の声を素直に呟いた。

「屍」は何も言わない。

くるりはひっそりと階段を下りていった。

第二章 第三節（前書き）

どもです。

この辺から異様に展開が早くなってきたいるやもやも……。
まア雰囲気（？）で読んでいただければ幸いです。

銃・

第二章 第三節

第三節

—

あたしを引つ張るその手は…。
あたしを立たせるその手は…。
あたしに手渡すその手は…。

どれも、とても冷たくて…。

でもその手はどれも…。

あたしを「死人^{しびと}」から隠そうと…。
あたしの体を気遣おうと…。
あたしの大切な壘を守ろうと…。

どれも、とても優しい手だった。

……本当に…人に触れるのは嫌なんだ…。

あたしは、触れたい。「屍^{かはね}」に触れたい。
だって「屍」は…。

骨の雪山の中にただ一人……。

それはとても寂しそうに見えるから……。

気付くと肌に感じる気候はとても温かいものになっていた。

いつの間にかやらの目の前には道が出来、それが果てしなく続き黄土色の草原は空の朱に染められて炎のように、けれど優しく揺らめいていた。

道はぐねぐねと幾つもの小山の上を走り、くるりが何度目かの上り下りを繰り返した時、遠くと同じような小山にそこだけ違う茅葺屋根の小屋が見えた。

くるりの帰るべき、仮の住処。

くるりを温かく迎え入れてくれる人々の待つ処……。

茶屋の前の縁台には、三人の人影が見える。

一人は「さき」、そして「堯湖^{たかこ}」、最後にあの飲めない「死人」だ。「さき」はいつもの縁台にいつものように腰をかけ何事かを呟いている。

一方「堯湖」は、「さき」の座る縁台の茶屋を挟んで隣に位置する縁台に腰を掛け「さき」の方に体を傾けて何事か話している。そして、最後の「死人」はといういつものように……。

虚ろな瞳。

くるりに印象的に映ったのはそれだけだった。

普段置物のように動かないその「死人」が、湯のみを投げ出し突然自分に向かって突進してきた事も、その勢いで押し倒され馬乗りにされた事も、くるりにはあまりに唐突な事ですぐには理解出来なかった。

それがくるりにも理解出来たのは、「さき」の鋭く静かに重い一言がその「死人」の頭上を貫いて上から降ってきた時だった。

「そこまでだ。」

決して声を荒げていないけれど決して抗えない、人の腹に何か重いものを落とすような「さき」の声。

「死人」の動きはまだくるりに向かって手を動かしている。けれどその手がくるりに届く事はなかった。

「死人」の首には、鞘に入ったままの二刀の刀が交差して食い込んでいた。

その後ろには「さき」がまさに鬼の様な形相で、交差した両手にしっかりと刀を握りしめ不動の如く立っている。

さらにその後ろから「堯湖」が慌てて駆けつけてきた。

「だ、大丈夫ですか！くるり！「さき」！」

「堯湖」の慌てふためく声に「さき」がこめかみに青筋を立てながら振り返る。

「私が、怪我をしたように見えるか？」

くるりにはすぐわかった。

「さき」が今本当に不機嫌に「堯湖」の問いに応えている事を。

「いや……えと……」

「堯湖」もその不機嫌がわかってかわからずか、とにかく何事かを呟こうとしどろもどろとしている。が、その言葉が意味を成す前に「さき」が眉根を寄せて先に言葉を吐き捨てていた。

「護兵が聞いて呆れる。

いざ一人の娘を守る事も、己の得物を守る事も出来ないとはな。」

そう、見ると「死人」の首に食い込んでいるのは「堯湖」の二刀の愛刀だった。

「堯湖」が恥じたように唇を噛んでわずかに俯く。

「わかったか？己の甘さが。普段から中途半端な考えでいるからこうなるんだ。」

本当に何があつたのだろう。

「さき」はひどく怒っていた。

「…………縛るものを持つてこい。私がこのまま押さえている。」

「さき」がそう静かに呟くと「堯湖」は黙って茶屋の中へと駆けていった。

「さき」の顔が正面に向き直る。

瞳の鬼火は煮えたぎり肩から煙が燻ぶるのが見えそうな程、「さき」の気配と表情は険しかった。

しかしそれでもなお「さき」の顔は恐ろしく美貌であった。

「あいつを見ていると…本当にいらいらする。」

くるりは寝転がった体勢のまま、「さき」の唸るような呟きを耳にした。

「……たぶん、その嫉炎しえんだね。」

夜の団欒の席で、「死人」の捕り物劇が話題にのぼると「丸嬰まるえい」がちろりと一舐めくるりを見やるとあっさりそう言っつてその指先を示した。

「嫉炎……。」

くるりがそのわずかに火傷を負った指先をもう一方の手でそつと触れる。

その指先に皆の瞳が集中した。

「嫉炎つて？」

くるりが尋ねる。「丸嬰」が腕を組み直しながら面倒臭そうにその問いに答える。

「嫉炎つてのは、元天人、「潤愕卵うるがくらん」の嫉妬の炎の事さ。

そいつは自分が恋人に捨てられた腹いせに相思相愛の男女の魂なんかを見つけるとその縁を切り離すっていう迷惑な奴だね。

くるりの手の火傷はその嫉炎の痕だ。

おそらくそうした、そうだね…心中かなんかした魂に触ろうとしたんじゃないのかい？」

心中した魂…。

小さな体、ずぶ濡れの、その腕にはきつく結びつけた腰紐が垂れさがる……。

「……うん、たぶん……。」
くるりはゆっくりと頷いた。

「何ですか？……つまりその火傷が、くるりがあの「死人」に襲われた原因だというのなら、まさかあの「死人」はその……。」

「堯湖」が茶屋の外の大木に縛り付けられている「死人」を思っ
て外を見やる。

皆もその方向へ耳を澄ました。

耳を澄ますとわずかにざりざりと地面を足で擦る音が聞こえる。

縛り付けられてもなおその「死人」はくるりを求めて動きを止めな
かった。

「さあね。」

もしかしたらくるりに火傷を負わせた「死人」と心中した相手が、
あの外の奴なのかもしれないし。

はたまた「潤愕卵」に縁を断ち切られた事のある別の「死人」なの
かもしれないし。

まああたしにはどうでもいい事だ。」

「どうでもってッ……。」

「どうでもいいに決まってるじゃないか？別にあたしらの人生に何
の関係もないんだから。」

あんたもちよつとはその何でも自分のメガネに収めようとする癖
を何とかしな。」

「っ……。」

「堯湖」が珍しく「丸嬰」の物言いに何の反論もせずに黙りこんだ。
くるりは何となく「さき」の方を見る。「さき」はむっつりと不機
嫌な顔をして何も聞こえていないかのように囲炉裏の火を見つめて
いた。

「……とにかくだ。くるり！」

「丸嬰」の呼びかけにくるりははつと顔を向ける。

「その傷が治るまで無き原に行くのはやめときな。」

その傷はいわば呪いみたいなもんだからね。

表の「死人」みたいに縁を断ち切られた奴等にいつどこで集まれるかわかったもんじゃないんだからさ。」

「……………うん。」

本当は「屍」の所に行きたかった。

人に触れるのは嫌だと悲しげに呟く「屍」、その姿はあまりに孤独で出来るだけ傍に付いていてあげたかった。

けれど大人しく置物のようだった表の「死人」の豹変と、「つゆある露歩き」を始めとする茶屋の面々の心配そうな顔を見ているとくるりは納得せざるを得なかった。

わずかにただれた指先の紫痕に瞳を落とす。

「どの位で治るかな？」

「そうだねえ……普通の傷と違って呪いだからねえ。」

呪いってのは達が悪いと一生取れなかったりとかするからねえ。」

その言葉にはつとするくるりに「丸嬰」が意地悪い笑みを浮かべて諭す。

「まっ……そういう意味じゃあここが仮の住処だったって事は、かなり幸運だったって事だよ。」

ねえ？「あかつく闕伽注」。」

「全くまるえいさんのそのとおり。茶屋のゆはのろい取りにもかなり効くの。」

そう言つて「あかつく闕伽注」は茶釜から湯を掬い茶碗にたつぷりと注いだ。「さっくるりさん。ゆび入れてみて。」

「閑伽注」がにこにこ湯の入った茶碗をくるりに勧める。

そつと茶碗の中にただれた指先を沈める。

その瞬間、そのただれた部分の皮膚が強い力で引き千切られるような感覚に襲われた。

くるりは思わず小さく悲鳴を上げて湯から手を引き抜いていた。

「「閑伽注」……これすごく痛い。」

「それはあたり前。しょうがないの。」

だつて呪いをとろうとしているんですから。痛いのはとうぜん。」

「閑伽注」がにこやかにくるりに答える。

「で・も。」

「閑伽注」がその顔をくるりに寄せる。

「早くなおしたいならどんなに痛くてもがまんしてください？」

早く治したいなら……。

くるりの顔に触れるか触れないかまで顔をつき寄せた「閑伽注」の言葉にくるりはしっかりと頷いてその指先を茶碗の中に沈めた。唇を噛みしめその激痛に耐えるくるり。皆がそのくるりの様子をその指先を見つめていた。

三

幾つかの夜が過ぎ幾つかの朝が訪れた。

茶屋の窓や屋根の隙間から極楽蝶の燐粉を思わせる光の粉がその穏やかな微風と共に注ぎ込まれる。

くるりが目を覚ました時、その指先は目の前の床の上に転がっていた。

呪いを受けたその指先の紫痕ししんは幾分薄くなったように感じられたが、その紫痕を縁取るかのような蚯蚓腫れみみずばは次第に膨れ上がり却って痛々しかった。

指先を親指の腹でそつと撫でる。痛みと共に絡みつくような弱々しい熱を感じた。

地面をざりざりと擦る音が外から聞こえる。

今日も……駄目。

くるりが体を動かしその顔を天井に向ける。肩口で柔らかな衣がざらりと音を立てた。

くるりはそつとその衣に触れる。

くるりの体の上には「露歩き」の衣が掛けられていた。

くるりは毎日茶碗の中に指を浸してはその激痛に耐えていた。

そしてその痛みに疲労しそのまま眠りに落ちる生活を送っていた。

始めの内は、「露歩き」がくるりを奥の間の蒲団の上まで運ぼうとしていた。

けれどくるりはそうすると必ず目を覚ましてしまい、また茶碗に向かつてしまっていた。

次に「露歩き」はくるりが眠りに落ちるとその上に布団をかけるようにしていた。

けれどくるりはそうすると日が昇り茶屋の中が温かい空気に満たされるとすぐ目をさましてしまい、また茶碗に向かつてしまっていた。そうして「露歩き」はくるりに自分の衣を掛けるようになっていた。くるりが一番安心出来る「生人」の衣は、くるりをぐっすり眠らせた。

「まだ寝ていなさい。」

くるりの耳に静かで優しい声が響く。

ゆっくりそちらへ顔を傾けると囲炉裏の向こうに衣を一枚脱いだ「露歩き」が胡坐をかいて座っていた。

「……ごめんなさい「露歩き」。あたしまたそのまま寝ちゃって。」
「気にするな。」

「露歩き」は古びた書物に目を落としたまぐろりに答えた。
それは少し前に「丸嬰」がまた何処からか大量に持ってきた書物の一つだった。

垢と大量の血で所々汚れたそれらの書物は、最近「露歩き」と「さき」に好んで読まれていた。
そうこの二人だけ、「堯湖」は読まなかった。くるりはその事が不思議でなかった。

「堯湖」は始め本を見るなり散々「丸嬰」にまた窃盗ですかと問い詰めていたがやはり古い本に興味があるのか、「丸嬰」と「闕伽注」の目の無い時を狙ってこっそりその本を手にとっていたのをくるりはまどろみの中見た記憶がある。

けれどそれ以来「堯湖」がその書物群の山に触れようとした事はなかった。

顔面蒼白で口元を押さえて表へ出ていった「堯湖」。

「堯湖」が何故そのような表情を示したのか、古く難しい文字の読めないくるりにはわからなかった。

「少し休みなさい。」

くるりの一番心地よい声が一番心地よい言葉をささやく。

「「ありひと在人」は死なない。けれど死なない事が消えない事とは限らない。」

くるりは「露歩き」を見つめた。その白髪は差し込む日の光を浴びて金色に輝いている。

「あたしは……消えてなくなるの？」

くるりの瞳が「露歩き」の海のような瞳に沈む。

「わからない。」

けれど「いきひと生人」にとって体の不調は命に関わる兆しだ。それを感じるくるりの一つの可能性としてそれもあるという話をしただけだ。」

「露歩き」がおもむろに立ち上がる。

ゆつくりとくるりに近づきその目の前に腰を下ろすと、くるりの額を温かなその手の平で優しく撫でた。

「何がどのように影響するのかわからない。だからもっと自分を大切にしなさい。」

くるりは瞳を閉じ、額に触れる「露歩き」の手の感触に心を澄ませていた。

目に見えていなくてもそこに自分を労わる「露歩き」の姿を感じる。その指先から心を感じる。

とても温かな優しい心。それはとても心地よくて嬉しくて……。世界と自分の境が消えて、世界が自分になっていく感じがして…。

あ…………だから「屍」は…。

そこから先の思考を待たずして狂はまたまどろみの中へ落ちていった。

四

また少し、幾つかの夜が過ぎ幾つかの朝が訪れた。

そしてそれは、あまりにあっけなく突然だった。

いつものように湯の中に指を浸して耐えていると、徐々にその痛みが和らぎ最後にしゅるりと細い紫の煙を湯の中から昇らせるとくるりの指先には蚯蚓腫れの痛みしか残っていなかった。

それと同時に「堯湖^{たかこ}」が眠れないとぼやいていたあの「死人」の足音もぱたりと止み、長閑^{のどか}な風の木の子の囁きだけの世界が訪れた。

「とれたのくるりさん。」

少しすると茶を出しに表に出ていた「閑伽注^{あかつく}」が茶屋の中へと引き返してきた。

板の間に上がり盆を脇に置くところりの方へとにじり寄る。

「死人のひといきなり大人しくなったの。」

だからもしかしてと思って。すこし見せてください。」

そういうと「閑伽注」は茶碗に沈めてあるくるりの指先をちよいとつまむと自分の目の先へと持っていていった。

「うんうんもう何のかけもない安全なゆびです。

この蚯蚓ばれはただの傷だからだいじょうぶ。そのうち治ります。いまきず薬ぬってあげますからちよつと待ってください?」

それだけ言つと「閑伽注」は部屋の隅にある古びた茶筆筒に向かい、持前の鍵でその一つを開けた。

一しきり中を確かめるとそこから小さな丸箱を取り出してくるりの元へと戻ってきた。

「閑伽注」がそつと丸箱の中のをその細い指先にすくい取る。

虹色に淡く色づく不思議なその塗り薬がくるりの指に刷り込まれていった。

これまでと異なるじんわりと温かい感覚がくるりの指先を包んでいた。

「解けたのか?」

表に出るとそこに「さき」が座っていた。

顔だけをくるりの方に向けて短く尋ねる。

「うん…。「閑伽注」がもう大丈夫だつて。」

「さき」の言葉に応えんとくるりは「死人」の縛られている茶屋の脇の大木に目を移した。

虚ろな瞳を無表情の面で覆った「死人」は大木に縛られたままぼんやりと立っている。

その足元は何度も足で擦った為か、そこだけ土の色が湿り気を帯びた黒いものに変わっていた。

その足はすっかり泥で汚れていた。血の流れる事のない「死人」からその傷の深さははつきりと読み取れない。だがおそらく見えないその足の裏はすっかり皮膚が剥がれおちている事だろう。

それを容易に想像させる程にその「死人」の立てる足音は大きく、そしてその削り取られた土の量は深かった。

だがその「死人」は何事もなかったかのように今ではもう微動だにしない。

「近づいても大丈夫かな？」

「さあ。ふりをしてるとは思えないが…。

拘束を解かなければ別にいいと思う。」

「さき」はぼそりと呟くとまた正面を向いてしまった。

おそらく武道の手錬の「さき」がそのような態度を示しそのように答えるのだから大丈夫なのだろう、くるりはそつと「死人」の縛られている大木へと近づいた。

日の陰っているそこは、少しひんやりとした空気に包まれていた。

自然とくるりの気持ちも引き締まる。

「死人」の正面にくるりが立つてもその「死人」は何の表情も示さなかった。

大木に茂る葉の濃淡だけが血の気の無いその顔の上で動きを見せている。本当に人形のようなだった。

でも……。

一目見てくるりはそれに気づき思わず手を伸ばしかけていた。けれどその手はつい先ほどまでその「死人」を突き動かしていた衝

動を宿していた事を思い出しゆつくりと腕を下ろしていた。

「死人」の両の目から顎にかけてくつきりと砂埃で道筋が出来ていた。

「なわをとりたい？」

くるりは囲炉裏の火の具合を見ていた「閼伽注」に尋ねていた。

「んゝまるえいさんにかくにんしてからにしましょ？」

とりあえず中で待つてて。」

「閼伽注」の言にくるりは頷き大人しく茶屋の中で座って待つていた。

しばらくすると「丸嬰」が何処からかふらりと戻ってきた。

その手にはこれまたどこかでくすねてきたのか、純白の高価そうな着物を担いでいる。

「それ、「丸嬰」が着るの？」

「まさかあ。純白なんてあたしの柄じゃないしねえ。」

丈だつて全然違うだろ？」

確かにそれは「丸嬰」の背格好には不釣り合いな大きさだった。どちらかというとそれは……。

「あたしの……？」

「へえ……くるりでいいのかい？」

「丸嬰」が意地悪く瞳をぎらつかせてくるりを見る。こういう瞳をする時の「丸嬰」は何か悪い事をたくらんでいる事が多かった。

すでに家の中に戻っていたさががちらりと「丸嬰」に刺すような視線を向けた。

「うつん、いらない。」

「そう、よかった。もう一着持ってくるようかと思ったよ。
ところでくるり、指はいいのかい？」

「えっと……。」

くるりは自分の呪いが解けた事、そして「死人」の縄を解きたい事を「丸嬰」に告げた。

「あゝ、いんじゃない？」

「丸嬰」はくるりの指先を見ると、外の「死人」をちらとも見ずに
さらりとそれだけ答えた。

その答えを聞くとくるりはまたすぐさま表の「死人」の所へと向つ
ていた。

外はすでに夕焼けに染まっていた。

茶屋の脇の大木には変わらず「死人」が縛られたまま立っている。

くるりは大木の後ろに回ると早速その縄を解こうとした。

しかしその縄は複雑にきつく縛られていた為中々解く事が出来な
かった。

手元の明かりも次第に心もとなく弱弱しくなっていく。

夜の藍が夕焼けの朱に勝り始めてきた頃、「露歩き」と「堯湖」が
「厭山」から薪を手や背に背負い戻ってきた。

「死人」の縄を解こうとするくるり。

呪いが解けた事を知らない二人は薪を投げ出し駆けつけた。

「なっ……何してるんですかッ！」

「くるりッ！」

駆けつけた「露歩き」がその腕を掴む。

あまりの強さにくるりは息を詰めた。

「露歩き」がその指先をじっと見つめる。

すうつと息を吐くとゆっくりとくるりを掴む手の力を緩めて言った。

「呪いが解けたのか。」

「うん。それで「丸嬰」にこの縄取っていいって言われたから。」

二人のやり取りを「露歩き」の後ろで聞いていた「堯湖」の表情がふつと穏やかになった。

「な……なんだあ。びつくりしたじゃないですかあ……。」

僕はてつきり……。」

それだけ言つと「堯湖」はやれやれと何やら照れ笑いをして必死だった自分をこまかそうとした。

「露歩き」の手がくるりの腕から離れる。

くるりの腕の握られた部分が赤くなっていた。

「すまない…力が入った。」

「ううん、「露歩き」はあたしを心配してくれただけだから。」

くるりがそつとその赤くなつた部分を手の平で包みこむ。

その赤さと痛みがくるりには自分に対する「露歩き」の愛情の深さのように感じられた。

「堯湖」が「死人」の傍に寄る。「死人」の縄は「堯湖」によつて斬り解かれた。

ばらりと輪を描いて「死人」の足もとに縄が落ちる。

それでもその「死人」はその場になんとも立ちすくんでいた。全く動く気配を見せない。

誰もそこを動かない。

始めに動いたのはくるりだった。

くるりはなんの躊躇も無くその「死人」の手をしっかりと掴み取った。

そのくるりの行動に「露歩き」と「堯湖」は一瞬緊迫した空気を放ったが、「死人」が何の反応も示さないのを確認するとくるりの行動を黙って見守っていた。

くるりはその「死人」をいつもの茶屋の縁台の前まで歩かせた。

「死人」は全く抵抗しなかった。

くるりがその手を引いて歩き出すと大人しくその後について己の足を動かしていた。

いつも座っていた縁台の前まで来ると、そこがここでの自分の場所だという事を思い出したのか、くるりが促さなくてもそのままゆっくりと腰を落としていた。

「これでいつものとおりですね。」

くるりが振り向くとそこにはまた音もなく「関伽注」が立っていた。その手の盆の上にはもうその「死人」の専用のようになっていた。湯呑が載っている。

するりとくるりの脇を通り過ぎると「関伽注」は「死人」の胸の前に盆を突き出した。

「まだ頑張ります?」

「死人」は何も答えない。けれどしばらくすると、その火傷で爛れて茶色くなった両の手の平を、ゆっくりと盆の湯呑に伸ばしそれを受け取ると自分の手元に引き寄せていた。じゅつと鈍く肉の焦げる音がする。

「死人」は何の表情も示さない。ただまっすぐ顔を前に向けていた。

心無い瞳をただひたすらに正すその姿

くるりはとても苦しいものを感じた。

第二章 第四節

第四節

—

随分と久しぶりに「屍^{かばね}」に会う。

最後に会ったのはあの呪いを受けた時。
少し残念な別れ方をしたような気がする。

一人うずくまる「屍」の姿…。

大丈夫かな…「屍」。

「……………あれ？」

「ゆめ」と共に茶屋を出たくるりは思わず声を上げていた。
その声に「ゆめ」が振り返る。

「……………どうしたの？くるり。」

「ゆめ」は相変わらずやつれていた。

そういえばあまり話したり笑ったりしなくなったような気がする……。
でも、それよりも……。

「……「ゆめ」、少し背が高くなった？」

物心付いてからこの方、常に同じ目線で話していたはずの「ゆめ」の顔がやや上にある事にくるりは気づいた。

その言葉に「ゆめ」の顔がさつと恐怖にゆがむ。

「……ッ……そんな事ないッ！」

とても必死な形相と悲痛な響きを帯びた「ゆめ」の声にくるりはびっくりとした。

すでに表の縁台に座っていた「さき」も思わずゆっくりと振り返る。

「「ゆめ」……。」

「さき」の静かな声に「ゆめ」は我に返ると、唇をかみしめてそのまま何も言わず自分の行くべき道を駆けていった。

「……「ゆめ」、どうしたんだろう。」

「……。」

「さき」は何も答えない。

くるりは「ゆめ」の後ろ姿を眺めていたが、しばらくすると自分も「無き原」への道をとぼとぼと歩き始めていた。

茶屋の中から「露歩き」^{つゆある}が顔を出す。

ゆっくりと「さき」の座る縁台の傍らに立つと、遠く小さく見える「ゆめ」とまださほど小さく見えないくるりの後ろ姿に目を移した。

「……離れていく。」
「……そうだな。」

「さき」の言葉がただその姿形だけのものでない事を「露歩き」は
もちろん理解していた。

「……もう、長くはない。」

「さき」の呟きを「露歩き」はただ黙って聞いていた。

か細く冷たい風の他に動く者のない世界。
ただ朽ち落ちる事しか果てのない虚の世界。
完全な死を待つ為だけにしか存在しない絶望的な死の世界。

茶屋での暮らしが長かった為か、くるりはこれまで以上にその寂し
い世界を肌で感じた。

こんな所でずっと一人なんて……。

楼の中の階段を昇る。

一段上ることにかすかな香の香りがくるりを包み込んでいく。

そう、世界に溶け込む不思議な香り……。

部屋の中央の書机と座椅子。その傍らに積み上げられた巻物や半紙の束。

幾つも掲げられた香台。そこからくゆる香の色と香り。

そして……舞台の中央の影法師。

「「屍」……。」

くるりがそつと呟くと影法師がゆつくりと振り返った。

その動きに合わせて背中であぐらで揺れていた黒髪がさらりと空を舞う。

象牙を思わせる滑らかで涼しげな面ざしの中の、ややつり上がった黒い瞳がくるりを捕える。

「……くるり？」

その瞳にわずかな光が宿る。人形のようなだった顔が表情を浮かべる。早足でくるりの所に近づいてきた。

「……ひさしぶりだな。もう、来ないかと思った。」

「……ん、ごめん。」

指の呪いが解けなくて……それで「死人」に襲われたから。」

「もう……大丈夫なのか？」

「屍」が心配そうな表情を浮かべてくるりに尋ねる。

その手が一瞬くるりの方に伸び掛けたが途中でその動きを止めていた。

「屍」の表情が一瞬強張る。

くるりは自分からその指先を「屍」に見える様に掲げていた。

「ほら…もう大丈夫。」

それは呪いが解けて赤黒く蚯蚓腫れした無残な指先だった。

「どこがだッ！」

「屍」が一喝するようにくるりに怒鳴りつける。
くるりは思わずその声に肩をびくりと震わせた。

「あ……その…ごめん。いきなり怒鳴りつけて…。」
「うっん…。大丈夫。」

「屍」が気まずそうにくるりから一瞬視線をそらし、また窺うよう
にくるりを見つめた。

その仕草は少し幼く見えて何となく微笑ましかった。

「これはただの傷だから。」

こんなけどあまり痛くないんだよ。

だから、もう大丈夫。」

「そう…か。」

「屍」がほっとしたようにくるりを見つめた。

「まあ……こっちに来て座れ。」

「……うん。」

くるりは「屍」の後に続く。その後ろ姿を見ていると何だかとても
温かな気持ちになった。

ひさしぶりにその顔を見たという事もあるかもしれない。
けれど……。

「屍」……何だか色んな顔をするようになった…。

くるりはその事に気付くともっと幸せな気分になっている自分に気づいた。

二

「……そうか。その傷が「死人」を…。」

くるりは早速「屍」に「死人」の話をした。
「屍」は何か考え込むように俯いている。

「あたし、びつくりした。

「死人」が泣くなんて…初めて見たから。」

普通冥獄まで堕ちてきた「死人」に感情はほとんど残っていない。
それが明らかな感情表現である涙をその跡がくつきり残る程流した
事にくるりは少なからず衝撃を受けていた。

感情の残ってる「さき」でさへ泣かないのに…。

そこではたとくるりは一度思考を止めた。

うつん…「さき」はきつと人前で泣かない。

だからそれはあたしにはわからない…。

それに、もしかしたら普通の「死人」にも……。

くるりはすつと顔を上げて「屍」を見つめる。

「「屍」……「屍」はここで「死人」の気持ちを消してあげてるの？」

「屍」がその黒目がちの瞳の中にくるりを映す。

血の気のない白磁を思わせる品の良い唇が言葉を紡ぐ。

「…少し違う。」

俺はここで特定のある感情を持つ死人の存在をその感情もろともに葬っている。」

「それは……」

くるりの頭の中に最初に見た恋文がよぎる。

「愛情……」

「そうだ……」

「ここでは愛……中でも恋しいと想う心を葬っている。」

「……恋しい。」

「…そうだな…そろそろ頃合いだ。」

「丁度いい。見せてやる。」

「屍」はそう言うとその斜め後ろに積み上げられた紙の束をひつか

きまわし、一枚の紙を取り出した。

それをくるりによく見える様二人の間にふわりと広げる。

「これがくるりに呪いの傷を負わせた「死人」の恋文だ……。」

「……恋文……？」

くるりの目の前に広げられた紙には何も書かれていなかった。
全くの白。くるりは首を傾げながら「屍」の顔を窺った。

「……何も書かれてないよ。」

「そう……だがこの前までは書かれていた。
気持がこの中に解け込んだんだ。」

「解け込む？」

くるりがまた一つ首を傾げると「屍」がふわりと別の紙をくるりの
目の前に並べた。

「これが何も書かれていない紙だ。」

「……あ。」

並べられてみると、その違いがくるりにも目に見えてわかった。
何も書かれていない紙がややざらつき完全な白でないのに対し、「
屍」が書かれているといった紙は絹のように滑らかで純白を淡く光
らせていた。

「持ってみろ。」

「屍」に促されるままにくるりはその書かれているという紙をそっ
と持ち上げてみる。

これ……。

「わかるか？」

「屍」の質問にくるりはしつかりと頷いていた。

その紙は赤子のようにずっしりと重かった。そしてしんと温かった。

それは何かしらくるりの心の中に忍び入り、切実に何かを訴えていた。

痛いとは違う、でも何かとても苦しくて……。

くるりは耐えきれずそつとその紙を床に下ろすとふうつと息を付いていた。

「恋しさの葬送はこの地のものになって初めて行う事が出来る。

紙に移された恋しさは、まだこの地のものではない。

だからこの楼の中の香をたきしめて次第に紙になじませ文字を失わせる。

そこで初めてこの地の空気に解けこみこの地のものとなるんだ。」

そこまで言つと「屍」はその紙を普通の紙のようにひらりと片手に握った。

あまりに簡単に掴む事の出来る「屍」にくるりは目を丸くした。

「今からこの紙を葬送する。

だがその前に……。」

「屍」はくるりの腰元を指さした。それは茶屋の瓶だった。

くるりはすぐに納得しそれを「屍」に差し出していた。

二人の指は触れる事なく「屍」の手へと瓶は渡り、無言でそれを「屍」が懷に忍ばせる。

「それじゃあついでこい。」

「屍」が立ち上がりせり出した舞台へと向かって歩き出す。
くるりも立ち上がりその後を追った。

三

黒く塗られた数珠簾がかすかに音を立て、その隙間から寂しい風が流れ込む。

決して肌を斬る様な冷たい風ではない。

けれどその風は確実に心を斬る様な寂しさを帯びていた。

「屍」は舞台のせり出しの縁に立つと、目の前を覆う数珠簾をその細く伸びやかな指先で掻きわけた。

黒い数珠簾の隙間から真っ白な骨の針山が広がる。
その黒と白のあまりの対比にくるりは目を細めた。

「少し押さえててくれるか？」

「屍」が両手で押し広げた簾の一方をくるりに促す。

くるりは大人しくその一方が閉じてしまわないよう押さえていた。

「屍」は一方の手で簾を押し広げたまま器用に「死人」の恋文を両

手で掴む。

「これをそのまま落とすと風に吹かれて葬送出来ない事があったかな。

それ以来下の奈落が掴みやすいよう紐のように細く千切って葬送する事にしていくんだ。」

そういつと「屍」はぴりぴりと少しずつその恋文を千切っていった。骨の光を反射する「屍」の指先、そしてそこからすると伸びる淡く輝く「死人」の恋文。

この旅でくるりの頭をよぎり、そして実際見たあの光景そのものの姿がそこにあった。

「ここで大事なのが文のつながりが壊れないように千切る事だ。

以前文字を傷つけたらいきなり血が溢れ出してぐちゃぐちゃになったからな。

ああなると手が汚れて困る。」

「文字を傷つけないって……。」

くるりは「屍」の指先からすると生み出されていく真っ白な細かい紙をじっと見つめる。

「……どうやって？」

「……勘だ。」

「……勘……。」

くるりは「屍」が文字を傷つけませんようにと祈りながらその様子を眺めていた。

白い蛇のように「死人」の恋文はうねうねと漆黒の闇の中へと落ちていく。

すると赤黒い煙がその下からゆらゆらと立ち上りその恋文に巻きついた。

と同時に「屍」がその手の中に残る恋文から手を離す。

一瞬のうちに恋文は奈落の底へと引き込まれていった。遅れてむっとするような突風が吹きあがる。

「終わりだ…。」

「屍」の指先が数珠簾から離れる。

わずかに弾かれた数珠玉がからからと回った。

「屍」が目じりをその指先でさすりながら楼の中へと引き返していく。

くるりはまだその手を数珠簾から離す事無くすでに冷たい闇へと戻った谷底を見つめていた。

「くるり……楼に戻れ。」

「うん……。」

「屍」に呼ばれてくるりは楼の中へ引き返す。

「屍」が座椅子にどっと座り込む。

ひどく疲れたようにまだ目頭を押さえて俯いていた。くるりがその「屍」の脇にそつと膝を折る。

「……「屍」大丈夫？」

「……ん、」

「屍」がゆつくりとした動作で己の衣の内を探り壘を掴み取るとくるりに手渡す。

その手はそのまま力無く床の上に落ちた。

意識が朦朧としているのか、「屍」から満足な返事が返ってこない。ただ座っているのも辛そうに見える。

この前「死人」を文字にした時とよく似てる。

「寝ていいよ…。」

くるりがそう言うと、「屍」は眼尻を押さえている指の隙間からわずかにくるりを見やりそのまま書机に崩れ落ちるように突っ伏した。「屍」は完全に沈黙した。

しばらくするとその背中の起伏のみ穏やかな眠りの波を刻み始めた。

腕にわずかに隠された横顔を細く長い黒髪が行く筋も垂れかかる。漆黒の瞳は瞼の下に眠り縁取る睫毛がその背の波に合わせて囁くように揺れ動く。

くるりは「屍」の脇でじつとその寝顔を眺めていた。

しばらくそうしていた。

時間の間隔が全くなかった。

けれどきつとそうしていた時間は実際の時間より短く感じていたに違いない。

くるりが気付くと鈴が時を告げていた。

「屍」は全く起きる気配を見せない。

起こすのもどうかとくるりは思った。

「また……来るね。」

くるりはそつと「屍」に声を掛けると楼を後にしていた。

四

くるりが茶屋に戻るとそこには普段の長閑な光景とは何か違うものが感じられた。

あれ……？

くるりがまず気づいたのは「さき」の挙動だった。

いつも縁台に腰掛けているはずの「さき」が立っている。

しかも片手に柄杓、片手に手桶を携えてばしゃばしゃと中の水をまいている。

「さき」が茶屋の仕事を手伝ってる…。

それはちよつと意外な事だった。

「さき」はあまり茶屋の手伝いをしない。

余程茶屋を訪れる旅人が多くて、「あかつく閑伽注」一人で手が回らなくなつた時などにしぶしぶ茶出しを手伝う位。

その「さき」がこんな日暮れ時の旅人が来ない時間に手伝いをしてるのはとても珍しい事だった。

くるりがぼんやりとそんな事を考えている内に茶屋はみるみる近づ

き大きくなる。

くるりの感じた異様さはその光景だけでない事をくるりは感じた。

……………臭い。

近づくにつれてその異臭はきつくなりくるりの鼻孔にこびりつく。
生肉が饅えたような不快な異臭だった。

茶屋に似つかわしくないあまりの異臭に次第にくるりは顔をしかめ
鼻先を手で覆う。

くるりはその異様な光景に目を見開いた。

「さき」が水をまいている。

これは先程気づいた違和感だ。

しかしまいている所も普通ではなかった。

「さき」は店先ではなく縁台にバシャバシャと水をまいていた。
しかも縁台に掛けられた^{えんじ}臙脂色の掛け布の上からバシャバシャと水
をまいていた。

「さき」！何してるの？

そんな事したら座れないよ……それにそこは

「

くるりは無意識につながようとした台詞に気づき、そこから先の意
味を一瞬の内に予感していた。

「さき」がゆつくりとくるりの方を振り返る。

眉根を陰しく寄せた「さき」の顔はいつも以上に厳しく冴え冴えと
して見えた。

鬼火を鈍く宿した瞳がくるりを貫く。

その瞳の色でくるりは「さき」が何を言わんとしているのかわかっ
ていた。

わかっていたけれど、それを言葉で聞きたかった。

「……あの「死人」、どうしたの？」
「……さつき、いった……。」

「いった」？それは……。

。両の手を火傷で爛れさせる程に茶屋の水が受け付けなかった「死人」

「行つた」のか？「逝つた」のか？それは聞くまでもなかった。
けれど……。

くるりは「さき」を見つめる。
あまりにわかりきつた事を尋ねられる、いつもならそれは「さき」
を不快にさせる事だつた。

「わかりきつた事を尋ねるな。」と突つぱねられる事だつた。
けれどその時の「さき」はきちんと言葉にしてくれた。

「あの「死人」は魂まで死んだよ。
受け付けないのにいきなり茶屋の湯をあおつて。
みるみる口から腰の付け根まで爛れ裂けて死んだんだ。
ちようど竹を割つたみたいにな……。」

「さき」はとてもそんな無残な惨状を目の当たりにしたとは思えない程
淡々とした口ぶりですのあらましを説明した。
それが終わるとまた縁台に水をまき始める。

まかれた所がじゅつと小さく音を立てて小さな黒煙を燻ぶらせた。

「……「露歩き」と「堯湖^{たかこ}」と「丸嬰^{まるえい}」は死体を捨てに行っている。
「閼伽注」は中で必死になつて茶釜を沸かしている。」

ここにまく湯を作る為にな……。」

淡々と水をまく「さき」の後ろ姿をくるりは見つめる。

受け付けないのにいきなり茶屋の湯をあおって……。

くるりは「さき」の言葉を頭の中で繰り返していた。

受け付けないのに……。

「たぶん……どうしても逢いたかったんだと思う。」

くるりの呟きに「さき」がその手を止める。

振り向きはしなかった。

くるりが言葉を繋げる。

「今日……あたしの指に嫉炎を残した「死人」を弔ったんだ。だからたぶん最後に逢いたかったんだと思う。」

「……………そう。」

それだけ言つと「さき」はまた何事もなかったように水をまき始めた。

第二章 第五節（前書き）

はい…明らかに展開早いです……。
すみません。

第二章 第五節

第五節

—

「ふうん……。」

それが「屍^{かばね}」の感想だった。

その後の言葉をくるりは待ったが「屍」はそれ以上何か言葉を発し
そうにない。

よく分からないといった不可解な表情。
何となくくるりは良い気持がしなかった。

「それだけ？」

思わず訊いていた。

「それだけ？」

「屍」が不思議そうに尋ねる。

「あたしは、すごく心が苦しかった…。」

茶屋の「死人」の爛^{ただ}れた手を見るのも、泥で汚れた足と埃で出来
た涙の跡を見るのも、

とても苦しかった。」

くるりは自分の胸元に両の手を当てる。

「とても……苦しかった。」

「屍」がその手を見つめる。
見つめながら言葉を発した。

「俺は…何も感じなかった。」

くるりが「屍」の方へ顔を向ける。

「「死人」が誰かを想って死ぬのは俺にとっていつもの事だから…。
俺にとって「死人」の葬送はここでの義務で、その気持ちはただ
の紙切れに過ぎないからな…。」

くるりは「屍」の後ろに散らばる紙の山に目を移した。

それは全て「屍」の手によるものにもかかわらず全て筆跡の違う文
字が紙の上で踊っていた。

くるりの心を打った言葉の羅列、人の想い…。

それが紙屑のように乱雑に積み重ねられている。

恋しさを葬送出来ず吹き飛ばした事があると言った「屍」。
勘で文字を破りその事で手が汚れたと愚痴をこぼした「屍」。

何だか苦しくなった。

「人を想って死ぬ？そんな事に何の意味がある？何故自分の為に生
きない？

そんなの弱いからだ。馬鹿馬鹿しい。」

そうつと「屍」はおもむろに恋文の山をその白い指先で乱暴に崩
した。

ばさりと音を立てて床の上をすべる。

その様を見た「屍」の横顔には冷ややかな笑みが浮かんでいた。
初めて見た、「屍」の笑顔…。

……胸が……痛い。

悲しいとは違う。悲しい時は寒くなるから。

この気持ちは、熱い。温かいとは違う。

もっと激しいもので……。

あたし……少し怒ってる……。

「「屍」……。」

「何だ？」

「屍」がまだその顔に冷ややかな笑みを薄く浮かべたままくるりの方に目を移す。

くるりは全く笑っていない。じつと責めるような視線で「屍」を捉えていた。

そのいつになく冷ややかな表情を示すくるりに「屍」がわずかに驚いた。

「どうした？くるり。」

「そんな怖い顔し」

「「屍」は間違ってる。」

くるりの強い口調の言葉に遮られ「屍」は次の言葉を失った。
くるりは続ける。

例えその後の行動に「屍」が怒ったとしても、それで「屍」に嫌われたとしてもそれはわからないと駄目だと感じたから…。

そう…「屍」はもうわかる…。

くるりはゆつくりと両の手を「屍」に向かって差し伸べる。
その動きに「屍」は驚きわずかに身を引いた。
それでもくるりの動きは止まらない。

「くるり…やめろ…。」

「やめない…。やめろって言われてもやめない。

人を想う事が弱いとか馬鹿だとかいう「屍」の言う事なんか聞かない。」

「なッ……。」

「屍」はくるりが本気で自分で触れようとしているのを察すると急いで後ろに飛び退こうとした。

その動きを予測したくるりの両手が「屍」の首に巻きつく。

ちょうど抱きつくような形になってくるりは「屍」に触れた。

「…止めるッ！触るなッ！離れるッ！」

「止めないッ！触るッ！離れないッ！」

「屍」が必死でくるりを引きはがそうとする。

けれどくるりはそれよりなお必死に「屍」にしがみついた。

そして「屍」のその耳に、その心に、自分の言葉が届く事を祈って声を張り上げた。

「「屍」は人に触るのが嫌いなんじゃないッ！」

「……ッ！何言ってるんだッ！嫌だって言ってるだろッ？」

「屍」がくるりを引きはがし床に投げつける。

すぐさまくるりは起き上がり「屍」をきつと見つめた。

「じゃあ何で嫌なのか言って！」

そついうやまた「屍」に飛びついた。

「何でなのか…言って！」

くるりは必死でしがみつく。

「屍」も必死に引き離そうとするが中々引き離せない。

「そんなのっ……よくわからねえよッ！」

だけど…嫌なんだよッ！俺の魂が嫌だって言ってたんだよッ！

俺をだますッ！俺を笑うッ！俺を殺すッ！って……俺の魂が言つてんだよッ！」

そついうと「屍」はくるりをまた引きはがし今度は思い切り床に叩きつけた。

受け身の取れなかったくるりはわずかにうめいて床の上で蠢く。

そのままの体勢で「屍」を見つめる。

「屍」は青ざめた唇をわずかに震わせ、肩で荒く息をしていた。

刹那その双眸から大粒の涙がこぼれ落ちる。

「屍」はそれがわからないといった表情で何度も拭う。

何度も何度も…それでもその瞳からこぼれる涙は止まらなかった。

「屍」にはわかってないんだ。「屍」の魂の持つ人への怨みの記憶が…。

だけどそれに縛られてるんだ。…わかってないのに…。

くるりはゆっくりと這いながら「屍」に近づく。

「屍」はゆっくりと後ずさった。

「あたしは「屍」を騙さない。あたしは「屍」を笑わない。あたしは「屍」を殺さない。

あたしはそついうことしない。

「屍」もそれはわかつてるはずだよ……あたしをそんな風に思ってたんだとしたら「屍」はあたしに無意識でも絶対触れたりなんかしなかった…。」

くるりはわずかに起き上がり四つん這いになって「屍」に近づく。

「屍」は小さく首を横に振りながら後ろへ下がる。その体が楼の背にぶつかった。

「「屍」はもうそういう事であたしに触れるのが怖いんじゃない。

「屍」が怖いのは」

「ここで全くの一人だと知る事……人の温もりが離れた後の寂しさだよ……。」

骨の雪山に一人。それをここで知ってしまう事はあまりに辛すぎる……

きつと凍え死ぬ程に…。

くるりは「屍」にまた飛びついた。「屍」がその腕の中で必死にもがく。

くるりは「屍」の耳に囁くように告げていた。

「だからあたしが「屍」の「縁」になる。」

「屍」の抵抗がぴたりと止まる。

くるりの腕の中で「屍」はおそるおそるくるりの顔を窺った。

その顔には二つの色があった。

一つはくるりに対する拒絶と戸惑い、それが顔全体を覆いつくすよ

うに張り付いていた。けれど今一つは切望、その漆黒の瞳だけは強くそれを宿していた。
瞬きしたら、瞳を逸らしたらそれが嘘になるのではないかと恐れるかのようにわずかに揺れ惑う瞳をしっかりとくるりの瞳に映して……。
心の奥に必死で手を伸ばすかのように……。

あたしもだよ……「屍」。

くるりはそつと「屍」の首に回していたその手で「屍」の頭を抱きそのまま自分の胸元へと引き寄せた。

「屍」は何も言わずなすがままにくるりの胸の上に頭を預ける。

「あたしの胸は「露歩き」や「ゆめ」のように安心する音がしないけど……。

それでも……。」

くるりはそつと片方の手を「屍」の背に流しゆつくりとその背を撫でた。

次第に「屍」の肩の硬い感じがほぐれていくのをくるりは腕の中で感じた。

「見えないけど、わからないけど、あたしの心はたぶんここにある……。

だから「屍」にもそれを聞いてほしい……。あたしの心に触れてほしい。」

「あたしは「屍」が好き。」

「屍」がわずかに嗚咽をもらす。
そしてその両の腕がくるりの背を掴みくるりの胸に強く頭を押し付けていた。
くるりはそれ以上何も言わず何度も何度もその背を撫で続けた。
何度も何度も……。

「屍」はくるりの腕の中で眠りに落ち、「屍」を抱きしめるくるりもいつの間にも「屍」の頭を枕にして眠りに落ちてしまっていた。

二

百年と少しの歳月が過ぎた。

真っ白な大地の中に突如魔物のように現れる巨大な岩山。

その中に埋め込まれるように造られた朽ちた楼閣。

白と黒、決して交わる事のない対の世界が完全な虚無によって一つとなる死の境地。

希望も命も時すらも拒むその寒々しい世界の中で、くるりと「屍」は楼の中で温かい空気を感じていた。

あの日を境に二人の関係が大きく変わったという事はなかった。
くるりが訪れ、「屍」が迎え、語らい、そしてくるりが去り、「屍」が見送る。

それ以上のものはない。二人の逢瀬は静かに打ち寄せる波の如く穏やかで優しいものだった。

けれどあの日を境に確かに変わったものはあった。

ぎこちなさが無くなった。互いに抱いていた恐れが消えた。目に見えないけれどそれは二人とも肌で感じていた。

絶望的な世界は変わらない。変わらない世界だからこそ自分達の中の変化が手に取るようにわかった。

互いの心が繋がり、互いの温かい気持ちが自分達を温かくしている事、それがはつきりと感じ取れていた。

「「屍」は初めの頃と随分変わったね。」

「うん…そうだな…。俺もそう思う。」

「屍」の隣で落書きをしていたくるりがぼつりと呟く。

二人の後ろにある書机の上はきちんと整頓され、その横に積み上げられた半紙や巻物も整然としていた。

はつきり名のつく強い感情を「屍」はまだ理解出来ていなかったが、人の心の在処を知った「屍」は恋文をおろそかにするような事はなくなった。

恋情の書き取りやその葬送の折にも死人の想いに心が共鳴し涙を流すようにもなっていた。

「よく……わからないんだ……けど………苦しい。」

そう言つて嗚咽し眠りに落ちる「屍」をくるりは優しく抱きしめた。

「屍」はくるりの腕の中で穏やかな顔をして眠る。

くるりはその寝顔を眺めているのがとても幸せだった。

「くるりは変わらないな。」

「……うん。」

「初めにあった時のままだ。心が透つていて心地良い。」

「屍」が自然な動作でくるりに頬に手を当てる。
くるりがその手の上に自分の手を重ねて「屍」を見つめた。
「安心する……。」

そう言った「屍」の瞳も始めの頃のような険は無く、その瞳の奥がそのまま心に繋がっているかのようなまっすぐな眼差しでくるりを見つめていた。

「あたしは変わらないよ。「在人」だから。」
「そうだったな。」

「屍」がわずかに微笑みを浮かべる。
「屍」の触れるその手は相変わらず冷たかった。けれどその笑顔はとても温かいものだった。

嬉しい……。

くるりも「屍」に向かって微笑みを返していた。
優しい気持ちに優しい気持ちを返す。
内から溢れる温かさと外から注がれる温かさ。
想い想われる、それがどんなに幸せな事か……。

ずっと……こうして……。

くるりの表情がわずかに曇る。
「屍」の手に載せていた手がぱたりと己の膝の上へと落ちる。
心を通わせていた「屍」がそれに気づかない訳がない。
同じようにわずかに顔を雲らぜくるりに尋ねていた。

「どうした？くるり。」

「……うん。」

くるりが瞳を逸らして俯きながら答える。

「屍」はそれを心配そうに見つめる。

「屍」を不安にしている自分が嫌だった。

でも告げたくなかった。けれど告げなければならなかった。

くるりが両の手をぎゅっと握る。

「……逢えなくなるのか？」

「屍」の呟くような、けれど涼やかに心に響くその声にくるりははっと顔を上げていた。

目の前の「屍」の表情はひどく不安げな顔をしていた。

その瞳がくるりの瞳にぶつかると、自分の言葉が真実である事を悟り「屍」は深く沈んだ。

「うん……もうすぐ三百年経つから……」

そしたらぬし様の御殿に戻らなくちゃいけない。」

「そうか……」

くるりの頬に触れていた「屍」の指先がゆっくりと離れそのままくるりの膝の上で固く握られている手を包み込む。その手はわずかに震えていた。

「また……逢えるよな？」

「うん……」

「いつになる？」

「……それはわからない。」

ぬし様が休みに入るのは気紛れだから。

何十年後かもしれないし、何百年後かもしれないし。」「

「何千年後かもしれない。」

「……うん。」

二人の間に冷たいものが流れた。

ちょうど始めの頃のような、とてもぎこちない心が通わない時の空
気。

心が……わずかにずれていくような

嫌だ。

くるりは自分の手に重なる「屍」の手に自分の手を重ねしつかりと
握った。

顔を上げて「屍」の顔を見つめる。

「屍」の瞳は不安とわずかな寂しさで揺らいでいた。
それがとても苦しかった。

「あたしは変わらない！何千年経っても「屍」が好き。
絶対逢いに来る！だから」

言いたかった。その後の台詞を……

けどそれはあまりに身勝手に残酷だった。

だから言えなかった。

くるりが口をわずかに開いたまま固まる。

「屍」は何も言わずにそんなくるりを見つめる。

くるりの言わんとしている事、そしてその残酷さ。そしてその戸惑
い。

静かな夜の闇のような瞳はすでにそれを理解していた。

「……待つてる。」

「屍」がくるりをそつと抱き寄せる。

くるりは「屍」の胸の中に顔をうずめた。

「屍」の胸の内はくるり同様何の音もしなかった。

くるりを包むその腕も人形のように固く冷たい。

けれどその心の温かさをくるりは確かに感じていた。

目に見えない……でもわかる。「縁」のような心の繋がり……。

とても強い繋がり……。

それはあまりに突然だった。

三

自分の体の一部がふうつと抜けていくような喪失感。

あまりにあっけなく、けれどその空しさはあまりに果てしなく。

体の芯を抜かれてばらばらにされたかのような混乱。

心が……割れる……。

「ああああああッ！」

「屍」の腕の中でくるりが絶叫した。

「くるりッ！」

突然の事に「屍」は一瞬狼狽したが、すぐくるりの身を案じた。両の腕を掴みくるりの顔を覗き込む。

「あああああッ！」

くるりは泣いていた。とめどなくぼろぼろと涙がこぼれ落ちる。

目の前にある「屍」の顔を突き抜けて何かに驚愕している。

意味をなさない叫びを上げて体を小刻みに震わせている。

一つの感情がくるりの心も体も完全に支配していた。

「くるりっ！どうした！くるりっ！」

「屍」がその肩をゆさぶりくるりの瞳を覗き込む。

くるりの空を捕える瞳に「屍」の心配する顔が映る。

次第にくるりは「屍」のその顔と自分を呼ぶ声に己を取り戻していた。

「「屍」……。」

くるりが滝のように涙を流しながら弱弱しく「屍」を呼ぶ。

そんなくるりを「屍」はしっかりと抱きしめた。

くるりも同様に「屍」にしっかりとしがみつく。

「落ちつけくるり。落ちつけ。」

「屍」が小さな子供をあやすかのようにくるりに呟く。

くるりはとうとうずっと「屍」の名を弱弱しく呼び続けた。
次第に静かになるくるり。

くるりが「屍」の体をそっと押し離れた。

「くるり……。」

「あたし……帰らなくちゃ。」

ひどく憔悴しきったような顔をしたくるりはゆっくりと立ち上がり
と、よろよろと階段へと向かって歩き出した。

「屍」がぎよっとしてその後を追う。

「……ッ……そんなよろよろで……。」

いきなりどうしたっていうんだ？くるり。」

「帰らなくちゃ……早く……帰らなくちゃ……。」

くるりが熱に浮かされたかのようにそればかり呟く。
よろよろとした足取りは何もない床で挫きばたりと転んだ。

「くるりッ！」

「屍」がその肩に手を掛けてゆっくりと引き起こす。

「……帰らなくちゃ……。」

くるりはそれだけ呟いてまたよろよろと歩き出す。

「屍」はその手を掴みくるりを引きとめた。

「無理だ。そんな調子で……。」

もつと落ちて着いてから帰った方がいい。」

「けど……あたしは……。」

「どうして急ぐ必要があるんだ？」

いきなり泣いて……どうしたっていうんだ？くるり。」

くるりが唇ときゅっとかみしめる。

「屍」は掴んだその手からくるりの体が固くなるのを感じた。

「……………」 「縁」が切れた。」

「え……………」

「どうしてかわからない。」「ゆめ」と「さき」がどうしてるのかわからない。

二人の事が何もわからない。何も伝わらない。不安でたまらない。

「……………」
くるりがふるふると首を振る。

「二人を見ないと安心出来ない。心が割れそうなの。」

だから行かせて「屍」。」

くるりは必死な顔をして「屍」を見つめる。

「屍」はゆっくりと手をくるりから離していた。

「屍」は何も言わずくるりを見つめる。

くるりはよろよろと階段を下りていった。

第三章 第一節

第三章

第一節

—

「はいですねくるりさん。もしかして虫がしらせました？」

茶屋の入口には「あかつく閑伽注」が立っていた。
その隣には「たかこ堯湖」が腕で顔を隠すようにしゃがみこんでいる。
鼻をすすする音がわずかに聞こえる。泣いているようだ。

「どうぞ？中です。」

「うやうや閑伽注」が恭しく扉を引き開ける。
くるりは早足で中へと入った。

茶屋の中は外から差し込む暖気で淡い光に満ちていた。
茶釜がこぼこぼと音を立てその下で揺らめく炎がわずかに爆ぜる。
とても静かで長閑だった。

くるりは下駄を脱いで上がると奥の間へとまっすぐ向かった。
がらりと引き戸を開ける。

そこには「ゆめ」がいた。
そこには「さき」がいた。
奥の間も外の光が柔らかく満ちとても穏やかだった。
とても、とてもそこに

「「ゆめ」が死んだ。」

「さき」がぼそりと告げた。
まなじりがわずかに赤みを帯びている。

「さき」も泣いたんだ…。

くるりがそつと「さき」の隣に膝をつく。
どちらからともなく二人は互いに手を差し伸べお互いを抱きしめていた。

一言も言葉を漏らす事無く長い時間、二人はそのままだった。
布団に横たわる「ゆめ」を目の前に……。

「ゆめ」の死に顔は眠るように穏やかとは言い難かった。
悪夢にうなされるのを、それが通り過ぎるのを堪えるような顔…。
死の恐怖や苦痛に酷く歪むというものではなく、不快感をわずかに示すような顔だった。

くるりと「さき」が体を離す。
お互いの手を強く握り締めたままその「ゆめ」の死に顔に見入っていた。

「どうして…死んだの？」

「自殺。」

「えッ……？」

くるりが「さき」の意外な言葉に驚きその顔を見つめた。

「「丸嬰^{まるえい}」が人目見て言った。自殺だとな…。

とてもそうとは見えないが…。」

「さき」は「ゆめ」の死に顔を見つめたまま話を続ける。

くるりもわずかに「ゆめ」の顔に目を移し、はっと思い出したように「さき」に尋ねた。

「「丸嬰」は？「露歩き」もどこ？」

「「丸嬰」と「露^{つゆ}歩^{ある}き」は「ゆめ」を運んでくれた人を送りに行った。

たぶんあれが「ゆめ」の言ってた「墮^だ烏^{なんえん}苑」の下男だと思う。」

「ゆめ」の言ってた？

くるりが不思議そうな顔をして「さき」を見る。すると「さき」がくるりに寂しげに微笑みを投げかけた。

「……着物と亜装の妙な風体の男だった。何となく艶のある「ゆめ」の好みそうな優男だったよ。」

いやらしくて何だか素敵なお〜。

「あ……。」

くるりは以前「ゆめ」が口にした言葉を思い出した。

「さき」の瞳と目が合う。わずかに含みを秘めた暗黒の瞳。

「あたしも見たかったな。「ゆめ」の好きそうな人。」

くるりは小さく笑った。「さき」も幽かに笑った。

本当は寂しいのに、本当は悲しいのに、本当は笑う所ではないのに……。

頬を赤くして夫人の自慢話をしていたところ変わる「ゆめ」の顔を思い出したら何だか可笑しくて笑わずにはいられなかった。

二

「あゝ、やっぱりすぐ帰ってきたみたいだね、くるり。大丈夫かい？」

「露歩き」と共に帰ってきた「丸嬰」はくるりに気付くとぱたぱたとくるりに近づいてきてなれなれしく肩をぽんぽんと叩いた。何とも軽い飄々とした様は、普段通りのものだった。

わずかに遅れてくるりの前に辿りついた「露歩き」はというと、明るく透き通った蒼眼に常ならぬ影を落とし、珍しくそれとわかる疲れをその体から漂わせていた。

「大丈夫か？くるり。」

それでもまずくるりの身を案じる「露歩き」。

くるりはそっと「露歩き」に近づきその体に顔をうずめた。

無言で「露歩き」はくるりのその頭をなでる。

今だ奥の間で「ゆめ」の傍についている「さき」以外がその光景を静かに見つめていた。

「ううッ。」

その光景に堪え切れず「堯湖」がまた涙をこぼして腕の中に顔をうずめる。

それに気づいた「丸嬰」がやれやれといった様子で「堯湖」に近づきその頭をぽんぽんと叩く。

「全く…いつまで泣いてんのさ。あんた一応男だろ？」

「男だって泣きますよッ！それがいけないっていうんですか？」

「堯湖」はわずかに声を裏返らせながらきつと「丸嬰」も睨んで言った。

頬は拭った涙の塩でべとべとに汚れ、眼の淵と鼻の頭は真っ赤になつてむくんでいる。

責めるような瞳からはぼろぼろと涙をこぼし、ひつくひつくと喉をわずかに揺らしていた。

「いやそうだろうけどさあ…良い若者が…それはちよつと本格的に泣き過ぎだろう？」

せめて後でこつそり泣くとかさあ。」

「泣き過ぎ？故人を悼む事が過ぎる事はないでしょう？」

君こそ何でそんな飄々としてるんですか？悲しくないんですか？」

「全く悲しくないね。」

「なっ……。」

「堯湖」が「丸嬰」の言葉に驚きその顔を見つめる。そして戦慄し

た。

不敵に笑んだその顔は何処か不吉で、その瞳には寧猛な修羅を宿していた。

慈悲や理性の欠片も無い、己の本能にだけ忠実な邪な瞳。

「君は……本当に何なんだ？」

「さあ何だろうね。」

ほらほら皆！とりあえず中に入んな！いつまでも突っ立ってたつて何も意味無いんだし、無いなら無いで座って茶でもしばいてた方が心も体もましってもんだろ。」

一人明るい声を元気に張り上げ皆を促す「丸嬰」にくるりと「露歩き」は大人しく従い中に入った。その後を「閼伽注」が続く。それを「丸嬰」が不思議そうに見つめた。

「ていうか「閼伽注」、あんた何してたのさ。」

茶屋の前でぼうつと突っ立ってたなんてさあ。」

「……気を使ってくださったんですよ。中の「さき」に。」

全くそんな事もわからないんですか？君は……。」

傍でしゃがむ「堯湖」が「丸嬰」に毒づく。

「本当に？らしくないねえ……。」「

「うんそうらしくないでしょ？だからそれは建前でうそですから。」

「嘘……？」

「堯湖」が目を見開いて「閼伽注」を凝視する。

そんな「堯湖」を「閼伽注」はいつもの微笑むような顔で見つめ返した。

「そう嘘ですよ？たかこさんの為のうそ。」

だってあたし全然悲しくないんですから。それに外にいる方が断

然たのしい。

だからあなたにそう言ったの。」

「楽しい……？」

「堯湖」が顔を歪める。

その様を見た「丸嬰」と「閼伽注」はくすくすと笑いだした。

「そうそうさきゆきさんより断然たのしいです。

あなたが小さくうずくまってしゃくりあげてるのなんかを聞いているのはね。」

ひやはははは、とは「丸嬰」。

ひゅひゅひゅひゅ、とは「閼伽注」。

二人はあざけるように笑いながら茶屋の中へと入っていきその引き戸を閉めた。

「堯湖」はしばらく呆然としていたが、拳を握るとだんつと後ろの壁を叩きつけていた。

「化け物共め……。」

唸るように呟くと「堯湖」はまた腕に額を載せてうずくまった。

第三章 第二節

第二節

—

「うんだからね明日にはどこかにもってって?」

「あかつぐ 閼伽注」がにこにここと発言する。

「ここに埋めちゃ駄目?」

と聞いたのはくるり。

その隣で「さき」も「閼伽注」をじつと見つめる。

「はいだめですここは何もおかれないから。

まして不浄なんてもってのほかです。

だからほらあのしびとさんも運びだしてお清めもしっかりしたで
しょう?」

ですからだめなものはだめです。」

「閼伽注」はきっぱりはつきりと言った。

「じゃあ……あの「死人」同様に「厭山」おんざんに埋葬ですか?」

まだ顔に赤みを残すものの泣きやんだ「堯湖」たかこが窺うように尋ねる。

その面には不快と嫌悪が浮かんでいた。

くるりは「厭山」を訪れた事がない。けれど話には聞いていた。

常に鉛色の暗雲と霧がたちこめ、鉤爪かぎづめのように鋭く不吉な枝を広げる黒木こくぼくがばらばらと突き出たごつごつとした岩山。

いくらここに埋められないからといってそんな寂しい所が「ゆめ」の終の地となる事には耐え難いものがあつた。

「その辺は大丈夫だよ。」

「ゆめ」にぴったりの良い所なら、あたしが目星つけてるからさ。

「

暗く沈みかけていた皆に向かつて「丸嬰まるえい」が朗らかに宣言する。

「本当に？」

「ああもちろん。」

とつても静かで落ち着く所だよ。

「露歩つゆあるき」もさつき一緒に見たから間違いない。だろ？」

「何……？」

「露歩き」が「丸嬰」の呼びかけに一瞬怪訝な顔をしたが、すぐにその意味を察したらしく寂しげに頷いた。

「ああ…そうだな。」

「ゆめ」の終の住処はあそこだろう……。」

納得、というよりやや諦めの雰囲気を漂わせる「露歩き」に引つかかるものを感じたが、「ゆめ」の育ての親である「露歩き」の了解にそれ以上追及する者の声はなかった。

沈黙が訪れる。

「んじゃあ明日はあたしと「露歩き」でそこに弔いに行ってくるからさ。」

そついう事で今日は解散！」

「あたしも行きたい！」

私「」

「僕も行きたいです！」

皆が一斉に「丸嬰」に詰め寄る。

「丸嬰」は一瞬身をすくめたが、すぐにため息を一つつきやれやれといった調子で皆に答えた。

「連れて行ってあげたいけどさあ、それは無理なんだよね。」

あんだ達には辿りつけない道だからさ。」

「そんな……君はまあ僕らに行けない所でも行けそうですが……」「露歩き」様が行ける所にどうして僕らも行けないんですか？」

「堯湖」が「丸嬰」を追及する。

確かに「堯湖」の質問は最もだった。

「在人」のくるり、「死人」の「さき」、「生人」の「堯湖」。

その誰もが行けない処へどうして「生人」の「露歩き」だけが行けるのか？

「丸嬰」はちらりと「露歩き」を見る。「露歩き」は何も言わないそれを了承と判断したのか、「丸嬰」が語り出した。

「貪主どんすと「露歩き」の契約だから、あたしから詳しく言えないけどさあ。」

「露歩き」は冥獄の中なら何処にでも行けるんだよね。ここだけじゃなくて「隣」の中でもさ。」

「堯湖」が目を見開いて絶句する。

「さき」はすでに知っていたのか、その表情に変化はない。

くるりにはその凄さがわからず、その表情に変化はなかった。

くるりのいる冥獄は「西の指」などのように方角と体の部位とで地域分けがされている。
くわくどんす

極楽貪主の住まう御殿は正式にいうと「黒ノ赤子の西の指」。

「丸嬰」の言った「隣」とは「白ノ赤子」の事を指す。

同じ赤子の中でも行き来が困難であるのに、全く別世界の赤子の中すら何処へでも行けるといふ事はかなり珍しい、というより無名の人間には到底あり得ない事だった。

「さっ……さすがです！「露歩き」様！すごいです！」

「堯湖」が忠犬の様に瞳を爛爛とさせて「露歩き」を絶賛した。

「ですが」

「堯湖」の顔がふと曇りを帯びる。

「それだけの契約の代償に一体何を？」

「露歩き」は何も言わない。

囲炉裏にくべた薪が大きくはぜる音を一つ鳴らした。

「だあかあらあゝ無神経メガネ！個人の事情を詳しく聞こうとするんじゃないよ！」

とにかく「露歩き」は行けるったら行けるの！

わかった？」

と「丸嬰」が面倒臭そうに「堯湖」を諭す。

そんな「丸嬰」に対して「堯湖」がはあ？無神経はどっちですか？とぎゃあぎゃあわめきそれを皆が明るく笑った。

ただ一人、「さき」を除いて……………。

「さき」はその様子を冷たく見据えていた。

二

朝を迎える。

いつもと変わりのない長閑な朝を。

くるりは「さき」と共に「ゆめ」の両脇に添い寝をして一夜を明かした。

間に横たわる「ゆめ」は本当にただ寝ているだけのようで、昨日迎えた朝と何ら変わりのないように思われた。

くるりはそつと柔らかい光に満たされた温かそうな「ゆめ」の頬に手を乗せた。

夜の陶器のように静かな冷たさ。

見える平和の光景と触れる不幸の事実のあまりの落差に、くるりは恐怖を覚えさつと手を引つ込めた。

その向こうに横たわる「さき」と瞳が合う。

同様に夜気の静寂を身からしんと立ち上らせる死人の「さき」に……。

「どうして…「さき」みたいにならなかったんだろ？」
くるりがぼそりと呟いた。

「さき」は何も言わない。くるりに先を促すように静かにじっと見

つめている。

「「さき」と同じ「死人」になっただよね？」

ならどうして「さき」みたいに動かないんだろう？」

「同じじゃないからだろう……。」

くるりが不安げに「さき」を見つめる。

「私と「ゆめ」は違う。」

目の前にある「ゆめ」は脱け殻だ。動く為の魂が無い。

私は脱け殻を置いてきた魂だ。ぬし様と「縁」によって形を保てるだけの殻を纏わされただけのな。」

ぬし様と「縁」……。

「縁」は切れた。「さき」を繋いでいるはずのものが一つ切れた。

じゃあ「さき」は？「さき」は「さき」は

「……「ゆめ」の魂、何処に逝ったのかな？」

「さあ……。」

くるりは自分の中にふつつと溢れ出した不安を無理矢理抑え込むように「さき」に質問を投げかけていた。

決して答えが返ってこない事がわかっている、あての無い質問を……。

「あたしからののはなむけさ！」

そう言つて「丸嬰」がひらりと敷き布のように広げたそれはいつだかに見た純白の着物だった。

触れるとわずかな起伏を感じる。純白の生地の上には同様に純白な刺繍系でとても繊細で綺麗な草花とそれを愛でて舞う蝶や小鳥が描

かれていた。

日の光を受けた衣はその文様を黄金色こがねいろに神々しく輝かせている。

「綺麗だね。」

「「ゆめ」が喜びそうだな…。」

くると「さき」のささやくような感想の合間をぬってずっと鼻をすする音が響いた。

「堯湖」である。

またすでに泣いていた。

それを見た「丸嬰」がまたわずらわしそうな一瞥をくれる。

昨日にもましてかなり不愉快そうである。

一方「闕伽注」はというとにこにこと問答無用でその様をなめまわすように眺めている。

と、「堯湖」がうるさいとばかりに顔の前で手を振ってその視線から逃れようと奮闘していた。

一見いつもの光景のように見えるそのやりとり。でもくるりには少しそれが不思議に見えた。

「「さき」…。」

「何だ？」

「「丸嬰」って男の子が泣くの嫌いなのかな？」

他の者に聞こえないようそつと囁いたくるりの素朴な、けれど恐ろしく鋭い指摘に「さき」は大きく目を見開いた。

口元から細く息が漏れる。

「「さき」？」

「…成る程、そうか。うん、中々面白い事を言う。」

「？」

「ほら！奥でさっさと着付けてきな。」

ほくそ笑む「さき」にくるりが首をかしげていると、二人のやり取

りが聞こえてか「丸嬰」がさつさと追い立てた。
いや、そのいらいらした様子を見るとおそらく二人のやりとりを悟
つての事だろう。

凶星なのかもしれない。

「私も行こう。死んだ人間を動かすのは力を使う。」

「露歩き」が腰を上げる。

着物を抱えるくると「さき」の後ろに付き従う「露歩き」、その
後ろ姿を残された者は皆黙って見送った。

三

これは、誰？

くるりの抱いた疑問は自分でも可笑しいと思うものだった。

物心付く前から死を迎えるその日まで共に暮らした者から発せられ
るにはあまりにおかしな疑問。

いや、だからこそその疑問といえるかもしれない。

共に過ごし「縁」で結ばれていた者だからこそ決定的に気付く違和
感。

奥の間に入るとまず「露歩き」がその背を支えながら徐々に「ゆめ」
の着物を解いていった。

今や完全に外の光を満たした部屋の中で「ゆめ」の肌が露わになる。
「ゆめ」の体は全くの無垢だった。

痣や傷など、その命を絶った不吉な影はその肌の上の何処にも見当

たらない。

しかしくるりにはそうした疑問よりもまず先に浮かぶ疑問があった。

これが「ゆめ」？

胸の膨らみはすでに少女とは言い難く、そのしなやかに伸びる肢体も柔らかに描かれる腰の稜線もくるりのものとは明らかに違っていた。

これまで何もかも共に成長してきた、それなのに

「……「ゆめ」、少し背が高くなった？」

気付いていた違和感。それに怯える「ゆめ」の顔。

「知ってたのに……。」

くるりがぼそりと呟く。

「「ゆめ」が怯えてたの知ってたのに……あたし何もしてあげられなかった。」

ひやりと冷たい指先がくるりの手の上に乗る。「さき」だった。

「……。」

「さき」は何も言わない。

けれどくるりは何かがとても救われた気がした。

「露歩き」が背を支えその腕に袖を通していく。

人形のようにだらりと力無く「露歩き」のなすがままに着付けされていく「ゆめ」をくるりと「さき」は無言で見つめていた。

「露歩き」が最後の帯締めに手を進めた時ぴたりとその動きを止め

る。

「「さき」…。」

「露歩き」の呼びかけにくるりの隣に控えていた「さき」がつと立ち上がる。

無言で「露歩き」の傍に近づくと「露歩き」のその手に握られていた帯を手ずから受け取り器用に手早く帯を結んだ。

「さき」の結んだ帯の形はくるりがこれまで見た事がないような形だった。

けれど蝶のように花開くその形はお洒落好きの「ゆめ」がとても喜びそうに思えた。

「すごいね「さき」。「ゆめ」もきつと喜ぶよ。」

「…全くだ。女ものの帯の結びは不得手だから助かった。」

「…得意だったらずっとする。」

人から褒められる事を嫌う「さき」が軽く皮肉を口にするのと、また音も無く立ち上がり部屋の隅に置かれている葛籠に手をかけた。

それはくるりらの数少ない荷物を入れているもので、「さき」はその中から淡い桃色に鞠の刺繍の描かれた巾着を取り出した。

それは「ゆめ」の化粧道具を入れた巾着だった。

「露歩き」がそつと「ゆめ」を布団の上に寝かせる。

「さき」はその傍らにかがみこむとその巾着の中から化粧道具を取り出し、またまた慣れた手つきで「ゆめ」の顔に死化粧を施していた。

むらなく丁寧に白粉をはたき、頬紅を己の手の甲で確かめながら「ゆめ」の亡顔に仄かな命を灯す。眼尻と眉の墨を一筆で描き、艶やかな朱で目元と唇を彩る。

「露歩き」にまたその背を支えてもらつと、今度は髪油をその手になじませ「ゆめ」の髪を丹念に梳き、また見た事のない、けれども愛らしい結い上げをこしらえた。

「「ゆめ」より上手だね、「さき」。」

「ただのたしなみだ。化粧は女の武器だからな。」

「化粧って人を傷つけるの？」

くるりの不安げな問いに「さき」と「露歩き」が幽かに笑う。

「「さき」？」

「いや、何でもない。あながちそうでもないとも言い切れないが化粧が武器というのはいわゆるものの例えだ。気にするな。」

「さき」が巾着の紐をきゅつと縛る。

そしてそれを「ゆめ」の手首に結び付けた。

「私からのたむけだ。「ゆめ」。」

「さき」が「ゆめ」の両手を胸の前にそれを握らせるように置く。

「ゆめ」を見つめる「さき」の横顔は、いつもの不機嫌なものだったがくるりにはそれがとても優しいものに見えた。

茶屋の引き戸が開けられる。

それを開けた「丸嬰」が先頭をきつてまるで行楽に行くかのような気軽な足取りで表へ出てきた。

その後をゆつくりと「ゆめ」の亡骸を抱えた「露歩き」が続く。

長閑な光景の中、純白の着物に化粧を綺麗に施した「ゆめ」はまるでこれから祝言を挙げに行く花嫁のごときに見えた。

けれどももちろんそんな事はなく、「ゆめ」のわずかに曇る顔が残酷にも幽かにその死を匂わせていた。

優しい草の匂いを含んだ温かい風が通り過ぎる。

「行ってくる。」

「露歩き」が振り返り茶屋の前に立つ面々に旅立ちを告げた。

「堯湖」がわつと泣き出すのと、くるりと「さき」がそつと「露歩き」の傍に近づくのはほぼ同時だった。

「「ゆめ」……。」

「「ゆめ」……。」

その顔にその名を、「ゆめ」を呟く。

「さようなら……。」ゆめ「。」

くるりと「さき」が囁くように同時に別れを告げた。

「露歩き」がゆつくりと背を向け茶屋から伸びる一筋の道を目指す。

「ゆめ」の純白の裾がひらりと舞い、「露歩き」が歩くことにその衣が手を振るようにひらひらと揺れていた。

くるりと「さき」は肩を付けて互いに支え合うように立ちながらその後ろ姿を見送った。

山の端に消えるまで、何処までも、何処までも、何処までも……。

「忘れないよ……。」ゆめ「。」

くるりは呟いていた。隣でそれを聞いていた「さき」も呟く。

「私も忘れない……。」ゆめ「も」

「勿論くるりの事もだ……。」

二人は肩を強く押しあてた。

第三章 第三節

第三節

—

茶屋を旅立つ日があと数日に近づいた。

ときまきもの時巻物も時士じしもないここでは時間というものが正確にどの位経過しているのかわからない。

それをきちんと把握できているのは「闕伽注あかつく」と、おそらく「丸嬰まるえい」の二人だけ。

「闕伽注」がそろそろですと言いだしてしばらくすると、次に茶屋で奉公する者が訪れてその一行と二、三日共にすると旅立ちという事になっていた。

くるりが訪れた時も同様に何処からかの奉公の一行に出くわしている事になっているのだが、到着時に起きていた事のないくるりはその一行の顔を知らない。

くるりが知っているのは自分達が旅立つ時に出くわす方の者達だけだった。

そして今回もその一行は訪れる。

訪れは黄昏時。皆が囲炉裏をすでに囲む時。引き戸が静かに開かれ三つの影が流れ込む。シシげ児の兄妹とその下男が一人。

「皆様おひさしぶりですのオ。」

と、のんびりした声を発したのは妹の「滅歌」。

豪華な着物と装身具を身に付けているにも関わらず、何故かその中に浅黒く垢にまみれた老体を納めている醜女であった。

「……………」

隣で言葉が無いのがこちらこそ弟、いやむしろ孫娘なのではないかと疑いたくなる女装の兄「滅宵」。

天女のごとき美貌と風貌であるが、その生白い自分の腕に思い切り牙を立てて血を滴らせている様は鬼女にしか見えない。

「……………」

同じくその隣で言葉もなく、木の実のように膨らんだ体をわずかにふるふると震わせているのが下男の「愚鼠」。

この下男は一切の言葉を知らないので喋らない。

つまりこの一行でもっぱらくるり達と話をするのは妹の「滅歌」だけだった。

「あれまあ見ない方がお一人。それに見えない方がお一人。」
早速「滅歌」が会話を始める。

「そうじゃったかあ…「夢ノ中」ちゃんはお亡くなりにな…。」

「滅歌」が目じりを手巾で押さえながら呟く。

「あの……………」

自己紹介をすでに済ませた「堯湖」がそんな「滅歌」に質問する。

「はい？何でしょ？」

「えっと……………兄上様は大丈夫なんですか？」

皆が部屋の隅に蹲る「滅宵」に目を向けた。

自分の腕を何度も何度も噛み直し、真っ赤な衣を着るかのようにぐっしりと衣を濡らしている。

けれどその顔には全く苦痛の歪みが無く、その瞳は炯々（けいけい）と薄闇の中でもぎらついていた。

「それに心なしかその……………もしかしたらただの自意識過剰なのかも

しれませんが、僕の事すごく見ているような気が…。」

「堯湖」が恐る恐る呟きその体を左右に動かしてみる。
するとその動きに合わせて「滅宵」の瞳が左右へと揺れた。

「いやはや、やはりお気づきになりましたか。」

「滅歌」がわずかに恥ずかしげに微笑む。

「儂もじゃが、兄者殿も「生人」の人食種でしての。」

しかも兄者殿は儂と違って喰い気を抑えるのがとても苦手じゃ、
じゃからあやって自分の腕を堪えとるんじゃ。あんたはと
っても美味そうじゃからのお。」

「堯湖」がぴしりと石のように固まる。

そんな「堯湖」を無視して「滅歌」が一つ溜息をつく。

「しかし、本当に残念じゃったわ。」

「「夢ノ中」ちゃんもとっても美味そうじゃったのに…。」

その夜「堯湖」が「露歩き」に添い寝を懇願しているのをくるりは
見た。

明日は旅立ち。だから今日が最後の日。
お別れを告げる最後の日。

「行くのか？」

「さき」だった。

いつもと変わらず縁台に腰掛ける「さき」。

その後ろの方で「愚鼠^{ぐそ}」が箒をもって掃除をしていた。

「丸嬰」と「滅歌」は何処かへ出かけていた。

その後を追うように「露歩き」と「堯湖」も「厭山^{ようざん}」へと出かけていた。

「滅宵^{めつぎょう}」は「滅歌^{めつが}」がいなくなると抑制が効かなくなるからだ。

その事実を知った「堯湖」は半狂乱を起こしながら逃げるように出かけて行った。

その「滅宵」はというと

「あれ。狂も奉公ありました。」

何の抑揚も露ほどの感情もない深みのある男声。

くるりが振り返ると、そこには焦点の定まらぬぼんやりとした顔の「滅宵」が立っていた。

天女のような衣の袖を襷掛けして腕も露わに盆を片手に持っている。

「生人」のいない環境での「滅宵」は大人しい人型だった。

くるりはこくりと頷く。

「うん……今回から。それで今からお別れに行くの。」

「ふうん。」

「滅宵」が興味なさそうにとりあえず一応相槌を口にする。

「じゃあおげんきで。」

「滅宵」はそう言っただけで茶屋の方へと向かった。くるりがあわててその背に言葉を投げかける。

「違うよ「滅宵」。向こうの人にお別れを言いに行くの。あたしは戻ってくるよ。」

その言葉に「滅宵」が振り返る。

「どうして。」

能面の顔に能面の声。

言の葉がすぐに意味をなして聞こえない。くるりがわずかに首を傾げる。

「キヒツ。」

「滅宵」が口元だけで気味悪く嗤った。

「はいはいはい「ほろよい」さん変なこと言わない。くるりさんもさあいつてらっしゃいさようなら。」

いつの間にか「滅宵」の後ろに、いや確実に突然出現したと思われる「あかつく閼伽注」が「滅宵」を茶屋の中へと押していった。

「尻さわるな。すけべい。」

「すけべいってあなた殿がたでしょう？」

それにおしりの一つやふたつさわったところで滅りもしない滅りもしない。

「てなでなで触ってたらやっぱりすけべいだ。ふざけるな。」

「まあまあまあいいからいいから。」

「何がだ。」

「滅宵」が全く抵抗感の無い声で反論しながら「闕伽注」と共に茶屋の中へと消えた。
穏やかな静寂が訪れる。

「気にするな。」

「さき」が静かに呟く。

「「滅宵」の言った事もあたしの事も、もう何も気にするな。」

「さき」がゆっくりと立ち上がる。

「くるりの好きにしろ。」

同じ目線の「さき」。真っ向から瞳の遺志がくるりに伝わる。
くるりはわずかに頷き一言告げた。

「わかった。」

三

何かが動いている。
いや、蠢いている。

生きている感じじゃない。

死に近い負の力。

白と黒の絶対世界。

その隙間を縫う淡い揺らぎ。

あれは紅。

あれは何？

くるりがいつものように無き原の道を進んでいると、それは地を震わせてくるりを警告した。

まるで来るなというように……。

まるで早く来いというように……。

しばらく進むと地の振動は無き原の白砂をさざ波のごとく波立たせていた。

音のないはずのその世界を啜り泣くような白砂の波が波紋を広げていく。

くるりはその波の中を往く。

その砂はくるりの足を取る事無く、むしろ後押しするかのように流れていく。

くるりは川の流れの上を歩くかのように山を目指した。

そして辿りつく黒い山、そこに匂い立つ淡い紅。

あれは、何？

白と黒しかない世界。

けれどここであの色を見た事がある。
あれはそう、奈落の底。

あれはそう、奈落の煙。

「来るなッ！」

悲痛な叫び。血を吐くような拒絶。

くるりは楼の階段の半ばで躊躇した。

しばらく待った。返事はない。

くるりはまた一段、一つ上の台へと足を移していた。

「お願いだ…。来ないでくれ…。」

くるりはぴたりと立ち止った。

上の様子を窺うが、奈落の煙が楼の中にも立ち込めている事しかくるりにはわからなかった。

「お別れだ……。」

絞り出すような「屍」の声。その声音には全く再会がある事を告げてはいなかった。

その言葉と声音がくるりの心に突き刺さる。

それはあたしの言葉だよ……。

どうして「屍」がそれを言うの？

「どうして…。」

くるりは呟いた。

「どうしてッ！」

くるりは叫んでいた。

しばらく「屍」からの返事はなかった。

その静寂の合間を「屍」の鳴咽が苦しげに満たす。

「俺はもう……奈落に堕ちるんだ。」

くるりの体をひやりとしたものが通り過ぎた。

奈落。

溜息をつくような冷たい風と、心を欲しがる赤黒い煙が蠢くあの中に…。

あの中に…あの底に…「屍」が

堕ちる…？

「どうして？」

くるりは呟いた。

「どうしてッ！」

くるりは叫んでいた。

「くるりが…恋しいから…。」

くるりは身体全体で震えを感じた。

くるりの前から全てが消える。音も色も世界も全て。

あるのはただ「屍」の声。

あるのはただ「屍」の心。

「「縁」が切れたと戻っていったくるりを想った…そしたら…」

くるりは飛ぶように駆けあがっていた。

もうその音も、その衝撃も、何も感じない、ただ心のままに……。

「……どうしようもなく……」

上に昇るにつれて深みを増す紅の闇。

息もつげない、熱くて止まない紅の闇。

けれどくるりはそれを何も感じなかった。

くるりの前の全ては消えていて。

楼の中へと駆け上がる。

「「屍」ッ！」

立ち込める闇の幽か向こうの舞台の上に立つ影法師。

背後の数珠簾がばらばらと引き千切られるように飛び散り消える。

着物をはためかせた「屍」が驚きとも哀しみともつかない表情を浮かべていた。

「くるり…。」

見開かれた漆黒の瞳から一筋涙が流れていく。

くるりが「屍」に向かって真っすぐに駆け出す。

「屍」は泣きながら、しかし穏やかにくるりに向けて微笑んでいた。
「有難う…。少し辛かったけれど……それでも人を好きになれてよかった…。」

「屍」の頭の上を影を伴う煙が襲う。

くるりが舞台に踏み込んだのと、その煙が「屍」に巻きつくのとは同時だった。

あと一歩という所で「屍」の体が宙を舞う。

「来るなッ！くるり！」

拒絶の言葉。でもためらわない。もうあたしは

くるりの好きにしろ。

「あたしの好きにするっ！」

くるりの体も宙を舞った。

わずか下には「屍」がいる。

くるりが手を伸ばす。

もっともっと伸ばす。

「屍」がわずかに腕を上げる。

くるりがその腕を掴む。

そして互いに引き寄せ引き合い一つになった。

「一緒に行くよ……「屍」。」

「……。」

「ずっと一緒だから。」

「……うん。」

安らかな顔をして堕ちていく二人を獰猛な紅の闇が幾重にも覆いかぶさる。

幾重にも、幾重にも、幾重にも……。

やがてそれは奈落の闇へと消えて静寂がまた世界を包み込んだ。

それから少し後、静寂を破りこの奈落から一つの御魂が天界へ昇った事はまた別のお話。

また別の、記録にも残らない冥獄の小さな散話の一つのお話。

第三章 第三節（後書き）

終心表明

うーわア~~~~、どおもです。銃です。はずいです。

何がかと言いますと、この作品がです。

あれです。今年の夏のパソコントラブルの最中に本当（？）の終心表明を完全に抹消してしまい、新たにここにしたためようと勇み足をしたのはよいのですが、読めば読むほど恥ずかしくなり途中で投げ出したという次第です。

……お話書くのって難しいですねえ……。どおにも客観視出来ないの
で独りよがりかつ誤字文法はてなな現象が多発しており恐縮の限り
です。しかも中置も途中から書いてませんしねえ……。何とも中途半
端な酷い作品。（最後まで付き合って下さった方感謝です。）

しかしこれ……自分どんな気持ちで書いていたんでしょうねえ……。

今から2年前位でしたかねえ……。？書いたのは……。

何やら変な話ですねえ……。 （あとちよつとクサイ。故にはずい。）
まずいです……。作者なのにこの作品の事を何もわかっておりません。
故に何も解釈できません（死）すみません。
皆さん適当に解釈してください。

さてさて三部作とか銘打っちゃっているこのお話ですが、果たして続
くものやら謎でございます。ぶっちゃけ最近多忙と他趣味に走りま
くり創作活動皆無です。

予定では次は「ゆめ」のお話です。

「ゆめ」が墮^{だなんえん}烏苑に遊び死に至るまでのお話です。（極彩且つ暗い
です。例えるなら熟れすぎた果実です。）

最終部は「さき」のお話です。

「さき」の前世と冥獄での生活を交錯させながら、「縁」を失った「さき」の顛末を描くお話です。（終始暗い予定です。例えるなら廢墟に飛び散る褐血です。）

はい、実はこの第一部が一番はつぴいえんどだったりします。（これではつぴいです。自分の幸せレベル超低いです。）

まあそんな感じでいつ世に出るものやらでございますが、もしご興味ある方ございましたら半年周期位で（酷い）投稿しているか確認下されば有り難やです。
ではまた…。

月22日

2009年11

銃・

というのが前回の後書きでした。
という訳で今回の後書きです。

どおもです、銃です。

現在としましては、まあ前回よりは第二作「冥獄抄散話 儚ノ中」も進みました。

が、まだ半分超えた位です。

時系列で見てもまだ「くるり」が初めて「屍」の手を見た所まで行つてません。

「とばねき」すら死んでません。

ものつそいトロイです。

あれですねえ…ちよつと今就活頑張ってる感じでして、頭が創作に中々回らないですよええ…。はい、不況です。見通し悪しです。

まあぼんやりシナリオは頭の中に出てくるので、いずれは世に出ていけるのではないかと思います。（ただトロイ）

という訳で「冥獄抄散話 狂」でした。

という訳で「冥獄抄散話 儚ノ中」、紹介も兼ねて「序」だけ数日内にまたうpしたと思います。

あとかなり昔に書いたつじつまはてなな「堯湖」のくっらい少年時代の番外編も近日中にうpしたいと思います。

そんな感じです。

ではまた…。

2日

2010年3月1

銃・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8017j/>

冥獄抄散話（めいごくしょうさんわ） - 狂

2010年11月16日09時21分発行